
間違える人と間違えている人の違い

狩人二乗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間違える人と間違えている人の違い

【Nコード】

N5449K

【作者名】

狩人二乗

【あらすじ】

何かを必ず『間違える』……そんな人たちが、全人口の100%を占める街。そんな街の中、私は幼馴染の雄二や、好きな人への告白とかで割と充実な高校生活を送っていた。（ガールズラブなのですが、その注意がかすむ程の変態がこの作品にははびこってまゝす。ガールズラブ云々よりも、そちらに気をつけてください。因みに不定期更新です。二週間はあけないつもりでいます）

プロローグ

「好きです」

屋上での告白なんてものを現実世界でやり切れるとは到底思っていなかったけど、四月二十日十二時五十分　今私はこうして好きな人に告白することが出来た。いやー、あれだね。ここまでが長かったね。朝早く起きて下駄箱にラブレターなんて一昔前の遺産と化してるみたいな方法でクラスの中じゃおとなしめの……草食系って言っただっけ。まあとにかく私はこうして自分よりも身長が頭一つ分くらい小さくて可愛い可愛い萩原さんに告白することに成功したんですよ。……『さん』付けにツッコミを入れるのは野暮だから何も言わないでそっとしておいて。いやね……正直同級生とは思えないくらいいちっちゃいのよ、私の好きな人。でもかと言って他の呼び方したら同級生としてのプライド傷付けるだろうし呼び捨ては……さ、さささ流石に……恥ずかしいからさ、とりあえずの処置として『さん』付けておくことでお一つ宜しく願います。

「……………」

そんなことを思いながら、恥ずかしさで顔を真っ赤にしてる私が無理矢理顔を萩原さんの方向へ向けたのだけど、ここで私はおかしなことに気が付いたんだ。

口をポカンと開けて、啞然としてる萩原さんのかいがいしい姿がそこにあっただの。ちよつと萩原さん。そのポカーンってなってる口止めて。人差し指突っ込んで舐めさせたくなっちゃう……なんてことは一切切思っていないからそのつもりでね。本当だよー。信じてよ全世界の皆ー。

「……………めぐちゃん」

私が妄想という名の想像に歯止めを効かせようと頑張っていた所、萩原さんが私を『ちゃん』付けして呼び掛けてきた。うわー。「めぐちゃん」だって。皆からよく呼ばれてるあだ名だけど、萩原さん

に言われたら感慨深いものがあるね、うん。

意中の人からのちゃん付けに感動した私だったけど、何とか気持ちを立て直して「……やっぱり、駄目？」と萩原さんに聞いたの。こつこつという場面の会話の切り返して大事なのが否定疑問文で言うことだと私は思う。ここで「私の告白、嬉しかった？」なんて聞いたらなんか調子こいてるウザージョっぽくなっちゃうと思うからさ、私やっぱり下手に出て会話はした方がいいんじゃないのかな、かな。

「いや……駄目とかじゃなくてね……その……」

すると萩原さんはもじもじと両の手の指を計十本交錯し始めた。

あ！ これは萩原さんが考えてる時の癖だ！ 授業中とか昼食中とか掃除中とか下校中とかプライベートタイムとかその他諸々全部の場面で萩原さんを見続けた私の洞察力は、萩原さんの今の一瞬の動作をそう判断したの。

萩原さんは、何かを考えてる。

じゃあ、何かあって何？

告白に対する返事？

……それなら、いいなあ。

でも多分、違うんだろうなあ。

「……返事、聞かせて」

「返事……って言っても」

「駄目なら駄目でいいの。私はそれでスッキリ出来るから」

「……そりゃ、めぐちゃんはスッキリ出来るよ」

私が覚悟を決めて放った台詞を、萩原さんは困惑したような表情で応対した。それを見て、私は半ば諦めた自分の感情変化を知ったの。

あーあ。

やっぱり、萩原さんも駄目なんだ。

「だって……めぐちゃん。私、女だよ？」

萩原さんは。

私を 存在自体が信じられないようなものを見るような目つき

で見ながらこう言っただけだ。

「私は萩原さんが女でもいい。ううん。寧ろ、萩原さんは女じゃないか、駄目なの。私は、女の子が大好きだから」

「……めぐちゃん」

私が真剣な表情で、同性に向かって告白した事実を十二分に理解したのか、萩原さんは私に目を合わさずに屋上から校舎の四階へと行ける出入り口の扉へと手をかける。

「めぐちゃんは、そういう間違い方をする人だったんだね」

ドアがガチャンと閉まって姿を消す前に、萩原さんは風でなびく髪を抑えながら私に向かってボソリとそう呟いたように見えた。

「はあ。何よ……私の性癖の何が間違いだっていうのよ！」

私を照り付けるサンサン太陽様様に向かって私は叫ぶ。怒りや無念、他の気持ちも感情も全部引つくるめて吐き出した。

その通りだよ、萩原さん。

私は、好きになる相手の性別を間違えてるらしいんだ。

プロローグ（後書き）

！
！
！
！

図らずも、ガールズラブ作品になってしまいました。えー、すいません。どうしようもありません。もういいよ……これはガールズラブ作品だよ（泣）！

「あ、あーちゃん？ 私。私よ私。私以外の何者でもない私、それが私」

「私私サギとかの対象になりそうだからその私連弾やめなさい」

「ごつめーん。まあまあそんなことはどっかのどっかに置いて」

「……って、またウチあんたの話聞かなきゃ駄目なの？ 正直今忙しいんだけど」

「え、え、何してたのー？」

「逃走中で走りまわってるハンターのサングラス取った顔想像してた」

「……でねでね。今日さ、朝下駄箱に着いたらめぐちゃんから手紙が入ってたの」

「流石ね、あんたのそのスルースキル。ウチも今からそれ身につけてあんたの話し全部スルーしていい？」

「ダメ」

「じゃあ逃走中のDVDを全て買い揃えなさい。そうしたらウチはあんたの話し聞くことにする」

「んぐ……ねえあーちゃん、今更んだけど逃走中って何？」

「あんた……逃走中を知らないの！ 信じられない信じられない信じられないっ！ ……ま、まあいいわ。溢れ出るウチの怒りを抑えに抑え込んだ状態で逃走中の大体から細部まで全て余すことなく説明してあげる！ まず逃走中のおおまかなルールはこの二つ！ ハンターって呼ばれる黒い男の人達に指一本触れたらそこで終了ってことと、制限時間内に逃げ切れれば賞金が手に入る」

「でね、めぐちゃんが何で私の下駄箱に手紙入れたのかなって思ってたんだけどとりあえずとして手紙開けてみたの」

「……ちよっと待って。ゴメン、ウチ、何か涙出てきた……この涙に詰まってるものは何？ 怒り？ 悲しみ？ 絶望？」

「きつとイソフラボンだよ！」
「ん？ イソフラボンって何？」
「豆乳とかに含まれる成分でね、イソフラボンいっぱい摂取するとおっぱいでかくなるって話し聞いたことあるんだー」
「……その話しの結論は、一体何処に結び付くの？ 大声で泣き散らしていい？ ウチ、この夜中に大声で自分のコンプレックスに対して泣いていい？」
「全力で泣いちまいなあ！ 私はそれを……あーちゃんの歎きを私のデカイ胸で全力で受け取めてやるよお！」
「来週の月曜日、覚えときなさいよ」
「あ……あれ？ あーちゃんの声がより一層低くなつたよ？ 何で？ どうして？」
「……いいから話し続けなさい。今のウチを放っておくと、何するかわからないよ……フッフッフ、アハハアハハハハ！」
「ああ……あーちゃんが小さい子供を誘拐したホラー映画の幽霊並に叫んでるよ……。いいぜ、私はそんなあーちゃんも受け入れてみせる！ 私の豊満なボディーで！」
「ゴメン、元の話題に戻して。今のウチ、活動限界とつくに越してるから」
「ひゃー。無茶苦茶怖い声だけど了解だよあーちゃん。えーと、めぐちゃんから手紙にはね、『今日の昼放課、屋上に来てくれない？』って書いてあったの」
「ふーん」
「で、私コクられた」
「何があつたの！」
「え、だから、屋上に行つて」
「屋上に行つて！」
「めぐちゃんが赤い顔で居て」
「めぐちゃんが……あ、赤い、顔で、居て！」
「コクられた」

「何があつたのさあんたら二人おんどれらそれレスだろコリア！」
「ちよ、ちよつとあーちゃん、また間違えてるよ。落ち着いて落ち着いて」

「あ、はあ、はあ……また、やつちゃったね……もう、何よこのウチの『間違い』……緑色ならもつと落ち着いたのが良かった……」
「うんうん、そうだよー。一番軽い症状の筈なのに、『心に思つたことをそのまま話しちゃいけないのに勢いで話しちゃう』って間違い……」

「……微妙過ぎるわね、これ」

「うー、ま、まあさ、いいんじゃないのかな？ 素直なあーちゃんを、私は嫌いじゃないよっ」

「……ありがとう」

「因みに私の間違いは、『本当のことを言おうとすると嘘を言ってしまう間違い』なのです」

「さよなら。今まで楽しかったわ」

「ああ！ 死なないで！ 死なないでよあーちゃん！ この言葉も嘘になっちゃうけど死なないで！」

「……もういいわよ。あなたの『間違い』そんなんじゃないし。寛大なるウチの存在を崇めなさい」

「うん凄いい！ 流石あーちゃん太っ腹！」

「……あんたそれ、褒めてるのよね？」

「うん。事実だし」

「……で、告白されてあなたはどうしたの」

「いやーですね、恋人居ない私が言える立場じゃないかもしれないけど、流石に女の子同士は駄目かなーって思ったから断っちゃった」
「うーん、まあそれでいいんじゃないの。受け入れるなら受け入れる、断るなら断るでキツパリした方がメグの奴にも良いことだと思っよ」

「……」

「ん、どうした、無言になって。珍しい」

「いやさー、それがさー、断り方が悪かったせいかさー、めぐちゃん泣いててさー……それがさー……ちよつとさー……」

「……そう。どんな断り方したの、あんた」

「めぐちゃんの間違いはそういう間違いなんだねとかなんとか言っただ気がする……。めぐちゃんは、女の子を好きになるのが間違いないと思つてたのかも……。うん、女の子が女の子を好きになつたつて悪いことなんて何も無いんだよ、きつと……。それなのに、私は間違いないか言っちゃつて……」

「何言つてんの、あんた」

「へ？」

「『同性を好きになる』つていう間違いを、メグは持つてるんですよ。じゃあ間違いないだつて　女が女を好きになるつてことは」

「そ……そんなことないと思うよ、あーちゃん！」

「女と女が付き合つて、子供は産めるの？　産めないわよね、所詮人間なんて子孫のこして当然の生き物なの。だから、女と女　男と男が付き合うなんて『間違い』なんだつて」

「そんな……そんな酷いこと……」

「酷くない。ウチは正論を言ってるだけよ。だからあんたがどんな言葉を言つてメグを泣かせたつて、それは悪いことじゃないの。悪いのは、メグの方なんだから。だから……あんたは悲しむ必要なんて、ないのよ。ほら、堂々としなさい。あんたのテンション低いとつまんないからさ」

「……うん。ゴメンね、こんなテンションで」

「テンションの低さをわざわざ謝る必要はないから。来週の月曜日、学校では明るく振る舞いなさいよ」

「うん、うん……」

「わかつたならよし。それじゃあウチ、逃走中のDVD見るから。今日はこれで」

「あれ？　DVD持ってたの？　じゃあ私買う必要ないじゃん」

「パソコンで逃走中のDVDのパッケージを閲覧するのよ」

「…… どんだけ欲しいのあーちゃん」

「喉から手が百本出るくらいね」

「冗談に聞こえないのが怖いよあーちゃん……じゃ、じゃあね。あ、明日土曜日だよ。久しぶりにカラオケ行かない？ 恋人居ない同士」

「ウチ、彼氏居るけど」

「……え？ 何か言った今？ それとも幻聴？ ゴメンあーちゃん、何か言ったならもう一回言ってみて」

「ウチ、彼氏居るけど」

「……いつよ……いつのことなのよそれ！」

「一週間前だね」

「言うタイミング遅いよ、あーちゃん！ え、あーちゃんさんって彼氏居るんですか！」

「何故にさん付けよ。うん、居るわよ。まあまあカツコイイから私的にも嬉しい限りね」

「……あーちゃん様！」

「何故に様付けよ。そして今更だけど何故にちゃんの後に様を付けてるのよ」

「彼氏、ください！」

「嫌よ！」

「畜生……何だよもう……世の中腐ってやがる……」

「完全にキャラが変わってるわね、あんた……。ゴメンゴメン。明日、カラオケ行こ。それで機嫌直して」

「……明日は叫ぶぜ！ 彼氏持ちの隣で彼氏無しが叫ぶぜ！」

「わかったわかった。それじゃあ明日。またいつもの駅前に十時集合ってことで」

「わかった！ んじゃね、あーちゃん！ おやすみ！」

「それじゃあね」

「……」

「……」

「……………」
「ふう。切ったかな、あいつも。……鬱陶しいな、メグの奴。女が女を好きになるなんて有り得ないでしょ。そんなの押し付けられたって不快感積もるだけだって。ああああ……ウツザ。ウザ過ぎて涙が出るわよホント……それなのにのほほんど雄二君と喋りやがって……その上幼なじみ？ ざけんなよ、お前。ああああ……。彼氏？ はん、居ないわよ……居たけど居ないのよ……一周間に別れたのよ！ また言うタイミング間違えた……隠してた彼氏に一周間にフラれたって言えばそれで済みだっただのに……雄二君……ウチにはもう雄二君だけなの……なのにあいつが……あいつが！ ああああ！ もういい！ もういいの！ ウザイウザイメグウザイ！ ああああ、よし。イジメるか。あいつ、ウザいし」

金曜日

私が住む街には、必ず何かを間違える人が全人口を占めているらしいのさ。

例えば、朝起きる時間を間違えたり　パンに塗るマーガリンをサラダ油に間違えたり　足し算を必ず間違えたり　人を人として識別するのを間違えたり　そんな風に、軽い症状もあれば、重い症状もあるのよ。

そんな人達が、百パーセントの割合で、この街には住んでいるの。百パーセント。

一カケラの例外も認めない、この割合。

因みに、私を知る中で一番酷かったのはやっぱり『覚えた筈の記憶を全て間違えて記憶する』って人だったね。危険度も、緑色

黄色　赤色の三段階で迷うことなく赤色指定。スポーツくらい軽くしてそうなデカイ男の先輩だったんだけど、全く何もかも覚えられないの。勉強も、スポーツも、朝学校に通うことだって難しい……しかも、覚えた筈の人の名前も顔も絶対に間違えるから、お母さんとお父さんも間違える……そんな人生を歩んでた男の人を、私は知ってるの。

でもね。その人のすごいところは、そんな間違いをするのにも関わらず、ちゃんと高校を卒業したことなんだ。勿論、国からの補助もあつたよ。赤色の中でも特に危険な間違いを犯す人だったからね、補助金もたんまり貰ってたんだとか。

それでも。

補助金なんか貰っても。

あの人には、全く関係ないことだったんだよね。

だってあの人は、お金の価値すらも間違えるんだから。

けど、ね。

あの人は、周りが心配するくらい必死になって勉強して勉強して、

なんとかギリギリだけど留年を一回もせず卒業出来たんだよ。卒業式の時は涙物だったな。本当に幸せそうに笑いながら、「俺、最悪！」って叫んだからね、あの人。その言葉を聞いて皆、あの人があんなに努力したのかわかったみたい。

「てな訳でありまして」

かくいう私は、その姿を見て、自分に正直に生きることにしたのであります。

昔っから私は、女の子が好きだったのよ。初恋は小学校二年生の頃。むちゃんこ可愛い女の子が居てね、えくぼが最高だったなあ。

あの子のえくぼはよだれ物だったね、うんこれマジで。でもこのことをお母さんに話したら、お母さんが直ぐに病院へ私を連れていったの。「お医者さん！ 娘の『間違い』を、教えて下さい！」って受付で叫んで。その時のお母さんの顔……私は、正直怖かった……。「お子さんの間違いは、『好きになる相手の性別を間違える』……というものです」

眼鏡が似合う美人で若いお医者さんが、お母さんを見ながらこう言ってた。

それからの記憶は私の頭からぶっとんでる。多分、ショックだったんだと思う。

だって私は、この気持ちが　この初恋が　間違いだって言われたんだから。

それからお母さんに「メグの間違いのことは、絶対に他の子に言ったら駄目よ！」って念を押されまくったの。

私はその時思ったね。

そ、そこまで駄目なの、私のこの気持ち？

ええはいはい、その後私は頑張ってこの気持ちを抑えました。小学生の頃からこの衝動を抑えなきゃいけないなんて、軽く自殺物だったね。

だから私は、一回自殺をしようとしたの。家の二階のベランダから、頭を下に向けて。幽霊になって、天国に行ったら、この私の『

間違い』を認めてくれるのかなー、なんて淡い希望を胸に抱きながら。

当時小学三年生。

遺書には『わたしが女の子を好きなのはまちがいなんかじゃない！』って平仮名ばっかで大きくデカデカと書いた記憶があるね。もう、最後だから私の間違いを全国にバラしてやる！ くらいの気持ちで書き殴ったの。

で、私は。

結局、飛び降りませんでした。

理由は今、私の部屋の中で胡座をかいてるこの男にあるのです。

「何が「てな訳でありまして」だ。いきなりどうしたよ、メグ」

「うるさい。気安く私の体に触らないで」

「俺の手は今俺の膝の上にあるんだけども！」

「あー、うつさい。黙れ狼。男は皆、狼なのよ」

「……じゃあお前は、何でその狼を無用心にも毎日毎日自分の部屋に入れてるんだ？ ま……まさか……メグ、お前、とうとう俺を好きに」

「しょうがないじゃん。幼なじみなんだから」

「……しょうがないの理由が微妙過ぎるだろお前」

私の部屋の床に、何の抵抗もなく胡座をかいているこの男こそ、私の幼なじみであり同級生であり、かつ命の恩人っていうとんでもないくらいの肩書持つてる奴。

名前は、田中雄二。

私を好きだと言ってくれた、男の名前。

「ねえ、雄二」

「ん？ 何だ？ どうした、そんな泣きそうな顔して」

「今から言う言葉に驚かないって約束してくれる？」

「お、おう。約束する」

「萩原さんに告白した」

「うん……うん？」

「で、フラれた」

「いきなり何だお前！」

え、何だ、あ？ フラれたってどういうことだ！ しかも萩原？ 萩原かよ！ とか何とか叫びたてる雄二のリアクションが無茶苦茶滑稽でずっと見ていたい気分になったんだけど、私が無表情な上無言で俯いていると、次第に勢いが失ってきたのか荒ぐ息を頑張つて抑えた雄二は、私に向かって、「おい」って話しかけてきた。

「何？」

「……今、お前の目の前にいる男はどんな男だ？」

「田中雄二。四月四日生まれの十七歳。血液型はA B型。父、母、雄二の三大家族。好きなテレビ番組はレッドシアター。好きな漫画はジャンプ漫画全般。好きな食べ物は真鍋かをり」

「好きなスポーツは……えっと、何だっけ？ ウサギ跳び？」

「ウサギ跳びはスポーツじゃなくてスポーツに臨む為の過程に過ぎないからな！ てかお前、重要なこと言わずに何嘘ばっか言ってるだ！」

真面目に答えるよ！ 頑張つてテンション上げてるけど結構心傷付いてるから俺！ とかなんとか喚く雄二が哀れに見えたんだけど、とりあえずそれを無視して私は雄二の言う通り、田中雄二という残念な人間を構成する上で必要なことをピックアップして言おうとする。

「えっと……私と、幼なじみ。私と、同級生。私の、命の恩人。私より、身長が低い男」

「最後がっ！ 最後さえなけりゃあ俺はもう一度お前に惚れ直した！」

「じゃあ私万々歳だ！ やったね！」

「ただだけお前は俺のことが嫌いなんだよ！」

「カキピーの……演技力くらいかな……」

「アイドルの本名言えないからってあだ名言ってまで俺をけなした

いのか、メグは！ 確かにカキピロの演技力微妙だよ！ 青春ドラマとか東大目指すドラマとかではまあまあイキイキしてたから表情がくずれてたし、シロサギを食う黒いサギの話ではクールな表情がかっこよかった！ でも医療ドラマとか美少女をプロデュースする話とかでは」

「黙って、雄二。うるさい」

「……理不尽って……こういうことを言うのかもしれねえな」

私が一言冷たい言葉を放つと、雄二は窓の外を眺めながらハッハッハ……って放心状態になった。やめてほしいね。床に座った状態で口開けてもらうと、ベッドに座って雄二を見下ろしてる私の目に雄二の喉チンコが見えるからさ。あ、チンコって言っちゃったよ。私、女の子なのに！ 美少女なのに！

……つとまあ、軽い戯言はさておき。

「とにかくさ、今私は萩原さんにフラれて放心状態なの。だから明日私と一日付き合って」

「ハッハッ……何だって！ 今！ メグが！ 俺に！ 付き合ってって言っ」

「ゴメンね、雄二。やっぱり私、明日アラちゃんと遊ぶことにする」「すみませんでした！」

そう言いながらいきなり土下座する雄二。どうやら本気で私がアラちゃんと遊びに行くのを阻止したいみたい。どんだけ私と休日遊びたいんだ、こいつは。ひくよ。流石の私でも、ひいちゃっよ。

……まあ。

だから私は、雄二を毎日部屋に呼んでるんだと思う。何を言っても 私が女の子を好きだと知っても 私を好きだって言うてくれる雄二とはいつも一緒に居られるから。

「……わかったよ。ゴメン、私が言い過ぎた。土下座なんかやめて、雄二。改めて頼むね。明日、一緒に服とか買いに行かない？」

「……ああ！ 行こうぜ、メグ」

私がそう言った瞬間に、「やった、メグと一日デートだ！」って

本人目の前にして大声出してる雄二だったんだけど、そういう顔が本気で嬉しそうなくらい輝いてたから私は何も言わずにじっとその姿を見てることにした。男の子の笑顔なんて見たって何にも全くさっぱり感じない私だったけど、雄二の笑顔は、なんか、上手く言い表せないけど、良かった。あ、言わずもがな、女の子の笑顔は最高だよ！ 特に美少女！ もう一度言うね。美、少、女！ 顔が良ければ何をしても許される……その上スタイルが良ければお金だってもらえる……更に髪がさらさらでクリーム色の肌がスベスベそうである……ああ、そんな完璧な女の子居たら、絶対に私、その娘を好きになるよ！ 寧ろ貢ぐよ！ ヒモになる精神だよ、私は！

「ところでよ……って、何だメグ。その気持ち悪いくらいの笑顔は」雄二に言われて、私は自分が自分の妄想で興奮してることに気付いた。いつけない、流石にこりや駄目だね。朝の電車の中、平気で出会い系サイト閲覧しときながら、その後平然とお母さんに向けて『いい天気だね』ってほのぼのとメールしてるおっさんかって話。「……何でもないよ。ちょっと、妄想してた」

「妄想ってちよつとのことだったっけか！ ていうか俺とかが居る前で妄想を平然とするな！ お前は朝の電車の中、平気で出会い系サイト閲覧し」

「あ、ゴメン。それ先に私の一人称語りで言っちゃった」

「一人称語りってどういう……ああ、もういい！ お前の言葉にいちいち突っ込んでたら話が進まねえ！」

「いちいち突っ込む？ やっぱり男は狼だ……この変態！ 最低！」

「言葉にだつての！ 変態も狼もお前のことだろ！」

「最低は？」

「ああん！」

「最低は、誰のこと？」

「……誰のことでもねえよ……メグは……さ、さ、さい」

「サイ？ カイジでも読んだ？」

「地獄チンチロのことかよ！ 違えよ！ お前は……っ……最高な

んだよ！」

「ふーん。ありがと。で、雄二は何を言おうとしたの？」

「俺の告白が！」

言いながら泣きだしそうになる雄二を指さして爆笑っていう形で私が受け入れてあげたら、雄二がもう一度放心状態に入りかけた。こりゃヤバイねと危険信号鳴らした私は、「私も雄二好きだよ。お母さんが居なくてしかたなく食べた三食カップラーメンの後、夜食に食べるカップラーメンくらい」って言ってあげた。雄二はとうとう泣き出しちゃった。え、私、何か言った？ 美味しいよね、カップラーメン？

「ヒツ……グスツ……俺が必死にアプローチかけてるのに荻原に告るってどういうことだよ……」

私は涙ながらに何かを言ってる雄二の姿を、あえて無視した。「男なら泣かないでよ、雄二」って上から目線で雄二をあやしなから

だからさ、雄二。

私は、必ず女の子しか好きになれないんだって。

でも……なんだろう……。

雄二が泣いてる姿を見て、目を細めてる私の姿に、私は嫌が応でも気付かされた。

た。真ん中に髑髏をあしらった服の上に赤いパーカーっていうなんとも凄まじいセンスをした人だったんですよ、これが。

「おいねーちゃん。こんな所に一人で突っ立って何してんだ？ 時間あんだろ？ ちよっとツラかせや。叫んだって無駄だぜ？ 叫ぶ前に俺がねーちゃんの口を塞がせて貰うからよお」

「……はい」

そう言われた私の選択肢は一つしかなかった。いやいやちよっとその奥さん。選択肢が一つしかないっていうのは私が白昼堂々話し掛けてきたカツアゲさんに怯えてるってことじゃないんですよ。そこら辺大事な所だからちゃんとわかつておくように。

私が暗い顔で俯いたのを見て満足したのかそのカツアゲさんは「ほら、こつちだ。大丈夫だぜ。大勢で待ち伏せなんかしてないからな。遠慮せずにこつちに来い」なんていいながら私の行き先を人差し指でアシストしてきた。わざわざ自分の手際を発表するなんて物凄いカツアゲさんだなとか思った訳なんですけども、私はそれをすんなり受け入れました。

ええ、受け入れましたとも。

カツアゲ？ 大勢で待ち伏せ？

「……望むところよ」

「うん？ ねーちゃん、なんかいったか？」

「い、いえ、な、何も、言っ、て、ませ、ん。き、ゃ、キ、ャ、ー、や、め、て、助、けて、こ、ー、ワ、ー、イ、ー」

狙い通りなのが見抜かれそうだとちからカモフラージュの要領でやった演技は我ながらヤバイと思った。いくらなんでも棒読み過ぎるでしょうが、私！

流石にばれるかな、とか思って私の前を歩くカツアゲさんをちら見してみたら（驚くことに私より身長が少し上なんだねこれが）、カツアゲさんはご満悦な標準をしていた。うん、うんとかしきりに頷いてる。

どんだけカツアゲ初心者なんだろうこのカツアゲさん……。

そんなことを思いながらもやっぱり私はそのまま従順にカツアゲさんに連れていかれて、便器二つを囲んだ公園名物　白色の壁の裏に連れてかれた。正確にいうとついていったんだけど、そこら辺はカツアゲさんの顔をたてるってことで。

「ただどこで私は一度、驚かされることになった。」

「どうだ、誰も居ないだろ。俺の言った通りだぜ」

私がキョロキョロ周りを見渡したのに気付いたのか、カツアゲさんがこれ見よがしにフンと笑ってみせた。

本当に……誰も居ない……。周りに見えるのは噴水と白い壁と時より姿を表すランニング中の人だけ。その人がこちらを見ると顔を苦い表情にして颯爽と走り去ってく姿がやけに印象に残った。いえいえ、お気遣いなく。悪いのは逃げてく皆さんじゃなくてこんな場所で隠れ切れてると思ってるこのカツアゲさんだから。

うーん。ちよつと拍子抜けだけど、まあこれはこれで置いとくことにしよう。

……ああ……それにしても。

「ほら、俺しかいないから安心したんだろ？　だったら安心ついでにかにつ」

「かに？」

「ち……ちげえぞ！　噛んだんじゃないからな！　こんな大事な場面で噛んだとかじゃないからな！　……金だつ！　金だせ！」

「……………」

「な……何だよその目は！　早くしろ！　さもないとお前を……な……殴るぞっ！」

金をかにつて噛んで言っちゃったり。
脅し文句が殴るぞだったり。

な……何なのこのカツアゲさん……ああ……なんて……なんてことなんだらう……。

「ほら！　早く！　早くしろ」ラァー！

「……か」

「か？」

「か……かかかかかかか、カワイ過ぎるっ！」

「はあ！」

驚くなかれみなの衆！

なんとこのいろいろと残念なカツアゲさんは……スレンダー美人なヤンキーっ娘だったのだ！

サラッサラな肩より長い金髪にダボダボの青いジャージ。かと思えば化粧しまくりのちゃらちゃら顔っていう私が大嫌いな不良っ娘じゃなくてスツピンに近いヤンキーっ娘！ 目がとってもキリツとして見るもの全てを魅了するんだよ！ 更に唇！ 生意気にも口紅使ってるのかブククラしてて光りが無茶苦茶反射してるっ！ いろいろな皆さん！ ヤンキーっ娘っていうのは不良っ娘みたいな真性の暴虐無尽とは違ってただ意気がってるだけなんだよ！ 例えるならあれだよ！ 第二次成長期に入って急に父親が鬱陶しくなったのか『うっさい。黙ってて』って静かに言い放つ女の子だね！ 言いながら体プルプル震えてるんだよ！ 意気がってるだけなんだよ、ヤンキーっ娘は！

「はあああああ、カワイイ！ 何この生物！ 何で出来てるの、カツアゲさん！」

「は、はあ！ いきなり何を」

「ああ、そうだよ！ ピンクの妖精さんが集まって出来合がってるんだよ！ いいよ、ばらけなくて！ そのままの姿がバッチグーだからっ！」

「どんな人間だ、それ！」

「いやいやそうじゃねえだろ！ って慌てて髪をむしりだすカツアゲさんがこれまたカーワイーイー！」

そんな私の気持ちとは裏腹に……もしくはよんでか、いきなりカツアゲさんは私の肩を両手でガツと掴んで……キヤーー！

「何何何何ですか！ 押し倒す気ですか、私を！」

「ちげーよ！ いいから金出せ……さもないとどうなるかわかんね

「ぞー！」

「どうなるって……私……このままだとカツアゲさんにあんなことやこんなことをされるんですか……？」

「あ……ああ。殴ったり……殴け、蹴ったりしてや」

「あんなことやこんな……キヤー！ やったあ！」

「やったあってどういう意味！」

「なーにしたらばっくれてんですか、もう！ 私を憐れな姿にするまで二十四時間営業のこの公園で二十四時間耐久ベッティングするんでしょ！ ほら、早くして下さいっ！ 心の準備はあなたが私の目の前に現れる数秒前に完了してましたから！」

「どんな心の準備だそれ！」

「って、違う違う違うぞ落ち着け俺！ とか言って深呼吸をしたらカツアゲさんだったんだけど、ふと何か覚悟を決めたのか、ピタリと真剣な表情になってパーカーのポケットから一枚の写真を取り出して私に見せてきた。

「俺をあまり舐めるんじゃないぞ」

「な……えっ！」

それは どこかの暗闇に 椅子の上に座らされて 太い縄で両手足と体が縛られた 暗い顔の雄二の姿だった。

「雄二……雄二っ！」

「……どうだ。話を聞く気になったか？ わかったなら大人しく金を渡せ。そうしたらこいつを開放しちゃう」

また大事なところでかんだカツアゲさんのあたふたした姿に悶えたかった私だったけど、今はそれどころじゃなかった。

なんでかわからないけど、このカツアゲさんは雄二をこんな姿にしてる。

雄二を開放したければ、私が今持つてるお金を素直に渡すしかない。

「お金を渡せば……雄二は開放されるんですよね……？」

「ああそうだ。わかったなら金を渡」

「てことは……カツアゲさんに渡しが貢げば雄二は開放されるってことですね！」

「おう……って、え！」

やったよ皆さんこれほら昨日フラれて意気消沈だった私にも既成事実の上ヒモになれる日がとうとうやって来たんだよ！雄二なんかどーでもいいけど私がヒモになれるなら開放される手助けしてあげるよ雄二！

「さあ！ いくらがおのぞみでしょうか、姫！」

「キャバクラか！」

「キャバクラ行きたいです！」

「んなこと今話されても困るんだけど俺！ お、お前、百歩譲ったとしてもホストクラブだろ！」

「ホストクラブ？ はん。あんな気持ち悪い所、こっちから願ひ下げですよ」

「キャバクラ行きたいって言った女子がホストクラブを気持ち悪いっていうな！」

「え？ 何ですか？ まさかカツアゲさん、ホストクラブに通い詰めたんですか？」

「い……いや……そうじゃなくて……あんな風に男の子が俺に近付いてくれたらいいなあ、なんて」

赤い顔でモジモジしながら言うカツアゲさんのその姿に私は目の保養半分悲しさ半分っていう微妙な感想を得た。

「駄目ですよホストクラブなんて……ホストクラブ行かせるくらいなら……私がカツアゲさんをあらゆる意味で満足させてあげます！」

「あらゆる意味でってどういう意味だ！」

「決まってるでしょう！ まず、私がこの両腕を払いのけて逆にカツアゲさんを押し倒します。次にカツアゲさんのパーカーと髑髏をビリビリに破いた後はらりと見える白色のブラジャーにかじりつい」

「何妄想言ってるのお前！ てかなんで俺の……今日の、ブ、ブラ……の色……し、知ってたんだよ！」

「私の視線は美少女の服を透かします」

「今すぐ警察に行つてこい！」

あああちげーももう違つたる俺！ と言つてまたカツアゲさん仕切り直し。その一挙一動が可愛かつただけどとりあえずその気持ちを抑えて私はカツアゲさんの「いいから！ 有り金を全て出せ！」つていう言葉を真摯に受け止めた。

「わかりました。有り金全部……ですね。はい、どうぞ。こんなこともあろうかと……通帳を持って参りました、私だけのお姫様！」

「この休日に通帳持ち歩いて待ち合わせつてどうということ！」

「あ、それとも私専用のお姫様の方がよりリアルでいいかな……この通帳渡した三十分後には『めぐちゃん……私をお姫様だと思わないでいいから……乱暴に扱つて……』つて言う仲になってますしね！」

「そんな仲には百パーセントなつてない！ もういい……もういいから通帳くれ！ それでいい……つて、はあ！」

私がお姫様の要望通りに「はいどうぞ」つて通帳を渡すと、その通帳を開いて示されてる金額を見たお姫様は驚愕した。まあしょうがないよね。私みたいなナイスバディーの女の子が、こんな大金持つてるなんて思いもしないだろうし。

「こ……これ、本当に本物の通帳か！」

「ええ。真正正銘、本当に本物の通帳です」
六千万円。

私がお姫様に渡した通帳には、そう記載されている。

「う……嘘だろこれ……こんな……」

その金額に圧倒されたお姫様は、私に通帳の中身を見せながらおろおろし始めた。その隙をぬつて私は通帳をお姫様の柔らかくて食べたくなる両手の指から引っこ抜く。ネイルアートさえしていないあ、このお姫様。なんなんだろ、ホント。

「あ……」つて言つてポカーンと口を開け……やめてお姫様やめてその口私の指突っ込んで嘗めさせたくなるからやめてホント……あ

ああ……口を開けて呆気にとられるお姫様だったけど、私はそんなことを気にせずに……まあ嘘なんだけど無茶苦茶気にはなりませんが、とにかくお姫様の姿を真つ正面に見据えて真剣な表情を出来るだけつくり、言った。

「改めて聞きます。ここに六千万円あります。本当に欲しいですか？」

「……………流石に……………六千万円はカツアゲ出来ねえ。いや、カツアゲに金額の大きさは関係ねえ……………か……………。やっぱりカツアゲなんてしようとした俺が悪いつてこと……………だよな。スマネエ。すまなかつた、ねーちゃん。俺が悪かつた。この写真は、返すよ」

「……………あれ？ お姫様、やけにあっさりと身を引くんですね」

「ああ。元々したいと思つてカツアゲした訳じゃねえし……………つて誰がお姫様だ、誰が！」

「そんなの貴女しかいませんよ！ どうせ名前もなんとか姫つて名前なんでしょ！」

「俺の名前は久美だ！ なんとか姫なんて残念な名前じゃねえ！」

「何ですと！ 今から私のガールフレンドの真姫ちゃんとか亜姫ちゃんとかに謝つて下さい！」

「俺そいつら知らねーから！ てか何だよガールフレンドつて！ 生々しいんだよお前が言うと！」

「あらあら？ 何だかクミクミ、私のことを全て知つた気でいませんかね。ガールフレンドつて恋人つて意味じゃないしー。恋人候補つて意味だしー」

「結局女が使う本来の意味のガールフレンドじゃねーじゃねーか！ そもそも何だクミクミつて可愛い名前！」

「え？ クミクミが可愛い？」

「あ、いや……………か、可愛くねーし！ キモいし！」

「じゃあクミレンジャー一号で」

「限度つてもんを考えようぜ！」

そんなこんななクミクミもしくはクミレンジャー一号だったんだ

けど、結局私はクミクミもしくはクミレンジャー一号からカツアゲされていないことに気付いた。真つ赤な顔で「クミクミとか可愛くねーし！ で、でも、あれだよな！ クミレンジャー一号は流石に不本意だから！ ひゃ、百歩譲ってクミクミも悪くは……いやいやいやいやしつかりしろ俺！」とかなんとかブツブツ呟いてるクミクミ（決定！）が無茶苦茶カワイイのは当然で、つまりクミクミは美少女ってことになる。

え？ クミクミが美少女だからそれが何なんだよって？ またまたあ、何しらばつくれちゃってるんですか皆さーん。

美少女がやったことなら……何でも許されるに決まってるじゃないですか！

うん。

まあ……それはそれとしてあるんだけど。

多分 クミクミは悪い人じゃないし。

「まあまあクミクミ。とりあえず落ち着いてくださいな」

「誰がクミクミだ！」

「じゃあ組長って呼びますよ？」

「すみませんクミクミでお願いします！」

「はいよく出来ました。ご褒美に私からの熱い接吻をプレゼント！」

「そんなプレゼントだったらクーリング・オフさせてもらうっての
！」

「じゃあ熱い抱擁で」

「同じことだ！」

「じゃあ……こんなプレゼントはいかがでしょうか、お姫様」

そう静かに言った私を不信に思ったのか「はあ？」と首を傾げるクミクミがまたそそられたんだけど頑張って頑張って自分を抑制し、噴水の方を人差し指でさしてみせた。

そこには、辺りをキョロキョロ見渡したながら私を捜している雄二の姿があった。

「……あいつは」

「そうですよ。クミクミが『誰かから渡された写真』に写っていた男です」

「な……お前、なんでそれを！」

私の一言に驚いたクミクミだったけど、私からしてみれば至極当然のことだった。

他の奴が縛られた写真なら簡単につくれるけど　クミクミが見せた写真は他でもない田中雄二だ。

雄二のあんな姿なんて、普通の人が撮れる筈がないんだし。

「てな訳で。待ち合わせの十分前に到着した雄二に賛辞を送りつつ

……ちよつとそこのカフェでコーヒーを交えて話しをしませんか？」

待ち合わせの噴水前で雄二が私の姿を見た時は爆笑もんだったね。まず、オロオロして右にはめた腕時計をチラチラ見ながら捜していた私をみつけて嬉しかったのかすごい笑顔を見せたかと思ったら、その後ろで私と手を繋ぎながら歩いているクミクミの姿を見て啞然としてたんだよ。「おい……こういう状況表す時って逆ナンっていいばいいのか？」って固まった表情のまま言う雄二が無茶苦茶面白かった。まあ私がクミクミやクミクミが従える大勢の人達を口説こうとしてトイレまでついていったのには間違いないから必ずしもしてないとは言い切れないんだけど、実際はナンパはしてないしされてもない訳でありまして。ちょっとそれが残念な所かな。女の子にナンパされたいって思う人はこの世の中にはいっぱいいるんだし。「それは大多数の男性の声だ！ 女性の話じゃねえ！」

「え！ なに雄二、あんた私を好きになりすぎてとうとう私の心をよめるようになったの！ キャー！ 私が今クミクミをどれだけ愛してるかばれちゃう！」

「俺にそんな魅力的な特殊能力はないっての！ お前、心で思っていることが全部口からだだもれ状態なんだよ！」

「てかそもそも僕を愛してるってなんだこらあ！」

私が言うことに対していつも通りに雄二がシツクなカフェテリアの真ん中のテーブルだっというのにもお構いなしに大きな声で指摘していると、その隣から何やらおかしな言葉が聞こえた。

あれ？

この場に居るのは雄二とクミクミだけの筈なんだけど？

「んー？ 今……僕ってカワイイ声で言ったのはだあれ？」

「なんだよ……僕だよ。僕が僕って言うって何が悪い！」

「……………ん？」

そういうのは私の耳が幻聴におかされていなければ間違いなく

ミクミだった。

……え？

「クミクミって……さっきまで『俺』って言ってませんでした？」

「ああ。あれはあのヤロウにそう言えって言われたからだよ。僕は普段、自分のことを示す時は僕って言うぜ。その何がおかしい」

「……おかしいことなんて何もありませんよ」

金髪で。

声がなかなか高くて。

私よりも背が高くて。

正真正銘に意気がついていた真性のヤンキーっ娘で。

それだけでも……それだけでもカワイイのに……。

「クミクミ……僕っ娘だとう！」

「うるせえ！」

雄二の声が目障りならぬ耳障りだったから軽やかにシャットアウトしてきらびやかな唇から発せられる僕僕言うその輝かしい声だけ聞くことにするって私は今決めた！

私のドストレートを貫くポイントが……多過ぎ……ああ……もう

……アアンツ！

「駄目……もう我慢出来ない……可愛過ぎよこの生物……」

「言いながら僕に近付くんじゃねえよ！」

「よだれが！ 冗談抜きでお前よだれが凄まじいことになってる！」

「このよだれをクミクミに嘗めてもらいたい……」

「その欲望を今すぐ抑えこめ！」

二人の息がちょっとピツタリ過ぎやしないかえ？ とお婆さん口調でいいいたいのはやまやまだったんだけど、いかんせん私の口から流れでる久美ネーサマへの愛の証明の量が尋常じゃなかったから、雄二が手渡ししてくれたおてふきを存分に使ってなんとか拭き取ることに成功した私。この時、私の左斜め前で雄二の右斜め後ろの木製椅子に座ってため息をつく久美ちゃんの姿が非常に愛らしいものでした。

「そのため息が空気中に四散するなんて勿体ない……私にかけてよクミクミ」

「……なあにーちゃん。今更でなんなんだが、こいつの間違いつて『変態的な行動をする』ってことじゃねーか？」

私を指さしながら雄二の顔を見るその仕様に雄二を嫉妬しつつも、私は「いえ、違いますよ。メグの間違いは『好きになる相手の性別を間違える』ってやつなんです」なんて言う雄二に対して「うるせーよこのど変態！クミクミに色目つかってんじゃねえ！」って大声で言つてやった。その声で先刻からこつちを見る店員さんや常連客らしきおじさんが一層不快感をあらわにして睨みつけてくるけどもう気にしないよ、私！

「おま……お前……お前つてやつはホント……」

「何よ！言いたいことがあったらハツキリ言いなさいよ！私と久本まさ美、どつちが大事なのよ！」

「……いや当然お前んだけど！」

「なんか僕が別人になってねーか！てかにーちゃんスゲーな！」

こんな店ん中で堂々と告白とは！」

「あ、私間違えた」

クミクミは久本まさ美なんて名前じゃないじゃん。ちなみに私は微妙に久本まさ美が好きです。大物司会者に対しても冗談を言える独身女性は久本まさ美だけじゃないかな？

なんてことはとりあえず置いといて、私は、赤い顔で「そんなことないですよ……」とうるたえている雄二と「いやいや。スゲーよにーちゃん」ってそんな雄二に感心してるクミクミを見て、こう発言した。

「雄二。私は今日、このクミクミという素晴らしい女性に、あなたの縛られた写真で脅迫されたの」

「な……何だよそれ！メグ！お前が久美さんをナンパしたんじやねーのか！」

「当然の指摘よ、雄二。でもね……私は今回久美さんをナンパした

訳じゃないのよ……！」

「す……スゲーじゃねーか！ 中学の後半の時は生徒だけじゃ飽き足らず家庭科の四十過ぎた女の先生まで口説こうとしていたお前が……お前が！」

「ふっ。私も昔は若かったわ……。ほら雄二、褒めて褒めて」

「おう！ スゲーよメグ！ 流石だメグ！」

「わーい。もっともっと」

「え……す、凄まじいよメグ！ それでこそメグだよメグ！」

「わーい。もっともっと。雄二が持ち合わせるボキヤブラリーの限りを尽くして私を褒めて」

「……か、可愛い！ メグは可愛い！」

雄二が頭から湯気でも出さずじやないかってくらい赤くなりながら言うその台詞を言うのを聞いて私がなんだかよくわかんないけど満足しているのを見たのが、「あ……今から僕話そうと思うんだけど……帰ってことかこの空気」って啞然としながら久美が言っていた。慌てて私が「そんなことないよ！ 私、クミクミの話し聞きたい！」って言うのを見て今度は雄二が「俺の話しを聞けー！」なんて言うってくる。なんだこりゃ。三角関係って言うのかな？ てか雄二、あんたそれマクロス？

とにもかくにも私と雄二はクミクミが醸し出す空気を察知し、潔く話しを聞く体勢に入った。

「えー、ゴホン。まず何から話して欲しいんだ？」

「クミクミのスリーサイズを上から順にお願いします」

「うるせえよメグ。すいません、こいつの話しはある程度無視して下さい。えーと……まず、お名前を教えてください」

お家柄か他人行儀が異様に上手い雄二が上手い具合に私をあしらってクミクミに話しをふってみせた。こういうところはすごいよねーって素直に感心する。

「んじゃあ、改めて言わせてもらおうぜ。僕の名前は篠田久美。これは誰にでも予め言ってることなんだが、僕は『女なのに男口調で喋

る』って間違いを持っている」

「そうですか。で、私は結局クミクミのことを何と呼べばいいんでしょうか？」

「僕の間違いを含めた話し聞いた感想がそれかよ！」

ダン！ と右拳を叩き付けて怒りをあらわにするクミクミ。その衝撃で机が揺れカップが揺れ、中身のコーヒーマまで揺れたんだけどもそこは流石雄二といったところ。「お、落ち着いて下さい」って言うてすかさず宥めてくれた。ありがとう、雄二。私がこうやって暴走出来るのも雄二がいるからだよ。

……そんな本心は口が裂けても言えないのが私の『間違い』の嫌なところなんだけどね。

「と、とにかく！ 僕は今、大学二年だ！ 多分だが、テメーらは高校生だろ。だから、さん付けか、もしくは呼び捨てでもいい。間違ってもちゃん付けや、レンジャー一号なんてふざけた名前で僕を呼ぶな。わかったな？ おい、お前に言うてんだよ、ねーちゃん！」

「は？ ねーちゃんならあそこにも居ますけど？ すいませーん。ウエイトレスさーん。クミクミがなんか用があるらしいんですけど」

「ねーちゃんだよ、ねーちゃん！ わかってやってんだろ、おい！」

「名前ですって下さいよ、クミクミ」

「だ、だからクミクミって呼ぶな……ああ！ もう！ どうだっていいだろ、名前なんて！」

「さもないと私は今からクミクミの目の前であの短い黒髪のウエイトレスさんのお尻を揉みます」

「僕が悪かった、メグちゃん！」

「よろしいですよ、クミクミ」

慌てて駆け寄ってきたウエイトレスさんに「大丈夫です。心配しないでください」って言うて机から離れてもらった。それにしてもあのウエイトレスさん可愛かったなあ。長澤まさみと宮崎あおいを足して二で割ったような感じ。うん、清楚な美女の出来上がり。そ

れで出来立てほやほやのその無垢な美女を私が懇切丁寧に育て上げるんだー……そうすればあら不思議！　一ヶ月前にはあんなに清楚だったのに、今では常時卑猥な言葉を言い続ける変態女に！

「グフ……グフフ……」

「……なあにーちゃん。お前さん、本当にこんな奴が好きなのか？」

「あ、ええ。大好きです。俺は昔、メグに助けられたことがありますから。それと、俺の名前はにーちゃんではなく田中雄二です。並び替えたら『刀銃』っていう物騒な単語になるって覚えたら覚えやすいですよ」

「逆にそれは覚えにくいぜ……えーと、雄二君」

「ハハハ。よく言われます」

私の意識が妄想という妄想にかりとられていたせいか二人の会話が聞き取りにくかったけど、途中からはつとまって気付いた私は二人の唇の動きを読み取って二人がどんな会話をしていたか知った！
「ちよつと雄二！　私のクミクミと深夜番組のエロトークの素晴らしさを語らないでよ！」

「初対面の年上女性にそんな会話を切り出せる奴はある意味勇者だ！　あーもう、うるせーよメグ！　なんやかんやでお前が口開くたんにに会話がぶつ切りになってる記憶しか俺にはない！」

「え？　そ、そう？」

「そうだったの！　ほら、久美さんもそう思うでしょう！」

「そ、そうだぜ。めぐちゃんが女を好きだったことは充分わかったが、それ以上にめぐちゃんは色々と暴走し過ぎだ。……僕が言えることじゃねーけど、とりあえず少し抑えた方がいいんじゃないの？」

そうやって言うクミクミの顔は真剣だった。私はここでようやく今話するのがカフェだつてことに気付き直し、萎縮する。そうだよね。いつも学校で高ぶる気持ちを抑えて、我慢して我慢して、夕方私の部屋に雄二が来たら出来る話したもん。こんな真昼間からやつちやいけない話だった。

「……はい。すいません。以後気をつけます」

「お、おう。なんかすごい真摯に聞いてくれるな、めぐちゃんの奴」
「そこがメグのいいところでもあるんですよ。さてと。話を戻すか、メグ」

「うん……」

私が力無く頷くを見ると、納得したのか雄二が久美さんに「じやあ久美さん。ざつとでいいんで、まずは何でメグにカツアゲをしようとしたのか教えて下さい」って言った。

「わかった。んー、どこから話せばいいのやら……まあ、悪いのは僕だからな。家庭の事情つてやつから洗いざらい話すでしょう」

ふー、と一呼吸置いて話そうとする久美さん。その額には少し汗が流れていた。

「僕は何がなんでも金が必要だったんだ。僕が生まれる前に、僕の父親が多額の借金を母ちゃんに残して蒸発したらしくてな。僕が四歳くらいの時には大変だったんだぜ。ギシギシ言う木の家に人二人が住んでやがんの。いや、あれは家っていうのもおこがましいかもしれないねえな。所々腐つてて、臭いがはんぱじゃなかった。でもそこで、そんな生活を救ったのが……幸せか不幸か母ちゃんの『間違い』だったんだ」

「久美さんのお母さんの『間違い』が生活を救った？ てことはプラスの方向の『間違い』だったってことですか？」

自他共に一応認められてる聞き上手の雄二が久美さんの話を催促する。

間違いには二種類あるんだよ。

マイナスの間違いと プラスの間違い。

マイナスの間違いって言うのは言うまでもなく、その間違いを持つ本人や周りの人を不幸にする間違いのこと。私の尊敬する先輩なんかが一番の例だね。私の間違いもこれに含まれるらしいけど、私は私の『間違い』を不幸に感じたことがないから全身全霊で許否らせてもらっわ。悪いけど。

で、その逆 本人や周りの人を幸福にする間違いがプラスの間

違い。一番身近な例で言うと……真姫ちゃんの『常に笑顔でいる』
っていう間違いかな。ああでもこれは表情が読み取れなくて何考え
てるかわからないってなるか。うーん、じゃあなんだろ。プラスの
間違いってよく言うには言うんだけど、そんな間違いなんてあつて
ないようなもんなのよ。大体間違いな訳だしね、そのプラスってや
つも。結局間違ってることには……変わらないって話なんですよ。

あ。そうそう。

雄二の間違いは　プラスって言っちゃあプラスかも。

「ちげーよちげー。母ちゃんの間違いはプラスじゃねー。寧ろ僕に
してみればマイナスのマイナスだったな。ホント、あの母ちゃんの
間違いにどんだけ困らされたことか」

ハア、とため息をついてカップの中のコーヒーをスプーンでくる
くる回す久美さん。何か嫌な思い出でもあったのかな。だったら正
直、あまり聞きたくない。

けど。

「そうなんですか。実際に、お母さんの『間違い』はどんなものだ
つたんですか？」

私と違つて　雄二は止まらない。

雄二には　あの『間違い』があるから。

久美さんは雄二のその言葉に少し面食らったのか口を濁したけど、
スー、ハー、と今度は二回深呼吸をして一回俯き、そこからガバツ
と顔を起き上がらせて私と雄二の顔を「じゃあ、言うぞ」と言つて
見渡した。私も雄二も、唾をゴクリと飲みながらお互いを見て一つ
頷き、久美さんの目を一心に見る。

「僕の母ちゃんは、『料理の作り方』と『お金のつくり方』の
二つの間違いを持つ人だったんだ」

「今から十五年前だったか……僕は母ちゃんがオムライスを作っているのを見たんだ」

久美さんはそういいながら、コーヒークップを見つめていた。何だか思いたいたくない遠い過去を見るような、暗い顔で。

「出来上がったオムライスは、外見だけは立派なオムライスだったんだぜ、これがさ。いい匂いもしてきて、タマゴもトロトロで……一目見ただけじゃあただのオムライスにしか見えない代物になつてやがったんだ」

「……つてことは、そのオムライスは普通のオムライスじゃなかったんですか？」

雄二が俯く久美さんを真っ正面に見据えて聞くと、久美さんは「ああ」って言いながら雄二を見て呟く。

「母ちゃんの『間違い』のせいで 作り方を全く間違えていないのに、そのオムライスを食べた奴は、必ず死ぬっていうものになつていたらしい。父ちゃんはこの時もう蒸発してたからよ、誰も止める奴がいなかったせいか……僕がそのオムライスを指さして「ねえ母ちゃん、オムライス食べていい？」って聞いたら、母ちゃんは涙目になりながら「ゴメンね、クミちゃん。これは遠い街の王様に食べてもらってから……とか言いやがった……」

「あの……」

雄二が沈黙したのを横目で見て、私は久美さんが続きを話そうとするのを止めようとした。多分これは久美さんにとって、話したくない過去だよな。当然、美少女が悲しそうになるのが嫌な私は、止めようとする。

でも久美さんは、私に一度、微笑みをかけた。「いいんだ、メグちゃん。元はといえば金に目がくらんだ僕が悪いんだからよ」と言

って、またコーヒークップを見ながら話しを続けようとする。

「母ちゃんはその時、宮廷料理人っていういかにも時代錯誤な仕事をしていたらしい。この街じゃないどこか遠くの『平和じゃない街』ってところに雇われていたんだとよ。母ちゃんの『間違い』は奴らにとつてうつつけだったらしいぜ。戦争をせずにとっかの街の王様を殺せて、しかも肝心の食べ物からは毒物反応が全く出ない。加えて母ちゃんには全然罪悪感って奴がない。いつもいつも笑って俺に接してくれていた母ちゃんは、父ちゃんがいなくなって金がどんどんなくなっていく間……裏で自分の手を汚していることに気付けないまま笑ってたんだ。だがそれにもやっぱり限界つてものがあった。母ちゃんは気付いちまったんだ。自分の『間違い』がどんな風に利用されているか」

「そうですか。で、何で気付けたんですか？」

「ちよつと雄二」

少し涙目になりながら、それでも頑張つて話そうとしてくれる久美さんに向かって、雄二は無神経にも続きを急かす。私が雄二を止めようとしているのを見ると、久美さんは「ハハハッ」と一回自嘲気味に笑いつつも、雄二の目を見ながら言う。

「んなもん決まってるだろ？ 自分の作るオムライスがどんな代物かわからない母ちゃんが 作りかけのオムライスを味見したからだ」

「え……？」

「……………」

その言葉に驚いた私。反面雄二はさつきまで開いていた口を閉ざした。多分雄二にはもう聞きたいことが無くなったんだと思う。大體話が繋がり始めたんだ、雄二には。

「倒れた母ちゃんは、一直線に病院行きになった。母ちゃんはその時母ちゃんの『間違い』を知っていたらしいんだが……罪悪感がないせいか、オムライスがどんなものなのかわからなかったらしい。作りかけだから母ちゃんが死ななかつたのはよかつただけだよお

……下半身が麻痺しちまって、車椅子がないと動けない体になっちゃったんだ」

久美さんはカップを手にしてコーヒーを一気飲みすると、口の端に残ったコーヒーを服の袖で拭き取り、話しを続ける。

「僕が中学生になったばっかの頃だったな。僕の『間違い』に対して「クミちゃんは男の子の口調でも全然いい」っていつも言ってくれてた母ちゃんが倒れて、家には働き手がいなくなった。それでも母ちゃんには母ちゃんの『間違い』があった。母ちゃんは自分の作ったオムライスがどういう風に利用されていたかわかった上で……母ちゃんが倒れた原因を知っている医者に向かって、「私は赤色の間違いを持っています。だから今すぐ……私に今までくれなかった補助金を下さい」って言った」

私と雄二は久美さんの話しを聞いて、互いに目を合わせる。
補助金。

この街にいる黄色と赤色の『間違い』を持つ人が貰っているものなんだ。その額は黄色　赤色の危険度の上昇に従って、金額も上昇する仕組みになってるんだよ。

黄色は一月一万円くらい。

赤色は一月十万円くらい。

この街に住む人の『間違い』の、緑、黄、赤の割合がどんな割合で存在するのかが明らかになっていない。だから誰がどんな色の『間違い』を持っているかはわからないし　誰がどんな『間違い』を持っていかもわからないんだよ。

だから街の皆は、隣にいる見知らぬ人が、例え『他人を意味もなく殴りたくなる』って間違いを持っていても気付けないうし　例え『意味もなくお金を他人に渡したくなる』って間違いを持っていても気付けなくなってるの。

当然他の人の『間違い』をわからないと怖いって人が出て来ると思うよね？　うんうん、私も昔はそう思ったよ。だから母さんに聞いてみた。そしたら母さんは「メグ。自分の『間違い』を他の人に

知って貰いたいなんて思う人は……絶対に居ないの」って言ったんだ。

間違い。

それは多分、誰にも気付いて欲しくない自分の嫌な部分。

久美さんにしたって 久美さんのお母さんにしたって 先輩

にしたって 雄二にしたって 私にしたって。

だから私達は、他の人がどんな間違いを持つてるかわからない。

わかるのは、『他人の間違いを見抜けてしまう』っていう間違いを持った 全てのお医者さん達だけ。

「医者も困ったと思うぜ。病人が来たと思つたら、国の方に電話をかけるだもんよ。しかもその病人に『金のつくり方』を間違えるっていう厄介な代物があるってわかつてたからよ、医者も最初は躊躇したんだが結局国の方に電話をかけた。そしたら普通に補助金がきた」

「え？ 何ですか？」

「ハハハ……母ちゃんを雇っていたのが、この街のお偉いさんだったってオチだよ」

久美さんは、頭を抱えながらそう言い切った。

「何なんだよホント……僕にも母ちゃんにも補助金が来ないと思つたら何てこたあなえ……母ちゃんの仕事の報奨金の中に含まれてたんだとよ……母ちゃんが倒れたら奴らは簡単に補助金とかいって金を渡してきた……これってどういうことかわかるか？ 自分が母ちゃんにやってきた過去をうやむやにしようって魂胆なんだよ！ 母ちゃんは母ちゃんて憔悴しきって……でも母ちゃんにも僕にも国の奴らから金を貰うしかこの先生する方法がなかった！ 報奨金もあった！ けど母ちゃんが入院するのにほとんど使っちゃった！ わかるか！ 母ちゃんは自分の作ったオムライスがどういう風に使われてるかわからないから少ししか金を貰ってなかったんだ！ おかげで母ちゃんも僕も人を殺していたのに貧乏暮らした！ しかもそのお偉いさんはその後簡単に捕まっちゃった！ 『目的の為に

は悪事をする』って間違いを持ってたんだとよそのせいでそのせいでそのお偉いさんにはほとんど……罪がなかった!」

「久美さん! 落ち着いて!」

久美さんはテーブルをがんがん両拳で叩きながら叫ぶ。私と雄二はそれを止めようとするけど、久美さんは止まらない。次第にカフエの人達がこつちを気にしてくるけど、それでも久美さんは止まらない。

「僕は恨んだよ! そのお偉いさんを恨んだんだよ! でも何も言えなかった! 母ちゃんが人を殺してきたのは事実だし、母ちゃんの人殺しも母ちゃんの『間違い』のせいでチャラになったからよお! 『間違い』ってなんなんだ? やってはいけないことなのか? やってでもいいことなのか? 何なんだよ、間違いって! 母ちゃんは僕がいない間、いつも泣いてるんだ! 自分が昔やってきた人殺しを悔やんで! 母ちゃんはいつもいつも言ってるんだよ! 「誰でもいいから私の『間違い』を裁いてください!」ってよおっ! 間違いが絶対に誰にでもあるなら! 全部裁けよ! 間違いならしょうがない? 間違いだからって……間違いって何なんだよ……何なんだよっ!」

多分久美さんも何を言ってるんだかわからなくなってるんだと思う。テーブルに突っ伏して本格的に泣き始めた久美さんは話しをやめて、嗚咽を漏らし始めた。私は久美さんのその姿を見ながら、昔の自分を思いだしていた。

間違いってなんなんだろう?

正しいことってなんなんだろう?

他の国の王様を殺そうとしたり……人を殺せるオムライスをつくれたり……。

私が。

女の子を好きだったり。

それって……本当に間違いなの?

「そうですか」

すると雄二は。

泣き叫んで自分の悲痛を体中から発散してる久美さんを見て。

鬱陶しそうに眺めていたカフェの人達が皆目を逸らし始めたのにも関わらず。

無表情で坦々と　こう言つてのけた。

「で、何でメグをカツアゲしようとしたんですか？」

まるで久美さんが何を言つても興味がないような物言いで、雄二は聞く。その姿を見て、久美さんは涙を流しながら、信じられないようなものを見る目で雄二を見つめた。

「雄二君……なあ……お前の『間違い』って何だ？」

久美さんがそう聞きたくなるのも無理はないと思う。だってそれくらい、今の雄二の目は無機質だったから。

冷たそうな目じゃない。

それは、久美さんに関心が向いていない目。

「俺の『間違い』ですか？　簡単ですよ」

雄二は口だけ笑つて、久美さんの問いに答えようとする。

「俺は『躊躇が出来ない間違い』を持つてるんです。だから久美さんがどんなに泣き叫んだところで、俺は聞きたいことを聞きたいだけ久美さんに聞くだけですよ。　で。久美さんは、何でメグをカツアゲしようとしたんですか？」

「……………」

啞然とした久美さんの代わりに、私は「ちょっと黙つててよ、雄二」って言つてやった。私の言葉に、雄二は「何でだ？」って言い返す。

「久美さんに何があったかどうかはどうでもいいだろ？　肝心なのはメグをどうしてカツアゲしようとしたかだ。それしか俺は興味がない。ていうか久美さんの過去なんて俺は聞いてないんだよ、最初っから」

「私さ。雄二のそういうところ、好きだよ。でもさ……今は黙つて」

私が真面目な顔で言ったのに驚いたのか、面食らった顔をした雄二は「……わかったよ」って一言小言で呟くと、完全に押し黙った。代わりに、私は久美さんにおしぼりを渡しながら会話しようとする。「すみません、久美さん。話しの続き……聞かせてもらってもいいですか？ 嫌ならいいですから」

「……すまねえな。雄二君の言う通りだ。僕がカツアゲしようとした理由に……母ちゃんなんて関係なかった」

久美さんはそう言うと、私と雄二を見ながらこう発言した。

「ついさっきのことだ。母ちゃんのすすめで大学行きながらアルバイト生活して金を出来るだけ稼いでいた僕は……黒い服に身を包んだ女に話しかけられたんだ。俺に、札束を差し出しながら「お金は欲しくない？ 欲しいなら、メグを出来る限りイジメて」とか言ってきた」

「私を……虐めて……？」

「そいつは確かにそう言ってきたぜ。占い師みたいな恰好してて顔も見えなかったんだがよ。声で女だつて判別できたんだが……今思えば何だつたんだらうな、あの女。札束も十万二十万なんて額じゃなかったぜ」

私を虐めてつてどういう意味なんだろう。私……何か女の人に恨まれるようなことしたっけ？ いやいや、全世界の女の子を愛してる私に限ってそんなことする訳ない。

じゃあ、何で？

その女の人は、何で私を恨んでるの？

そう考えていると、私に雄二が声をかけてきた。

「……メグ。お前、何したんだ？」

「何言つてんのさ、雄二！ 私が女の子に何かする訳ないじゃん！」

「いや……お前のことだし、どっかの女子に襲い掛かったんじゃないかと……」

「そんなこと私がする訳ないじゃん！」

「……………」

「久美さんまで何で無言になるんですか！」

え……………私って一体全体この二人にどんな目で見られてるの？

確かに私は女の子が大好きだよ。襲い掛かりたくもなるよ。でもやっぱり相手が苦しそうに顔歪めて悲鳴をあげてる女の子の色んな部分をせめたって何にも楽しくないじゃん。私がしたいのはそういうことじゃなくて……………ほら、あれだって。私は笑顔の女の子の喘ぎ声が聞きたいの。だから互いの了承がないと私は女の子にあんなことやこんなことをしようとは思わないって。

ましてや襲い掛かる？

「私が女の子に襲い掛かるなんてありえないよ。女の子は笑顔が一番カワイイの。てか女の子は皆カワイイの！ 美少女とか美人とか美女とかよくいうけど、私は女の子だったら全員美しいと思うね！

だって女の子なんだから！」

「……………すみません。こいつなんかしたかもしれません」

「おう……………僕もそう思ってたところだ……………」

「そのの美女と野獣！ 何か言っただかな！」

私がそう言うと、「誰が野獣だ誰が！」って声が聞こえてきた。

それを私が軽やかに無視して、ポカーンと口を開けてる久美さんの口に指を突っ込む。「んべらっ！ テメ、何しやがる！」って声と久美さんの顔は少しだけ明るさを取り戻した。

うん。

やっぱり、暗いテンションは似合わないって。

雄二の言ってたことも割と正しいのかも。

久美さんの過去とか、黒い女の人とか、そんなの今は関係ないや。

「ねえ、雄二」

「久美さんに指突っ込んだ後なにしゃあしゃあと話しかけてきてんだよお前！ 何だよ！」

「久しぶりに……………あれ見せてくれない？」

私のこの一言を聞くと、雄二は一瞬信じられないような顔をして、それでもその後すぐに全てを理解したような顔になった。久美さんが「コーヒーおかわり！」って叫ぶのを横目に、雄二は私に笑いかける。

「そうだな……パーっといっちょようやるか！」

雄二はそう言うと、服の内側に手を入れた。そしてそこからある物を取り出す。

「な……え！ 雄二君……お前まさか！」

そのテーブルに置かれたある物を見て、久美さんは驚いた表情をした。まあ当たり前だよな。こんなのを持つてる人が雄二な訳ないもん。

「久美さん……俺も久美さんのお母さんと同じなんです」

『間違い』には プラスとマイナスがある。

でも『間違い』は、そういう風にくくりに出れないから『間違い』なんだよ。

普通だったら無茶苦茶怖い『間違い』でも……切り口を変えればいい『間違い』になることもある。

それが、雄二の『間違い』。

「俺は、『躊躇が出来ない間違い』と……『銃を上手く扱える間違い』を持つてるんです」

机に置かれたのは、一丁の黒光りする拳銃。そこにあるだけで凄まじい存在感を放つ危険な物体。普通だったら久美さんは怖がる筈だよな。躊躇がきかない雄二が拳銃なんて持つてたら、行き着く先は一つしかないと思う。

だけでも。

この街に 一人の人間が居るって事実があるだけで 雄二への評価は変わる。

「雄二君が……今巷で有名な……拳銃を使うパフォーマーだったのか！ うわぁ……うわぁ！ マジかよ、おい！ 本当にいたのか！」
さっきまで暗い顔で泣きながら叫んでいた久美さんが、私の好み

な笑顔で興奮する。その声を聞き付けたのか、カフェの人達も「何だよおい!」「君があ有名な……」「噂は本当だったのかね!」「見たいよーっ!」とか言いながら机に近寄ってきた。
どんな街にも、刺激は必要な訳なんですよ、そこの皆さん方。

雄二はこの街で唯一認められた 拳銃所持者なんです。

土曜日 3 (後書き)

詰め込みすぎたかもしれない……

むかーしむかし、田中雄二という私の幼なじみがおりました。雄二は『躊躇が出来ない』っていう間違いを持っており、公園で昔つまり私達二人が小さい頃遊んでいたその時その時間ではなんの障害もなかったのだけれど、次第にその『間違い』の頭角が現れてきました。

一番初めが私と雄二が四歳だった時。私がほほえましい顔でスコップを右手に砂場でザクザクザク無意味に掘っていた時、いきなり現れた雄二が「めぐちゃん、そのスコップ僕にかちて」って言うてきたのでございます。「かちて」だって。今の中途半端なイケメンからは聞けないお言葉を使って当時の雄二は言うてきた訳です。

当然スコップを渡したくない私は「イヤ」って軽く雄二に返してそのまま掘るのを続行していた訳なのですけれども、ここで雄二がクソ真面目な顔で「めぐちゃん。貸せ」って言うてきたんですね。その声はまだ低いこと低いこと。本当にあんた四歳児？ みたいな冷徹な表情と声のトーンで私に言うてきたもんだから、流石の私も雄二のみたこともないその姿に違和感を覚えたという訳なんです。でも私はスコップを渡さなかった。何故なのかって？ そりゃあ簡単な話。だって雄二なんかスコップ貸すのはなんかしゃくだったし。それに貸すの嫌っていうのはつまり雄二にもう一つスコップを持って来て欲しかったって意味なのに。そうしたら二人で……。

ま、まあそんなこんなで結局最終的にスコップを渡さなかったんだけど、そしたら雄二はいきなり「貸せよ！」って大声を出してか弱いか弱い私にポディーブローを繰り返してきたんですねこれが。くらった瞬間『マジかこいつ！』と思った私なんだけど、これが結構キツイポディーブローだったんで言葉どころか息さえはくのが難しい状態に一瞬陥っちゃったんですよ。腹を抱えて疼くまる私なん

かどうでもいいかのように私の右手からスコップを取った雄二は、そのまま何くわぬ顔で砂場にウンコ座り（ウンコ座りなんて私みたいな美少女が言っちゃダメじゃんみたいな指摘は私のウインクで感謝と共に返します）して無表情で砂を掘り始めたの。その姿が信じられなかったね、私は。それまでいつもめぐちゃんめぐちゃん言っで近付いてきた雄二がいきなり私にボディーブローだもの。本当に驚いた訳なんです。

で、数秒経った後、ハッと雄二が目を見開いたかと思えば、立ち上がって私の方に心配そうな顔をして近付いて来るんですよ。「ごめんね、めぐちゃん。ごめんね」とか言いながら。

これ見て私は思ったね。

「おんどれらこら雄二の分際で何さらしてくれるんじゃない！」
「うぎゃあああ！ ごめんめぐちゃんーん！」

……ってな訳で意味不明さと怒りで狂いに狂いまくった私は雄二にボディーブローを三倍返しでしまくったところを私と雄二のママに止められたという次第です。

その後雄二は病院に行つて、『躊躇が出来ない間違い』と『拳銃が上手く扱える』つていう訳わかんない間違いをお医者さんに見抜かれたんですよ。『間違いを見抜く間違い』を持つのがこの街のお医者さんな訳なんだけど、いかんせんそのお医者さんも一つの『間違い』の片鱗くらいわからないと見抜きようがないんだって。だから私と雄二を含めたこの街の人達は、自意識を持ち始めて『間違い』の片鱗を見せるようになってくる 子供の頃にお医者さんに診てもらつたという訳なのでございます。

私の場合は『好きになる相手の性別』を間違えるつていう間違い一つだったからその後母さんが色々話し聞くだけでそんなに大事にはならなかったんだけど……雄二の場合、『間違い』が二つあったんですねこれが。

何かを必ず間違える人。

その何かが 複数ある場合。

そういう時、その人はお医者さんにこう言われるんです。「君はこの複数の間違いの内　どの『間違い』を残したい？」って。

この街の歴史が何年かはわからないけれど、それでもある程度の期間の長さはあるであろうこの街の過去からいって、どうやら『間違い』は一人につき一つしか存在しないらしいのよ。

でも、中には二個も三個も……下手したら四個の必ず間違える『間違い』を宿す人が出て来る。

そういう人達は、四十歳までには間違いが一つに絞られるらしいのね。

まず二つ間違いをもつ人がいたとするよね。でもその人は、小学生の頃は確かにバンバン間違いをするけれど、高校生とか大学生の時に入り始めてから徐々にどれか一つが残るように他の『間違い』が全て薄れてなくなっていくらしいのさ。

でもって、その複数の内　どれを残すかは決められるらしいの。何故なら必ず間違える『間違い』なんて　結局は自分の意識下で行う行動に過ぎないから。だから意識してどれか一つを残すように毎日毎日生活していれば、いつかはその一つの『間違い』が残る仕組みに　この街に住む人全員の体はなっているようなのです。

まあそうはいつでも高校生くらいからその生活を始めなきゃいけないみたいだから（私は一つしか間違いがないから詳しくはわかんないんだけど）、中学に入る頃には当人にちゃんとどんな『間違い』を持っていくか言うみたい。「君にはこれこれこういう間違いとこれこれこういう間違いがあるんだよ」的な、ね。

雄二もその例に漏れずに聞いた訳んだけど、雄二の場合はちょっと事情が違ったのさ。

雄二は　小学二年生の時にその間違いの話を聞いたんだって。理由は簡単ただ一つ。

雄二のパパが　無茶苦茶堅物な人だったから。

警察のドンって呼ばれてる雄二のパパ。濃い顔にはナイフで切り付けられたような傷が満面に広がっていて、体は屈強。端から見た

らあれは熊だね、熊。グリズリーをも越す力を持つてるよ、雄二の
パパは。

それで雄二のパパは、「男なら大事なことは早めに済ましておく
べきだ」なんてことを雄二に教える為に、あえて早く聞かせたみた
い。その時の雄二のパパの口調がどれくらい有無をいわさなかつた
かはこの話を聞かせてくれた時の雄二の奮え具合で悟ったよ。ホン
トに怖いんだろね、雄二のパパ。

そこで、お医者さんから「君は『躊躇が出来ない間違い』と『拳
銃が上手く扱える間違い』を持つてるんだ。じゃあ雄二君。君はこ
の二つの間違いの内、どちらを残したい？」って雄二は面と向かっ
て言わされた。

一瞬ポカンとしたらしい雄二だったんだけど、パパママお医者さ
ん看護師さんが見守る中、雄二が降した決断は 「銃をまず使っ
てみたい」ってものだったの。

……ま、まあさ、考えてみてよ皆さん。この時雄二小学二年生だ
よ？ テレビのヒーローに憧れる時期よ？ しかも雄二の場合、ヒ
ーローがパパだったから、警察しか使えない拳銃を使いたい気持ち
は昔っからあつたと思うんだよね。

しかも、運が悪いことに雄二には『躊躇が出来ない間違い』って
いうのもあつた。

何言ってるんだとかそんなこと考えるのはやめなさいとかいうパ
パママを目にした雄二は、『躊躇が出来ない』で小学二年生の肉体
の限界をぶつちぎって、ドンであるパパの体を突き飛ばし、「銃使
いたい銃使いたい銃使いたい！」って叫びながら病院の中を走り廻
ってありとあらゆる機材を壊しに壊しまくったの。まーあれだよ。
端から見たら暴走する小さな子供だよ。しかもその暴走具合が異常
に異常だから誰も止められずに雄二は病院の機材を破壊しまくった
んだってさ。

止めようにも止められない雄二の暴走を見てどうしようもないっ
て悟った雄二のパパは、階段で下の階に移動する途中の雄二を踊り

場で待ち構えて、見上げながらこう言ったんだって。

「わかった。お前がそういうなら使わせてやるう。ただし、人を喜ばせることだけに使うんだ。人を喜ばせることだけに　躊躇をせずに拳銃を使え。それが守れなかった時には、私もお前と同じように躊躇をせずに、お前を犯罪者と断定して全身全霊で捕まえてやる」

その言葉に、機材を壊す時についた切り傷から出た血を両手の至る所から流しながら、雄二はこう返したらしいの。「父さんだってヒーローだって拳銃を人に向けて使うよね。だったら僕も、拳銃を人に向けて使っていていいんだよね。だってそれが駄目なら、父さんは人に喜ばれることをしていないって意味になるじゃないか」って。ガキが何全てわかったつもりでなまいつてんだって話になるんだけど、雄二のパパはそれでも自分の息子の目を見ながらこう言ったんだって。

「雄二……お前は人に向けて銃を撃ちたいのか？　確かに私は人に向けて銃を構えたことはある。だが撃つたことはない。警察にいても、銃を撃つて人を殺すなんてことは稀なんだ。撃つにしても、ヒーローもドラマの主人公も、誰も彼も彼女らも　皆が皆、他の人のことを考えて拳銃を構えて撃っている。それに比べてお前が今さっきまでこの病院でやったことはなんだ。他の人のことを考えてやったことなのか。違うだろ。そうじゃない。お前はお前で、お前のがままだけで暴走したんだ。それは間違いなんだよ……雄二。今のお前には人に向けて撃つ為に拳銃を渡すことは出来ない。だが、お前が人の為になる拳銃の扱い方を何か思いついたら……『上』の方に無理を言つて使わせてやる」

そうやって雄二のパパにまくし立てられた雄二は、雄二のママと一緒に病院の中全部を一周して看護師さん　お医者さん　患者さん全員に謝罪して、家に帰って一晩考えたんだってさ。自分が持つ『間違い』で出来ることはないのか　拳銃を上手く扱えて躊躇が出来ない自分にも何かやれることはないのか　そう思いながら何気なく部屋の中をうろついていたら、机の引き出しの奥深くに見

つけたんだよ。

昔、家族三人で行った、サーカスのチケットの切れ端を。

あの中でお客さんから笑いをとっていた赤鼻のピエロは、凄いパフォーマンスをしながらも……たまに間違いをしていた。

しかもあのピエロは確か……向けられたエアガンの弾を避ける演技も軽くしていたような気がする。

それを思い出した雄二は、テレビの前で『実録！ 現代の警察官！』って自分が取材された番組をしたり顔で見ながらソファーに横になってる雄二のパパに向けて、大声でこう言ったみたいなの。

「父さん！ 僕は銃を使ってパフォーマンスをしてみたい！ サーカスみたいに派手なのじゃなくていい！ ただ、誰かに僕の『間違い』を見て……楽しんで貰いたい！」

そうして、雄二は警察のドンである雄二のパパに無理をいって、拳銃と銃弾を一式受け取ったんだよ。そんでもって、雄二のママに助けを借りて、携帯サイト『刀はないけど銃はある一人サーカス団！』ってのを設立したんだってさ。

雄二のパパが何も言わずに作ってくれた射撃場（射撃音耐性で近所迷惑にもならないっていう優れ場所！ 流石雄二のパパだよ太っ腹！）で毎日毎日練習して、ついに携帯サイトに実演の二文字が刻まれることになったのよ。

最初は公園。

次は広場。

とにかく広い場所で行って、一人サーカスを開演したのよ、雄二の奴。

当然苦情は来たらしいよ。そりや当たり前だよな。近所でパンパン銃弾が何かに着弾する音が連続して起こってたら嫌な気分なかなるさ。うんうん。

けど、雄二の気持ちをわかってくれる人もいた。まあこれも、当たり前じゃんね。だってこの街の人達みーんな、嫌な『間違い』を持ってってるんだから。この状況で理解者が出来ないなんて有り得ない

んですよ。

嫌な結論なんだけどね。

間違いを持つ人しか間違いを享受出来ない世界　なんてのは。でもここは間違いを持つ人しか居ない街。だからなんとか雄二もやっけていけた。

携帯サイトも最初はさっぱりだったんだけど、パフォーマンスをやる度に口コミが広がってアクセス数もうなぎ登り！『一人サーカス団の射撃少年！』なんてテレビや雑誌で持ち上げられたりもしたんだけど、雄二のパパの助言でパフォーマンスをする時は夏祭りで買ったヒーローの仮面を付けて正体を隠すことにしたの。銃を扱ってるなんておおっぴらにはらすもんでもないしね。ここらへんは流石雄二のパパだってことになるんだと思う。

そんなこんなやらで……雄二は私と同じ高校二年生。

私の知る『間違い』を上手く克服した偉大な人物の内　尊敬する先輩の他の　ただ一人の人物な訳なのです。

「なんつーか……凄い奴なんだな、雄二君って」

「そうですね！　そうですねですよクミクミ！　雄二は凄い奴なんです！　本当に……凄いんだよなー雄二の奴は……」

「……………」

「あれ？　どうしたんですかクミクミ？」

「めぐちゃんってよお……雄二君のことをどう思ってた……？」

「え？　凄い奴ですけど」

「いや、そういう意味じゃ……ま、まあいいか」

雄二の昔の話をした後煮え切らない会話した私とクミクミだったけど、そんなことには目もくれずに雄二はパフォーマンスの準備をせっせとしていた。

噴水公園にもう一度戻った私達。カフェで騒ぎを起こしちゃった

せいもあって今、噴水公園の噴水前には沢山の人だかりが出来ている。うわー、さっきまでは全然いなかったのにいつの間にかこんななにいっぱいの人がいるよー。あ、小さい子供の後ろで携帯をいじってる女の子カワイイ。しかも制服じゃん。だ、駄目だって肩かけバッグを胸の間を通してかけちゃ！ただでさえデカイだろうに……そんなことしたら更にピクアップされちゃうよ！あの制服のリボンが取れて制服の前はだけないかなー。そしたら真っ先に飛んで行って「大丈夫？」とかいいながらあらわになったブラジャーを脱がしてあげるのに……。

「……つてめぐちゃんオイ！目が光ってんぞ！」

「ご、ゴメンナサイ。つい女の子のおっぱい睨んじゃった」

「それは『つい』で済む問題なのかよ！」

「じゃあ『つい』で済まない問題の例を出しますね。まず私の視線の先にいるあの制服の巨乳女子高生の服を問答無用に切り裂きます。その後馬乗りになった私が沢山のギャラリーがいる前で「大丈夫？」「大丈夫じゃないですう……ひゃ、ひゃん！な、ど、どこ触ってるんですかあ！」「どこつて貴女の胸よ。このままじゃ見えちゃうでしょ」「だからつて揉まなくてもお……あ、アン！や、やめ……て」つていう掛け合いを」

「スマン余りにもな発言だったんで止めるのが遅れた！何言っちゃってんのお前！」

「またまたクミクミしたらー。私のこの妄想が聞きたかったんでしょ？ていうか聞いた上でしたかったのかなー？じゃあ今からしよつか！」

「ちょ、や、やめ……服を脱がそうとするな服を！」

「あ、じゃあブラから？もう！この淫乱娘っ！」

「お前にだけは言われたくない一言だよ！ほ、ホント止めるよ……

……頼むから……いやマジもっ……お願いします！」

「……………」

クミクミが涙目になりながら私の動きを止めようとしてたから私

はとりあえずクミクミの服を脱がそうとするのを止めた。てかクミクミそれ逆効果だつて。疲れたのはわかるけどハアハア言いながら涙目で私を見ないでよ。何だかツンデレ効果で私からのセクハラを求めてるみたいでもう……ああああ……ま、まあね、流石に私も自重しよう自重。雄二が久しぶりにあれやつてくれるんだから、ちやんと見届けないと。

すると、噴水が立ち上がる音と共に、赤いヒーローの仮面を被った雄二が拳銃を服の内から取り出す後ろ姿が見えた。私達は今、雄二のパフォーマンスの舞台裏的な位置にいるんだけど、ここでもひとだかりが出来始めて、さっきまで数人しか居なかったこの場所にも人いっぱい集まりだした。こりゃいけないな、って思った私は後ろに居る好青年らしき背の高い帽子を被った人に「すみません」って話しかけてみた。

「ここらへんは流れ弾がくるかもしれないから危ないって聞いたんですけど」

「え？ なんだい君、もしかして初心者？ 彼はね、いつも上空に向けて撃つから後ろにいても全く問題はないんだよ。知らないのかい？」

「知ってますけど……」

勿論私はそのことを知っていた。てか知らない訳ないじゃん。あんたこそ何さつて感じなんだけども。私はあんたが彼つて称した奴の幼なじみなんだけども！ あいつのことを知った風に言わないでよこのおっさん！ あんたが女の子だったら「うんうんわかるよ。でもねー危ないからねー、ちょっとあつちのベンチに座ってピロートークの前のやつやるっかー」って誘うのに！

なにはともあれ流石に私のこのどす黒いならぬどす白い感情を表に出すのは避けたかったから、素直に「いやいや……さっき、あの変なダツサイ仮面被った人が「俺の後ろに立つな」なんてことを言っていましたよ」って朗らかな女子高生を気取って忠告したら「どこのゴルゴ？」とか首を傾げながら周りの人と共に好青年らしき人

は大人しく前方の人だかりに混じっていった。

「……そんなこと言ってたか？」

そしたらクミクミが私に向かってボソリとこんなことを小言で言ってきた。

「確かに流れ弾はヤベーけど雄二君が噂の奴なら大丈夫なんじゃないの？ テレビでも全部斜めに撃って安全性を保証してたしよ」

「言う訳ないじゃないですか」

そう。雄二がそんなこと、言う訳ない。雄二なら、例え少しの妨げになるうとも、来てくれる人見てくれる人全員に満足していつて貰いたいと思うだろうから。

でも、そんなの駄目。

「ここは私の特等席なんです。雄二の姿が一番近く見えますし。誰にも……誰にも譲りはしませんよ」

「……そうかい。ワリイな、特等席に僕なんか居座っちゃまって」

「イイエ。特等席に座るのは私の恋人って決めてたんでクミクミは全然オツケーです」

「普通だったら雄二君の恋人が特等席に座るんじゃないの！」

「え、じゃあクミクミは雄二君の恋人になりたいんですか！ だ、駄目ですよ！ 絶対駄目！」

「いや、僕はもう少し背の高い方が……って、へ？ ……なんで僕が雄二君の恋人になりたいって思っちゃ駄目なんだ？ ん？ ほら、言ってみるよ、ほら」

「勿論、雄二と付き合いたらクミクミが駄目になるからです！」

「……はあ？」

口を開けて驚くクミクミ。こいつ何言っちゃってんの雄二君が何で僕と付き合ったら僕が駄目になるんだよ訳わかんねーよってという言葉がクミクミの表情の中には隠れていた。わかりますよええわかります。確かに今までの話ししか聞いてないクミクミだったらその反応もわかりますよ。

でもね……雄二の『躊躇が出来ない』って間違いはあの程度の過去じゃおさまらないんですよ！

「小学生の高学年の時、私は雄二に「スカートの中にあるパンツが何色か知りたくなつた」とか真剣な顔で言われてスカートめくりをされたことがあるんです！」

「な、お前、マジでか！」

「マジもマジ、大マジですよ！ しかも中学生になつてからはもっと酷かつたんですよ！ 「メグの使つてるシャンプーを知りたくなつた」とか言つて私が真つ裸で居るのに平気で風呂場に入つてきたり、「メグの胸つて今何カップ？」つて話しの脈絡関係なしの体育の時間と言つてきたりするし！ コンプレックスなんだよある意味胸が大きいの！ バスケのドリブルした後にそれを聞くなよ！」

「メグそのことなら謝つただる頼むからそれ以上は言わないでください本当にすいませんでした！」

私が雄二の性欲の暴走を有りのまま話していたら、仮面のせいでくぐもつた雄二の声が聞こえてきた。

「あれー？ これは私の幼なじみの雄二つて奴の話しなんですけどー。『刀はないけど銃はある』とかなんちゃらかんちゃらのサーカス団員さんは関係ないんじゃないですかこの変態叫ばないで気持ち悪いだから狼なんだよ男は」

「く……な、何でもない。もうすぐ始まるから、ファンでも少し黙つていてくれ」

「知ってますかー？ 不安つてカタカナで書いたらファンつて読めないこともないんですよー」

「つまり俺のファンであることを不安だと！」
そんなようなことをグダグダ叫んでいた雄二だったけど、やがて叫び声を抑えて真剣な空気が張り詰められる。

パシャンつていう噴水が立ち上がる音が聞こえると同時に、仮面を被つた雄二が拳銃を上に向けて一発引き金を抜いた。パァン、と乾いた音がかかりと噴水の前の空間に広がる。

上を向いていた私達の視線が、雄二の降ろす拳銃と共に下におり、雄二の姿とぶつかった。

「刀はないけど銃ならある一人サーカス団……一ヶ月ぶりに開演です！」

雄二が叫ぶと、私を含めた公園に居る全ての老若男女が拍手喝采を巻き起こした。

刀はないけど銃ならある一人サーカス団。
本日も、これにて開演だそうです。

「凄かったな雄二君のサーカス！ 最高だったぜ！」

「そうですねクミクミ！ まさか空中に放り投げられた空き缶をああい風に撃つてああするとは！」

「おうよ！ しかもその空き缶をあれしたかと思つたらいきなり銃の先端を噴水の方にむけてああしたもんな！ あんなことするとは思つてもいなかっただぜ！」

「更に放たれた銃弾の残骸をああい風にして回収するなんて！」

流石雄二！ 環境保護にも気にかけてる！」

「風船を膨らまして上に浮かばせた時は何してんのかわかつたもんじゃなかつたが、見えなくなつた時に何発か撃つてずたずたになつた風船が雄二君の手の中に落ちてきたのは圧巻だったぜ！ 計算して撃つてたんだな、雄二君の奴！」

「それにまさかその風船の中にあんなものが入つてたなんて……子供さんの落ちてきたからよかつたものの、あれがおばあさんとかおじいさんの頭に落ちてたらヤバかつたですよね！」

「バツカ何言つてんだよメグちゃん！ あれも計算してやつたに決まつてんだろ！」

「あ、そういうことですか！ いやー、雄二のパフォーマンスって毎回毎回変えてきますから私も毎回毎回驚かされてんですよー！」

前なんかあれですよ！ 銃を放り投げたんですよ！」

「銃を放り投げた！ え、その後雄二君は何をしたんだ！」

「……………したんです」

「スゲー！ じゃ、じゃああれか？ 今回のあれはその前回のパフォーマンスに磨きをかけたバージョンだつてことか？」

「そうなりますね！ 私も雄二があれした時には「あ、雄二バージョンアップしてる！」って心の中で一人拍手してましたもん！」

「なんだよそれズリーよめぐちゃんだけー！ 僕もその前回のやつ

見た上で今回のあれみたかったー！」

「もう！ 何言ってるんですかクミクミ！ クミクミなんて私なんかよりもつといい思いましたじゃないですか！ 雄二の奴……いきなり「今回はアシスタントがいます！ その綺麗なレディース！ どうぞ、前へ！」とか言っただかと思えばまさかクミクミにあんなことさせるなんて……！」

「ハツハツハ！ 僕も雄二君をちゃんと手伝えたかって聞かれると正直微妙な所だけどよお、あんな体験なかなか出来るもんじゃないぜ！ 僕が放り投げたカエルの財布があんなことになるなんてない！ しかもそれを一番近くで見られる！ サイツツコーな体験だったぜ！」

「雄二のアシスタントを出来るなんてそうそうないことなんですよクミクミ！ いいなーズルイなー私も手伝いたかったなー！」

「いいだろー！ カエルの財布投げた後に銃も触らせてくれるしよー雄二君！ あんなに熱い物なんだな、銃って！」

「あ、それは撃った後だからですよ。冷たいものってイメージがある銃ですけど撃った後のリボルバー部分を触ると熱く感じるらしいです。因みにそれくらいは私もやらせてもらいました！」

「何張り合っただよメグちゃん！ そんなこというなら僕なんてあのゴミ箱のイリユージョンまで手伝ったんだぜ！ スゲーだろー！」

「ずーるーいーよークーミークーミー！ 私始めて見たんですよ！ 銃のパフォーマンスだけじゃなくて銃のイリユージョンまで組み合わせてくるなんて！ 予想を越えすぎだよ雄二の奴！ いいなークミクミー！ 私も目の前で見たかったなー！」

「ゴミ箱をああしたかと思っただら銃をああしてカエルの財布をああしたもんな！ それで終わりかと思っただらまさかのどんでん返し！」

想像が追いつかねーぜあの怒涛の展開の連続は！ よっ！ 流石刀はないけど銃はある一人サーカス団の団長！ 見る者全てを魅了するあのパフォーマンスは見てない人を後悔させること必然だぜ！ 「いいなークミクミいいなー羨ましいなー……あ！ そうこう言っ

てる内に雄二の片付け終わったみたいですよ！　おーい雄二ー！
こっちこっちー！」

私とクミクミがベンチに座って雄二の素晴らしいパフォーマンスについての話しをしている内に、雄二がカエルの財布やらゴミ箱やらを引っ提げてこっちにやって来た。来る途中に私達の楽しそうな声が聞こえたのかなんなのかわからないけど、心なしか雄二はほんのり赤くなってる顔を俯けながら私に話しかけてくる。

「ど、どうだった、メグ。俺のサーカス……楽しかったか……？」
「うん！　サイコーよ雄二！」

「そ……そうか！　よかった、メグに楽しんでもらえて……」
「何言ってるのよ雄二！　楽しんだのは私だけじゃないよ！　あのパフォーマンスを見てたみーんな、雄二のサーカス見て楽しんでたもん！　スゴイよ、雄二！　ね？　クミクミもそう思いますよね？」

「そうだぜ！　楽しませてくれてありがとな！　しかもアシスタントまでやらせてもらって……もう……思い残すことはねーぜ……」
「……いやいや死なないで下さいよ久美さん！」

涙を流しそうになる目を両手でさりげなく隠しながらクミクミがそう言ったかと思うと、雄二が焦った顔で止めようとした。わかるよ、クミクミ……その気持ち。私がもし死ぬってわかってたら、雄二のパフォーマンスを見ながら死にたい気分だもん。

美少女の乱交パーティーなんかより。

美少女の喘ぎ声が飛び交う空間より。

私は雄二のあの姿が……大好きだから。

「……って、どうしたメグ。なんか顔赤いぞ」

「う、うるさい！　何でもないとての！　黙ってて！」

「な、お前、心配して声かけたのに黙ってるってのはどういう意味だコラア！」

「そのままの意味よ！　あーあ、雄二のその叱咤する声がクミクミの美声だったら気分が沈むどころか寧ろ気分高揚して襲い掛かるのに！　それか気分を沈めさせる雄二の舌を引っこ抜かせてもらおうよ

！」

「どちらにしるやめとけや！」

「またもやツツコミが被った雄二とクミクミだったけど、私はその姿を見て少し安心した。」

「さっきまであんなに暗い顔してたクミクミだったけど、雄二のサカスのおかげでこんなにも明るい顔してるんだもん。あ、あ、駄目、駄目よ私、流石にここで自分で自分を縛ってる自重という名の鎖を解き放つたら襲い掛かるどころか一瞬にしてクミクミを私のおもちゃにしちゃ……あ、あ！」

「駄目だつて！ 駄目だつて私我慢しなさいよ！」

「何お前駄目駄目言いながら僕の服を脱がそうと……う、うわ！」

「それ破いたら駄目だつて！ な、ヤン！ なめるなよ首を！」

「……グフフ、グフ、グフフフ……今まで空気よんで抑えてたんだからこれくらい許せやねーちゃん……」

「口調が変わってる！」

「だから俺の前でそういうことすんなよメグ！ やるなら俺にしる俺に！」

「はあ？ ざけんなキモい」

「俺の扱いの不遇さが凄まじい！」

「雄二の気持ち悪い提案ですっかり萎えちゃった私は、クミクミの耳に近づいて「また後で……グフフ」って小声で呟いてみるとクミクミの肩がリアルに震え上がった。そ、そんなに怖いのかクミクミ？ スキンシップじゃんスキンシップ。ま、ちよつと過激なスキンシップだけど。」

「まあそんなこんなで三人が三人ともハアハア言いながらも一応落ち着いたのを頃合いに、雄二がクミクミに向けて「久美さん。俺からあなたに渡したいものがあります」とか言つて本題を切り出した。」

「そう、本題。」

「私が何を思つて 雄二のパフォーマンスをクミクミに見てもらつたのかについての 本題。」

「ん？ なんだ？」

「……今日、久美さんは俺のアシスタントでサーカスを手伝ってくれましたよね」

「ああ。まあ……そうだな。僕の方が楽しませてもらったから手伝いだっただけで言われると微妙なところなんだけど」

「これ。アシスタント代です」

髪をポリポリかきながら照れるクミクミを横目に、雄二はクミクミにズボンのポケットから取り出した通帳を差し出した。それを見たクミクミは一瞬動きを止めたかと思うと、すぐに意識を取り戻して、「な、何いってんだよ雄二君！」と雄二に向けて叫ぶ。

「余計なことはしなくていいんだっての！ 同情なんかいらねえ！ 大体、元はといえば雄二君の写真を使ってメグちゃんをカツアゲしようとした僕が悪いんだ！ そんなもの、受け取れねえよ！」

「……違うんですよ、クミクミ。これは全部、そのフードを被ったとかいう女の人に仕組まれたことだったんです」

私が言いたい気持ちを抑えきれずにこう切り出すと、雄二が「やめろよ、メグ。俺が言う」って私を止めようとした。すかさず私が「嫌。カツアゲされた私が、クミクミに言うの」って雄二に向けて真剣な表情で言うと、雄二は「……チツ、しょうがねー」とか言いながら引き下がった。ありがと、雄二。私に言わせてくれて。

「まず、雄二のあの縛られた写真……間違いない合成なんです。私はそれをわかっていたから、クミクミのカツアゲに応じなかったんですよ」

「な……なんでそう言い切れる！ あの女は何も言っていなかったぜ！」

「そんなの決まってますよ、クミクミ。雄二のパパは警察のドンって言われてるって言いましたよね？」

「お、おう！ だからどうした！」

「警察のドンってくらい言われる雄二のパパは……色々な方面に恨みをかっつてみたいなんです。だから……『人質』にとられそうな

雄二の周りには、いつもボディーガードが最低二人はいるんですよ……雄二がこうやって縛られた画像なんて撮れる筈がないんです」「な……何!」

私かにわかには信じられない事実を言うと、クミクミは驚いた表情で周りを見渡す。でも雄二のパフォーマンスを終えて軽く三十分は経つ今の公園には、さっきまでのざわめきはなくなっていて、噴水の音くらいしかしない空間になってる。当然、ボディーガードらしき男の人は居ない。

「い、いねーじゃねーかそんな奴ら!」

「当たり前ですよ。ボディーガードがそんな簡単に見つかつちゃ駄目ですもん」

「ま……まあそうだけでも! わ、わかった! 確かに雄二君の写真云々はよくわかった! でもだからって、仕組まれたってのはどうということなんだ? 少なくとも僕は自分の意志でカツアゲをしようとした……母ちゃんの治療費を払う為に……! だから悪いのは僕なんだよ! そんな……通帳なんて貰えねえよ!」

「ストーカーです、雄二の」

「はあ?」

「雄二のストーカーの仕業です、クミクミ」

「……はあ?」

私がそう言うと、クミクミは首を傾げながらも雄二の方を向いた。雄二もクミクミの目を見て、こう言う。

「一年前……高校生になったくらいからストーカーがいつも俺の周りをうるちよろしてるんです。危ないからメグがいない時に一回ボディーガードに取っ捕まえてもらったんですけど、どうやらその時くらいから手口が悪化してきました。「雄二君がウチになびかないのはメグがいるせいだ!」とか言ってメグに手をかけるようになってきたみたいなんです。今回もその一端でしょう。ごめんな、メグ。また危ない目にあわして」

「別にいいよ雄二。私ももう慣れたし。ていうかストーカーさんも

方……」

「この通帳に入ってるのは、俺がサーカスをして稼いだお金です」
慌てふためくクミクミに向けて雄二がそう言うと、クミクミはぴたりと動きを止めて雄二を見る。

「俺の昔の話はメグから聞きましたよね。俺は、俺の『間違い』で誰かを幸せにするのが夢だったんです。サーカスを開いてパフォーマンスをして、お客さんから貰った少しのお金は自分で使わずに……いつか、誰かを幸せにする為に……取っておいたんです」

雄二は言つと、もう一度……もう一度、しっかりとクミクミの目の前に通帳を向けた。

「少しのお金ですが、俺の五年分の気持ちです。治療費のたしにはなると思います。使つてやって下さい」

「……そんなお金、受け取れねえよ」

「受け取つてください。これは俺の自己満足です。久美さんが気に病むことは何もありませんから」

「……ヒグツ……本当に、いいの？」

言いながら涙を流すクミクミは、懇願するかのように雄二の通帳へ手を伸ばす。雄二が笑いながら、「ありがとうございます、久美さん」と言つたのを皮切りに、クミクミは雄二から優しく通帳を手渡された。大粒の涙が、クミクミの目から零れおちる。「ありがとうございます……ありがとうございます……」と言いながら、クミクミは雄二とそれから私に向けて、くちやくちやな顔でこう言った。

「……この金は必ずいつか返す！ この恩も必ずいつか返す！ ありがとうとなぁ……母ちゃんを助けられる……ありがとうございます……本当に、ありがとうございます！」

「いってことですよ、クミクミ」

「早く病院に行ってあげて下さい。暗証番号は『四六四九』です。返してくれなくてもいいんで、そのお金。使つてやって下さい」

「……ありがとうございます！ ありがとうございます！」

クミクミは私と雄二に手を振りながら、女の子みみたいな口調であ

りがとうって叫んで去って行った。

そんなこんなで土曜日の夜。

雄二が昔から貯めてた通帳のお金も使い道が見つかって。私も久しぶりに雄二のパフォーマンスが見れて。クミクミのお母さんの病気も治って。

雄二のストーリーカー問題以外は全て問題無し！ っていう状態になると思ってた私んだけど、現実はそのはいかなかった。

ここは、何かを必ず『間違える』人達が住む街。

そんなに簡単に、ことが済む訳がないんだよ。

「わりいな、メグちゃん。こんな夜中に家に押しかけちまって」

「いえいえ、全然いいですよ。どうしたんですかクミクミ？ 雄二じゃなくて私に電話をかけてくるなんて」

「いや、初めは雄二君に電話しようと思ったんだけどよ、公園で赤外線通信した時そういや雄二君サーカスの準備してたなって思い出して……とりあえずめぐちゃんに電話させてもらった」

「あ……雄二の電話番号知らなかったんですね。うんうん。わかりました。で、どういったご用件ですかねクミクミ？」

「……いや、その。悪いんだけど、これ、雄二君に返しておいて貰えねえか」

残念そうな顔で私の前に差し出したそれは、今日の午後 雄二

がクミクミにあげた通帳だった。私は驚いて、クミクミの顔を見る。「な、何ですか！ やっぱり受け取れないとかやめてくださいよクミクミ！ あの後雄二の奴、「いやー、俺、いいことしたのかないいこと出来たら……いいなあ……」って私を見ながら笑ってましたもん！ あんなこと言ったのに結局返された日にはあいつ、恥ずかしさで泣きますよー！」

「あ、いや、そういうことじゃなくて……てか雄二君の奴……うん、

やっぱり後で雄二君の家にも御礼言いに行こう。……お、男の子の家を訪問なんて初めてなんだけど……」

「モジモジしないでくださいよクミクミ！ とにかくどういうことなんですか！」

私が雄二の話して赤くなってるクミクミを止める為にわざと大きく叫んで言うと、クミクミは「お、おう。実はよ……」ってしどろもどろになりながら訳を話してくれた。

必ず何かを間違える人生なんて、ちゃんと生きるのすら難しい。私でも。雄二でも。

クミクミでも。

クミクミのママでも。

間違いだらけの人生なんて、積極的に歩みたいなんて思わない。だけど考え方を変えてみたら？

間違いから逃げずにちゃんと向かい合ってみたら？

身を蝕む間違いも、視点を変えればあら不思議。

一言で間違いって言い表したって 悪い方向にしか傾かない間違ったって それがいい方向に傾く時だってあるんです。

「母ちゃんが『金のつくり方を間違えた』のか……宝くじで三億当てやがったんだよ」

ある電話の会話にて 二

「ごめんねあーちゃん今日カラオケ行けなくて！」

「……何があつたのよ」

「いやね、あのね、行こうとは思つただけどね、噴水公園の前に人だかりが出来てたからさ、なんなんだと近寄ってみたらあら不思議！ まさかの噂のサーカスやってたんだよー！」

「噂のサーカスって何？」

「え？ まさかあーちゃん知らないの？ うつわ時代遅れー」

「……………怒りの導火線がやけきたわ。じゃあね。もう一度会う時には……覚えてなさいよ」

「ご、ごめんあーちゃん時代遅れなんて言つて！ あ、あーちゃんは時代遅れなんかじゃないよっ！ 時代を先読みし過ぎて今の時代に興味が向いてないだけだもんね！ 私が勘違いしてた！ ごめん！」

「……………あんたそれ謝り切れてないわよ」

「え！ 『あーちゃんは未来に生きてる』っていう所謂未来人っぽさを褒めてみたんだけど！ お気に召さなかつたかな！」

「お気に召す云々の話しじゃなくて……………ああ、もういいわよ。あんたとそういう話ししてたら日が暮れちゃう」

「思わず時間を忘れちゃうくらいに面白さつてことだね、私と喋るの！ わーい、あーちゃんが褒めてくれたー！」

「……………なんか目に汗がたまり始めたかも」

「ヤバイよそれあーちゃん！ 今すぐ耳鼻科行こー！」

「耳鼻科は文字通り耳と鼻の病院であつて……………つてあんた、目の病院も眼科じゃないの！ そのまんまの病院の名前を何で間違えるの！」

「え？ うー、多分あれだよ。私が病院行ったことないつてのが原因かなっ」

「……一度も？ 有り得ないでしょそんなの」
「一度も行つてないよっ。何度も行つてないよっ。何度も……何度もー何度でもー立ち上がりー呼ぶよー君のー名前ー声がー洩れるまでー！ あーちゃーん！」
「音痴だわ煩いわ意味不明だわ五月蠅いわホントあんた……今夜中だつてわかつてんの？ てかあんた本当に一度も病院行ったことないの？ 正気？」
「うん！ 私、馬鹿だからさ！ 馬鹿は風邪ひかないってよく言うじゃん！」
「自分からそれ言う奴初めてだわ。……そうか、成る程。わかった。そういうことならあんたが一度も病院行ったことないっていうのも納得だわ」
「うわーん！ 改めて言われると泣きたくなるよー！」
「ヤバイわね。耳鼻科行つてきたら？」
「何言つてんのあーちゃん。目の病院は眼科だよ。うわーあーちゃん時代遅れー」
「……さよなら。今までの人生で一番楽しかったのはマインスイーパーだったわ」
「あ、あーちゃん駄目！ 死なないで！ そんな悲しい遺言聞いたの生まれて初めてだよー！」
「だつて実際そうだし……あ、あとウチが好きなのはピンボールかな。あのピロリロリンっていう始まりの機動音が病み付きになるのよねー」
「どうしよう……あーちゃんが今までの会話史上一番楽しそうな声してるよー。……あれ？ あーちゃん、逃走中は？」
「ん？ 逃走中？」
「うん。昨日そんなこと言つてたじゃん」
「逃走中は……三番目かな」
「あーちゃんにとって逃走中ってパソコンの中に入ってる付属品に負けるくらいの価値だったんだ……」

「まあ逃走中も面白いけどね。マインスイーパーに負けてるくらいじゃウチの生への欲求には程遠いわ。ったく、おとといきやがれ逃走中！」

「逃走中に関する関係者並びに各団体の方々この電話の会話は全てフィクションです実際の人物団体とは一切関係ないのでご了承お願いします因みに作者は逃走中大好きですだよー」

「……いきなり何言ってるのあんた」

「なんかこれ言ってるという電波信号が突然頭の中を駆け巡ったの」「そんなの受信したのあんた！ 危ないから無視しときなさいよそんな怖い電波！」

「なんか逆らったら殺すぞ的な電波も含まれてたみたい。いやー、久しぶりにい、ながあくしゃべったかんらあ、舌があ、もつれてしようがねえんだあ」

「誰よあんた」

「んだんだあ」

「気に入ってんじゃないわよ。可愛くないし」

「そうなんだあ……そうなの！ 方言って可愛くないの！」

「うおっ、ビックリした。いきなりテンション上昇させないですよーと、うん。好きな人は好きかもしれないけど、ウチは嫌い。てか大嫌い。田舎くさいったらありゃしないわ」

「……」

「ん？ どうした？」

「……自分のことを『ウチ』って指し示すのって方言じゃない？」

「……え？」

「だってさ。女の子で言ってる子結構いるけど、ドラマとかじゃそんなに見ないよね。どうなんだろ……わかんないや」

「……わ、私ね、みたらし団子の上だね、あんこ乗っけて食べたら『みたらし団子あんこ』っていう新賞品が開発出来ると、思つのよ、私」

「そ、そんなに無理して話題つくってまで私って言わなくても……」。

だ、大丈夫だよ！　ウチつていうのは方言じゃないと思うよ！　ウチつて言ってるあーちゃんカワイイし！」

「……そ、そう？」

「うん！　あ、因みに私が前読んだなんちゃらテストって小説に出て来るウチっ娘ちゃんも貧乳でした！」

「……………何でそれをわざわざウチに教えたの？」

「似てるなーって」

「は？」

「ひい！　ひ、一文字の疑問形怖いものはないんだよあーちゃん！　……………に、似てるなーって」

「ど、こ、が？」

「三文字の疑問形をわざわざ一文字に区切ってまで怒りを表すなんて……………あ、あの……………バストが」

「さよなら。今までの人生全く楽しくなかったわ」

「前よりも悲観した遺言になっちゃった！　ゴメンねあーちゃん許してー！」

「……………ふう。もういいわよ」

「え！　いってそのままのペツタンコでいってこと？　えー、もし私があーちゃんみたいなペツタンコだったら嫌だけどあーちゃんがいいならいいんじゃないかな！　個人の自由バンザイだよ！」

「……………どーにかして電話先の相手の胸と自分の胸を取り替えることって出来ないかしらね」

「棚から牡丹餅だね！」

「降って湧いたような幸運って意味？　あんた本気で明日覚えてなさいよ。……………てかあんた、今日なんでカラオケ来なかったのよ！」

「い、今さらその話題に戻るの！　無理なんだだよそれは！」

「無理して小難しい言葉を使おうとしない！　それにあんた絶対その後半平仮名にして言ってるでしょ！　漢字にして言ってみなさいよ漢字にして！」

「無理なんだい！」

「無理なんかい！ いや……もういい……私が無理矢理話しを戻せばいいんだ……」

「無理なんだい！」

「うるさいわ！ えーと、なんだっけーそのー、サーカスがどうしたの？」

「結局戻すんだねーうんうんいいよあーちゃんどんとこいだよー。えつとね……そう、今巷で噂の『刀銃』は無いけど銃はある一人サーカス団！』がやっててね。それ見てたらいつの間にか集合時間過ぎてたの」

「何その中二病くさいネーミングセンス。痛々し過ぎるわねそれ。どーせ略称は『刀銃』とかじゃないの？ 全く、痛々しいったらありやし」

「略称は普通に『サーカス団』だけど」

「……で、それが原因で今日はカラオケ出来なかつたって訳ね」

「ここでまさかのスルースキル発動なのあーちゃん！ それは逃げだよ！ エスケープスキルだよあーちゃんそれは！」

「うるさい。黙って私との会話に興じなさい」

「興じなさいってどういう意味？」

「え……え？ それは……その……楽しむって意味なんじゃないの。知らないわよそんなの」

「意味がよくわかんないのに使ってたの？ あーちゃん……それは駄目だよ……だから最近の若者は無理なんだいって言われるんだよ……」

「言われてないしあんたその後半を漢字に直しても訳わかんないし！ あー、もういいわよ！ とにかくカラオケ行けなかったのはそのなんとかサーカス団のせいなのね！」

「うん！ でねでね、あーちゃん。今日電話したのはカラオケドタキャンしてごめんなさいっていうのと……もう一つ言いたいことがあって電話したんだー」

「うん？ 何々、気になるじゃないのそんな言い方されたら。面白

いことだったらカラオケドタキャンを許してやってもいいわよ」

「ホント？　じゃあ言うね」

「うんうん」

「えっと……ゴホン。病院の病室に入る時って……エタノールで手の消毒するくらいで本当に大丈夫なのかな……？」

「……それがいいいたいこと？」

「うん」

「エタノールを全身にかけた後燃やされなさいよあんた」

「今までの会話で初めての死刑宣言があーちゃんから発せられちゃった！　う、嘘だよ！　冗談！」

「本当に冗談？」

「うん！　本当に本当に冗談！」

「マイケル冗談とかくだらないこと言わないわよね」

「言わないよっ！　そんなつまらないこと！」

「……あんたのすごいところって謝りながら人をけなせるところだと思っわ。うん。で？　本題を言ってみなさいな」

「う、うん！　えっとね……私、好きな人が出来ました！」

「……マジで！　え、誰よその相手は！」

「フッフッフ……驚くことなかれあーちゃん……私が好きになったのは……今日見た『サーカス団』の団長さんでもあり、私やあーちゃんの同級生でもある田中雄二君なのです！」

「……」

「キャハッ、言っちゃった！　告白の前の告白しちゃった！　うわー照れるー！　……あーちゃん？　あーちゃん。おーいもしもしー」

「……ご、ごめんあまりのことに気が動転しちゃって」

「まあそうだよねー。私がこんなこと言うなんて久しぶりだしー。

雄二君かー……競争率高いだろなー……。ねえあーちゃん。雄二君に彼女いるとかそーいう関連の話聞いたことない？」

「あるわよ」

「……え？　そ、それってどういう」

「雄二君……彼女居るわよ」

「……だ、誰？」

「ウチ」

「へ？」

「ウチ。ウチが、雄二君の彼女」

「……え？」

「そういうことだから。諦めて。悪いけど」

「……そ、それって本当なの？」

「ええ。本当よ本当。だから悪いんだけど雄二君は諦」

「そっかあ……そっか！　わかった、じゃあ諦めるね雄二君のこと

！」

「へ？」

「そっかー……なんだ、前言ってたあーちゃんの彼氏って雄二君のことだったんだー。じゃあしょうがない。うん。友達の彼氏奪うなんてしたくないし。しょうがない」

「……いいの？」

「うん！　全然いいよっ！　うん……全然、いいよっ！」

「……ありがとう」

「うん！　んじゃね、あーちゃん！　今日カラオケ行けなくてゴメンね！　また来週！」

「ちよ、ちよっと待ちなさい！」

「はへ？　なーにー？」

「明日、オープンし始めのケーキバイキング行かない？　ウチの奢りでー！」

「え？　いいの！　うわー、私あそこのケーキバイキング行きたかったんだー！」

「そうなの？　じゃ、じゃあ明日、一緒に行こー！」

「うん！　わかった！　じゃあまた明日……いつもの場所で！」

「午前十時集合ね！」

「うん！ じゃ、また明日！ おやすみあーちゃん！」

「おやすみ！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ふう。ゴメンね。雄二君はウチのものなの。例え誰であろうと渡しはしないわ。どうせあんた、明日も約束に来ないんでしょ？ てか来たことないじゃないのよ。ま、来たらその時点でアウトなんだけど。……………さーて。メグの奴もメグの奴だけど……………あの不良も不良よ。折角お父様からもらったお小遣をやるって言ったのに拒否しやがって……………ったく、これだからバカは困るわ。あーあ、明日は何してメグを困らせてやるうかなー。いじめ、いじめ、メグを、いじめ、いじめはする方じゃなくてされる方が『間違い』なのよオッホッホー。……………何馬鹿言ってるのよウチは……………だから雄二君も振り向いてくれないんじゃないの一年くらい雄二君を愛してるのに雄二君は振り向いてもくれないし雄二君が嫉妬するかなって思ってわざわざつくって別れた彼氏も今じゃ鬱陶しいし……………「荻原のことが好きだ荻原のことが好きだから話しをさせてくれ」とか電話先でウザイのよ鬱陶しいのよ……………だったら私と電話なんかじゃなくて本人に直接会って話せばいいじゃないのよ……………ああああ、もう！ 雄二君？ なんで私に振り向いてくれないの？ 早く私と付き合わないと……………メグがどうなっても shouldn't だよ？ フッフ……………アハハハハハハハハ！ ゴホ、ゴホ、声涸れた」

「女の子ばかり出てる小説に吐き気を催すのは私だけでしょうか？」

電灯の明かりだけが所々円形に足元を照らす夜の暗闇の中、真姫ちゃんは笑顔のまんま、いきなりこんなことを会話のネタにふってきた。

「いきなりどうしたの真姫ちゃん」

「……メグ。だから何回も言ってますよね。私のことはアラちゃんと呼びなさい。……というより金曜日の帰りくらいまではちゃんと覚えてましたよね。一体全体何事ですかこの心境の変化は」

「いやねー、昨日クミクミっていうお姫様に「俺はなんとか姫なんて残念な名前じゃねえ！」とかなんちゃら言われちゃってさー。真姫ちゃんもそんなこと言われたままじゃ嫌だろうからわざわざ名前にちゃん付けで真姫ちゃんって呼んでるんだけど……ダメ？」

「ダメだとかダメじゃないだとかそういう問題じゃないですよ、メグ。そもそも私、そのクミクミとかいう残念な名前の人知りませんし」

「……なんか根に持ってない？」

「持ってませんよ。ええ持ってませんとも」

そういうと、真姫ちゃんは私の前で電柱の後ろに隠れながら、静かに私達の視線の先にいる男の子の方を向いた。てか真姫ちゃんその微笑みながらのガン見は怖いよ。何考えてるかわからないっていうのもこのレベルまで達するともう尋常じゃなくなっちゃうよ真姫ちゃん。

私がそんなことを思いながらも真姫ちゃんの肩より少し伸びてる長めのサラッサラな黒髪を眺めてうつとりしていると、真姫ちゃんは「ハア」とため息をついて　それでも笑顔のまま私の方を振り返ってきた。

「やっぱりまだ動く気配はなさそうです。なんなんでしょうホントにあの琢磨君は……こんな深夜に十字交差点ですつと立ち止まって動かないなんて」

「こんな深夜でしかも翌日に学校な段階で電話をかけてきたのはどこのスマイルガール？」

「ちよつと……やめてください。メグからスマイルガールとか言われるといつ襲われるのが不安になります」

「平気で私の言葉の前半無視しちゃったよ真姫ちゃん……。じゃあ、あれだね、今すぐ襲ってもいいかな！ 深夜に電話してきた迷惑料の代金で！」

「襲ってきたら真つ先に叫んで琢磨君に救援を呼びますからそのつもりでね、メグ」

「……ふあい」

そついいながら、真姫ちゃんはまた琢磨君もとい鈴木に熱い視線を浴びせていた。私はその姿を見つつそそれつつ、真姫ちゃんのサラサラヘアを意味もなく撫でてあげる。すると真姫ちゃんは「何しやがりますか」っていいながら私を睨みつけてきた……。のかな？ とにかくそんな感じで私の方を向いてきてくれたから、「見て、真姫ちゃん。真姫ちゃんの美しさはこの満点の星空よりも輝いてるんだよ。だから私とこのまま一晩共に過ごそう」って提案してみた。メグちゃんは表情を少しも変えずに「私を満足させられる実力がメグにあるのですか？ あと真姫ちゃんって気安く呼ばないでください。私の名前を呼んでいいのは私を三十六時間休憩無しで満足させてくれた琢磨君だけですから」って言うてきた。私はそこまで聞いて少し……。とうかかなり残念に思いながらも「……ラジャーだよアラちゃん」って出来るだけ明るい声で言うてみた。この時の私の苦しみわかるかな皆さん。こんなにも真姫ちゃん……。じゃなくて、アラちゃんのこと大事に思ってるのに報われないこの私の気持ち！ 悔しいつたらありやしないうん全くとん。

でもま、こんなにも　可愛く　笑ってるアラちゃんは昔には見られなかった姿だったし、これはこれでお得なのかも。

え？　誰の得なのかって？　そりゃ勿論私の得さ！　得々サービス大バーゲンさ！　それ以上だったら嬉しいけどこんな夜にこんな美人ちゃんの笑顔見れるなんてこと以上に嬉しいことはそんなにないだろうからしょうがなくそれ以下に留めてあげる……って何言ってるかわかんなくなっちゃったよ私！　テヘ！

「はい暇ですね。誰かが残念な擬音を発したのは気のせいに私はします。……そうですね、暇潰しついでにさっきの話しに戻しましょうか。メグはどうなのかわからないですが、少なくともこの私は女の子ばかり出て来る小説は大っ嫌いなんです。ちよつと魔物倒したり　ちよつとラッキーパンチに出くわしたり　ちよつと行き倒れ寸前の状態から助けてあげたり　ちよつと女の子が赤面するような台詞はただで沢山の女の子が周りに集まってくる男の子なんて……存在しませんよね？　気持ち悪い……低俗にも程がありません」

「そ、そーなんだ」

「そうなんです。昨今ではライトノベルと呼ばれる所謂ビジュアル的な挿絵が本の所々にちりばめられてる作品にその傾向が強いらしいので、怖いものみたさに読んでみたのですが……その時、私は気付いたのです。しかしながらそのライトノベルの中にもいい作品はいっぱいある　と。一くくりに出来ないのですよ。その残念な作品達は」

そういいながら、私の気のせいかもしれないもしくは夜の暗がりであらちゃんがよく見えないせいかもしれないけれど、なんだか妙にうっとりした顔にアラちゃんはなつたように見えた。そんなにお気に召す作品がラノベにあったのかな。半月？　文学少女？　ゴス？　キノ？　図書館シリーズ？　どれもこれも最高なんだけど、アラちゃんの雰囲気は合うかって聞かれたら微妙だな！。

そうは思いつつも話しの対話上、私は何か相槌をうたなければな

らないのでございまして。うーんうーんと頭の中だけで唸りながらなんとかアラちゃんのイメージに合いそうなラノベを見つけ出してみました。

アラちゃんのイメージは 朗らかだけど何かいつも裏がある感じ。

じゃあこれだね！ ってな流れで私が相槌として選んだ作品はこのシリーズ！

「へ、へえー。私はあれだねー、戯言シリーズなんかが好きだなー」
さーこれはどうなんだろう？ 大丈夫なのかなストライクゾーンかな違うならせめて外角高めのギリギリストライクくらいにはなつてほしいなーって内心冷や冷やししながらアラちゃんを見てみると、「あら？ メグって戯言シリーズ知っているのですか？」というような意外と好感触な反応が帰ってきてホッとした私。

「メグも一応読んだのですかあの作者の作品。まあ戯言シリーズも面白いですけど、私が好きなのはりすかシリーズですね。主人公が小学生にも関わらず体の半分が魔法使いの肉体で出来てるっていう発達の斬新さが素晴らしかったですね、あれは。まありすかシリーズも結局はハーレム物だったんですけど……主人公の何人目かの母親がいいキャラしてたのは記憶に新しいです」

りすかシリーズかー……聞いたことも読んだこともないなー私。こりゃ不覚。もしこの段階で私がりすかシリーズとやらを知ってた場合、今からその話しをずっとして、しならばその流れでベッドに持ち込むことも可能だったかもしれないのにー。残念きわまりないね。うん残念。

「……ふーん。私も読んでみよつかないそれ」

「タイトルが残念ですけど内容の面白さは保証しますよ……っと。メグ。どうやら私は勘違いしてたみたいです」

「何が？」

するとアラちゃんは唐突に話しの腰を折って私にあらためて話しかけてきた。なんかアラちゃんの切り替えがいつにも増していきな

りだなー。やつぱりこうやって喋りながらも心の中では私とのねっ
とりとした絡み合いを想像中……ではなくではなく、鈴木のこと
縦横無尽に駆け巡ってるのかもね。嫉妬しちゃうなーもう。

私がなんだか場違いなことを考えているのを知らないまま、アラ
ちゃんは私にこう言ってきました。

「このりすかシリーズの主人公みたく何人も女の子に囲まれるハ
ーレム物……そんな作品に私がもしいたしたら首を切る次第なの
ですけど……、メグ」

「うん？ なーに？」

「ある意味メグもハーレムですよな」

「……ハハハ」

アラちゃんのズバリな指摘に笑うしかできない私を見て、アラち
ゃんはもう一回深い溜息をつく、「今夜くらいは自重してくださいさ
いね。さもないと貴女のその『間違い』を全校生徒にばらしますか
ら」って軽いノリで重い口調のまま忠告された。アラちゃんがそん
なことする子じゃないっていうのはわかりきってるんだけど、なん
だかね、アラちゃんのこの微笑みを向けられたらそんな計算よりも
先に恐怖が私のナイスボディを包んじやうんです。

だってアラちゃん 終始笑顔なんだもん。

ことの始まりは今日の午後。昨日が土曜日の日休だったのに結構
色々なことがあって、私は午後二時にベッドから起き上がった。確
か夢の中では全裸のクミクミがいて、「めぐちゃん……あんな、そ
の……めぐちゃんなら、何されても、いいぜ」なんてことを全身ほ
てった状態のままのクミクミのこの台詞に私が最高に興奮して一晚
中シングルベッドの一枚の布団の中で絡み合った記憶があるんだけ
ど……そのせいかな。布団が寝汗でぐちよぐちよになってるのは。
あ、ぐちよぐちよってという効果音は何も私が興奮し過ぎたって訳じ

やないよ。ただ単に汗かいてそれをシーツが吸ってくれただけだから。そこらへん勘違いしないよーに。因みに勘違いしてくれた女の子は私の自宅に電話してね！ ピッチピチでネットな高校生女子が貴女のお家にデリバリーされるよ！ その後は…… 大きいお友達だけお楽しみに！

とまあそんな感じで朝（まあ昼なんだけどねホントのところ）を朗らかな笑顔で起きた私は、夢の中と同じようにピンク色のパジャマの前を開けたまま立ち上がって、そのまま私の部屋を出た。ここでポイントなのが私のパジャマの前が開いているということだね。言うまでもなく私はナイスバディー。この私のビッグな胸はか弱い女の子を包み込む為だけにあるんだけど、そのせいでいちいちボタンをしめるのが窮屈で厄介なんだよねー。だから私はたいいてい家にいる時はパジャマの前を開けて生活してます。露出狂？ 変態？

あーこの漢字ばかりの悪口を男に言われたら即効ボディーブロー並の怒りが私を襲うのに、女の子に言われたら逆に興奮して体をくねくねさせたくなるのは何でかな？ 何でもないよねこれきつと！ 私が普通な印さ！

でも私はこの時、一体全体何時なのかを把握してなかった。だって仕方ないじゃん。夢の中の快感と悦びをなるべく忘れなくなかった私の気持ちを察してよって話。考えてみてちょうだいよ。夢の中なのは残念なんだけど、それにしても美少女が私の近くにやってきて耳に吐息を吹き掛けながら私の胸を揉んでくるんだよ？ しかも絶妙に快感だし。

……この夢のパラダイスを小学六年生の時に知った私は、以後自分がみる夢の内容を自由自在に変化させることが可能になりました。まあ、このおかげで私は学校で自重出来たと言っても過言じゃないね。ビバ夢中乱交。我ながらいい響きだこりゃ。ハービバビバノン。

とにもかくにもそういう訳で部屋の中には目覚まし時計やら壁掛け時計やらがあるにも関わらず、今が午後の二時だということを知

らなかった私は、当然この家に　誰が居るのかわからなかった。
欠伸をしながらガチャリ、とドアノブを回す際に出る効果音を盛大に鳴らしてドアを開けたその先には、何故だかわからないけど
私服姿の雄二がいた。

「え……」

「あ、起きたかメグ。お前休日だからって寝過ぎ……ってふおおお
お！　な……何だメグこのパジャマの着こなし方はっ！」

「……ふおおおおお！　み、見るなこらあっ！」
「グハアッ！」

このこのこのこのこのクソクソクソ雄二このヤロウ見るな見るな
見るなてか何で私の家に勝手にあがりこんでああそうか幼なじみだ
からかって幼なじみだからって幼なじみの裸みて言い訳ねーだろゴ
ラア！　って意気込んだ私はパジャマの前を左手で隠しつつ、右拳
を力いっぱい握りしめてみぞうちを狙い打撃を着弾させた。見事に
決まる私の一撃必殺。雄二は声を漏らしながら体を前に倒そうとす
る。

けれども。

その先には勿論のことパジャマ姿の私が居る訳でありまして。

「ぐおお……」

「……え？」

雄二がそのまま倒れて、私はあまりの展開にうろたえたまま雄二
の勢いに乗っかって後ろに倒れてしまった。

さて皆さん。第三者の目線でも今この状況状態がどんなにヤバ
イことになっているかを簡潔に説明させてもらいましょー。

雄二が、ハアハア言いながらパジャマの私を押し倒して馬乗りに
なりました。

……うおおおおお！

「な、何やってんのよ雄二！　ちょ……どきなさいって！」

「ぐ……やめるあまり動かさないでくれ……口から何かが出る……」

「何かって何よ！　あーもういいから！　出してもいいから！　と、

とにかく……触らないで！　だ、ダメエ！　早くどいて！」

「わ……わかった……って何だこの手の中に広がる柔らかい感触は……」

「ベタベタ過ぎるラッキーパンチかまさないですよ！」

そう私が言っても一向にどことうとしない雄二。な、何でどかないのよこの狼とか思ってた雄二の顔色をさぐってみたら、半分意識が途切れかけているようにみえた。もしかしてこいつ……さっきの私のみぞうちが意外と効いちゃってる？

「雄二。ねえ雄二、大丈夫？」

「ぐ……すまん。多分大丈夫だ。とりあえずこの状態から抜け出すことに専念しよう」

「うん……うん」

雄二の頼もしい言葉に思わず頷いてしまう私。ヤバイ……何この感覚。これが所謂吊橋効果って奴なのかい？　えー、雄二と吊橋効果……うん……うん。ま、まあとにかく今はこの状態から脱出しないと。ていうか顔が近いよ雄二。ハアハア言いながら私の顔見ないですよ。なんか……その……。

「まず今、俺の体はメグの上に乗っかっている」

「……うん」

「退こうにもみぞうちが効き過ぎて俺の体が動かない」

「……うん」

「どつやら体全体の骨がやられちゃったらしい」

「うん……って、え？」

みぞうち殴ったくらいで体全体の骨がやられた？

何言ってるのこいつ……？

「だからあと一時間は動けないな。あ、あとむやみやたらと動かしたら骨がギシギシ言うからメグもこのままじっとしてるように」

「……」

私にそう言いながら徐々に顔を近づけてくる雄二。ハアハアの頻度が段々高くなっていくのは私の気のせいなのか？

いやいやー。

これ絶対気のせいじゃないでしょー。

「うーむ、一時間はちよつと短いな……。あ、そういえば、メグの母さんと父さんが帰ってくるのが七時過ぎるらしいからさ。その助けが来るまでじつとしていてくるよ。おっと、トイレとかは我慢してくれ。流石の俺もメグのそんなシーンは見たくな……。いや……。それもいいかも……。って違う違う。まあ、あれだ。とにかくメグはこのまま俺の胸にメグのその包み込むような胸を押し付けていく」
「七時までずつとこの状態でいたいって雄二あんただけ変態なのよー！」

「ゴブハアツ！」

平気で変態なことを言う狼雄二を殴り飛ばした私が急いでパジャマのボタンをちゃんと閉め、雄二を「バカ！ バカ！ バカ！ 何考えてんのよこの変態！ 何で私の部屋に入ろうとしたのよこの狼！ ふえ……。ふえーん！」って泣きながら雄二の両頬を馬乗りになって連続往復ビンタしていたら、雄二の体が動かなくなりました。

「……。あれ？ おーい雄二ーまだ第一ラウンド終わったばっかだよ……。起きないのー？ じゃ、じゃあ……。その無防備な唇……。の中にタバスコでも入れてあげようかー」

後から聞いた話しなんだけど、ママパパはいくら起こしても起きない私一人を残して外出するのは気がひけたから、留守番として雄二の助けを借りたんだってさ。もう、ママもパパも無用心すぎるよ。雄二なんかを私と一緒に留守番させちゃダメだって。雄二がムラムラしちゃって過ちおかしたらどうすんのさ。

……。まあ。

過ちおかす寸前だった雄二に　ママパパが帰ってくる前の午後六時半まで、私の制裁が続いたのはまた別のお話。

午後六時半をちよい過ぎた夕暮れ。私の制裁がなかなかきいたのかどうかわからないんだけど、それから雄二は「なんか……色々ごめん……」って言いながら、家の玄関で帰る途中、私に振り返った。

「ちよつとさ。諸々の事情でメグが心配になつたんだ」

「なにさそれ。どういうこと？」

「諸々は諸々だつての」

「だからその諸々を教えなさいつての」

私がこう言うと、雄二は「うーむ……」って頭を掻きながら言葉を濁した。なんじゃこりゃ。どういうことなんだろう。雄二が『躊躇出来ない間違い』を持つてる筈の雄二が　こんなに私になにかを言うのに躊躇うなんて。

「昔は私が「家にエロ本何冊ある？」って聞いても答えてくれた雄二が何で……」

「……って何でいきなりそんな過去の話持ち出しちゃつてんの！」

「確か二十五冊だつて。すごいですねー田中さんすごい変態ー」

「それは俺が凄いのか俺が凄いわ変態なのかどっちを指し示してんだよ！　というよりも確かお前、その後俺の部屋に勝手に入りこんで二十五冊のエロ本全部持つてつたよな！　メグの方が変態じゃねーか！」

「失敬な！　私のことは女の子の体を研究する偉大な研究者と呼びなさい！」

「うるせーよ偉大な変態！」

雄二はそう言いながら「あーもう！　なんでこんな話にいつの間にかなつてんだよ！」って悪態をついていた。うーん、確か雄二のエロ本の中に私の好みの女の子はいなかったんだよなー。全部が全部巨乳で背の高い女の子ばかりで。私が好きなのは可愛くて身長

が小さい……なんかこう、全てを投げ出してでも身を捧げたくなる女の子なんだよ。あ、全てを投げ出すってのはあれね。お金とか、私の体とか。ていうか体については私から奪うから。奪った上で……もう引き返せないよ」って耳元で呟いてあげるのがこの私！そこで赤く頬を染める女の子をそつと抱きしめてあげるのがこの私！その私を見ながら無言で抱きしめ返す女の子……キヤー！単なるヒモで満足出来る程私は軽くないんだよ！真のヒモってのはお金もお体も提供し提供される関係のことなのさ！真理だね、ある意味！

「ああああ、ヒモサイコー！ヒモになれるなら私全てを投げ出すから今すぐ私をキヤッチアンドリリースして世界中の女の子ー！」
「何いきなり危ない発言してんだよお前！今六時半過ぎっていう微妙な時間帯ってのわかってんのか！」

「微妙な時間帯？ いやいやー、凄い人達は朝の六時半過ぎでも絡み合うからさ、午後六時半を微妙な時間帯っていうのは決め付けだと思っよ」

「何の話！」

「え、言わなきゃダメなの！な……雄二、あんた幼なじみにそんなことをわざわざ言わせたいなんてどれだけ変態なのよ！この狼！最低！」

「理不尽もここまでくると泣けてくるっの！」

なんなんだよこれなんなんだよ！とにもかくにも何故に俺がここまでせめられなきゃならねーんだよ！って喚きたてる雄二。

……はあ？

いやいやあんた、何言ってるの？

「まず初めの原因はあんたが私の……ぱ、パジャマ姿見たからじゃん！」

「おうよ！良かったぜ、あれは！」

「包み隠さず開き直るなこの変態！」

言つと私は雄二の右頬にビンタをくらわした。何でよ……何であ

んなあわれな姿を雄二なんかに見られなきやいけないのよ！ 夢の中でのあの快感……あの甘い吐息……その後の開放感が全部台なしじゃないの！ なんなのさ、もう！ 有り得ない有り得ない有り得ないっ！

「部屋に忍び込んだのがクミクミとか真姫ちゃんとかだったらそのままベッドの中に持ち込んで有無を言わさないまま一夜を過ごすのに！ それがなんでよりもよって雄二なのよ！」

「良かった……本当に忍び込んだのが俺で良かった……！」

「何が良かったのよ！ 私と雄二の絡み合う姿？ はん、返吐どころかヘドロが出るわ！ 誰得？ 需要何パー？ 誰がそんな展開望んでんの？」

「少なくとも、メグの目の前にいる男はその展開を望んでるぜ」

「え？ 私の目の前には誰もいないんだけど」

「存在が消されちゃったよ俺！」

そう言っただけながらも、「と、とにかく！」って言って仕切り直した雄二は、私に向けて最後にこう言ってきた。

「今日の夜、絶対に外をうろつくなよ」

「え？ 何で？」

「危ないからだって。特に今日は……諸々の事情で危な過ぎる。頼むから 何があっても夜……ましてや深夜なんかには絶対に外に出るな。わかったな？」

「……もし外に出たら、どうなるの？」

雄二がさっきまでの雰囲気と違ってかわって真剣な表情になったから戸惑う私。え、こいつが今までこんなに必死になって外に出るなんて言ったことあったっけ？ しかも何だか目がマジなんだけど。どうしたんだろ……。

私が暗い顔で俯きながら言ったのを見て忠告がきいていることを悟った雄二は、私の両肩に手を置くと、こんなことを言い始めた。

「何でとかそんなの関係ないんだが……あえて言わせてもらうぞ、メグ。お前がいくら変態でヤバイ奴でも、外見は立派な女子高生な

んだ。というかメグは可愛い女子高生なんだ。いや、それだけじゃ足りないな……メグは日本……違う、これでもまだまだ足りない。メグ。お前は世界一可愛い女子高生なんだよ。そんな奴が深夜に外ほつつき歩いてたら周りの奴らが放つとく筈ないだろ？ 誰かに狙われるかもしれない。誰かに襲われるかもしれない。だけど、もしそんな危険なことがメグの身に降り懸かったら……俺がメグを助け」

「え、襲われるって女の子にかな！ キャッホーやったー！ これからの私の趣味は深夜徘徊に決定だね！」

「俺の台詞全部パーじゃねこれ！」

「うわあああ、恥っず！ 何これ……何これ！ 恥ずかし過ぎるだる俺！ って悶える雄二。その姿を見た私が「悶えるとかやめてよ雄二。見苦しい」っていう素直で率直な感想を言っただけだ。」

「マジかよ」って呟きを残して泣き始めた。

「……マジかよ。まさかこんな綺麗な夕暮れを背景に本気で泣き出す高校生男子がいるなんて。」

「泣かないでよ、雄二。ほら……なんか……そんな姿見るとさ……」

「メグ……まさかお前、母性本能がくすぐら」

「気持ち悪いからさ」

「……ハハハ」

私がこう言うと、雄二は後ろを振り向いて、私の視線の先にある夕暮れを見始めた。ハハハ……ハハハ……という憂い声を醸しだしながら。

「いやーいけないいけない。ちょっと言い過ぎちゃったかもしれないね、これ。私の裸を見たとはいえどうであれ、雄二は私を心配して家に居てくれたんだもんね。恥ずかしかったのは私の方だけじゃなくて言葉でいい気持ちはやまやまなんだけど……なんかしゃくに触るから言うのはやめておこう。うん。」

その代わりに、この一言を雄二に。

「ありがとね。雄二の言う通り、今日はおとなしくじっとしとくよ」
私がそう言うと、多分悲しい表情を輝かせながら私に振り返る雄二。「そこらへん頼むぞ、メグ！」とその場を去ろうとする。

「ちょ、ちょっと待って雄二！」
「何だ？」

「結局あんた、こんな時間に何しに行くのよ！ 誰か女の子をナンパしに行くって言うなら是非とも私も一緒に連れて行って欲しいんだけど！」

「んな訳あるかよ！ 俺がメグ以外の女子をナンパするなんて絶対ないからな！ 違う違う、俺はこれから…… ちよつと撃退してやるだけだ」

「撃退って……何を？ もしかして、魔物とか？」

「こんな時間帯に外出たら撃退出来るのかよ魔物！ ……いや、あの意味……魔物かもしれねえな、今から俺が撃退するのは」

「え、それってどういう……」
「……何でもない。忘れてくれ」

言うと雄二は私に「じゃあな」と右手を振って玄関から去っていった。私は手を振らずに、胸元で両手をにぎりしめ、離れていく雄二をずっと眺めていた。

魔物を撃退って一体全体何なんだろう……というかそういう世界観もありなんだっけこの街。よくわかんないね、ホント。雄二の言い分も 雄二の行動も 雄二も。
ってあれ？

なんか雄二ばっかだな今の私。

うん、キモい。やめよう、雄二のこと考えるの。

「さーて、出会い系サイトでも見ようかなー」

そんなことを思い付いた私は雄二の背中が暗くなりはじめた夕暮れの中に消えるのを見届けると、家に入って靴を脱ぐ。玄関の直ぐ側にある階段をあがって部屋に入る私。思うんだけどさ、階段でよくある見えそうで見えなさそうなあのスカートパンチラは最強だと

思うのよ、私。だってあれ無茶苦茶興奮しないかな？　なんか見えなさそうなんだけど、じつと見てると見えそうじゃないあれ？　凄まじいよ。たまにバッグとかで隠す女の子いるけどさ。何考えてんだろねあれ。だってじゃあ貴女はなんでそんな短いスカートをわざわざはいてるの？　見て欲しくないならそんなの着なきやいいのに……　ってもしかしてこれ自虐プレイかな！　楽しんでんのかな！

その見られそうで見られないその状態を楽しんでんのかな！　うおおおお、ヤバイね、そんなこと考えだすとさ！　しかもね、一番凄いののはバッグで隠さないまま結局パンツを見せちゃう子だよ！　なんなの？　見せてるの？　『ほら、見せてあげるから私の下着みて興奮してなさいよ』って心の中で思ってるのかな！　見てる方も興奮して見せる方も興奮して、一石二鳥じゃん！　誰しもが得をして誰しもが損をしない仕組みが出来上がっちゃってるじゃん！　素晴らしいね、駅の階段！　エレベーター使う奴はダメな奴だよ、うん！

そんなようなことを考えて階段をあがりきった私。この間一分もかかってないね。やっぱり物思いにふけてると、人間ってのはゆっくりになっちゃうんだよ。それが今の一分の私の妄想で証明できたってのはなにげに良いことなんじゃないかな。だから私はこの妄想という想像という思想をやめないよ！　誰が何を言ったところで、やめるものかつ！

「グフ、グフフ……あ、よだれが床に……危ない危な……このよだれを残しておいたら家に来る女の子が誰かなめてくかも……拭くのやめよーっ」と

こんな独り言を言いながら部屋に入ると、狙ったかのようにママとパパが「ただいま」って言いながら家に帰ってきた。おお、危ないところだったね。もしさっきの独り言が聞こえてたらママの機嫌を損ねることになってたよ。やっぱりたまってるなー、私。最近出会い系サイトで女の子の写真眺めてないし、沢山の女の子に会える学校に行けるのにもまだ時間あるし……アダルトなサイト覗こうかな……でもそこまでしたら流石の私も罪悪感が……いやいやでもでも

ああいうサイトって雇われて喘いでる所謂『女優』の方々なんだよね？　じゃあいいじゃん！　てかなんで男が見ていいのに女が見たら微妙な感じになるのよ！　男女平等！　差別はダメだよ差別は！　私が拳をにぎりしめて一大決心をしようとしていると、「なにしてんの。早く降りて来なさい。夕飯はキャベツよ」というママの声が聞こえてきちゃった。何よ、もう。あと少し時間があつたらイヤホン両耳にかけてビバエンジンジョイタイムに入ってたのに！。てかキャベツが夕飯って。差別もダメだけどキャベツだけの夕飯もダメだよ。

だからさ。男も女も平等なら、エロい店に私が入っても嫌な目で私を見ないでよその殿方。私も貴方達と同じ……興奮を持って余して弄びたい仲間なんだからさ……。仲間とかいて友達と読もう。初めて会った時の第一声は「どの子を一日中言葉攻めしたいですか？」に決定だね。この言葉に「何言ってるの。決められないよ。僕（もしくは俺。私とかウチとかいう女の子の場合は第一声の変更になってこの注意書きの意味自体なくなっちゃうから気を付けてね）は……全員の女の子を言葉攻めしたい」って返事をしてきた紳士の方とは親友になれそうな気がするな！、私。握手して二十分くらいカフエでしゃべりあつた後、実際にナンパしに行くんだ！。男だけなら警戒されるけど女の子が傍らにいたら警戒心が薄れるらしいよ。どこのテレビでそんなこと言ってた気がする。これぞホントのゴキブリホイホイだね！　あ、ゴキブリっていうのは私に興奮という名前の叩いても叩いても消えない黒い感情をうめつける存在を指し示してるだけだから。うーん、でも流石にゴキブリはマズイな……。じゃあ痴女ホイホイでいこうか！　おっと、別にナンパしてホイホイついてくる女の子が全員痴女って言ってる訳じゃないんですよそのいけしゃあしゃあなお子ちゃま達。ただね、単純に私が純心可憐な女の子を痴女にかえるだけだから。これが俗に言う等価交換だよ。赤色の服着た国家錬金術師も真つ青だねこりゃ。

なんて魂胆を心の中で秘めながら、私は夕飯を食べ、テレビをみ

て笑い、風呂に入り隣に女の子が居座ってる状況を妄想しつつ興奮しつつ、風呂からパジャマを着て出て、部屋に入り、数学を一時間勉強し、保険体育を二時間勉強し、保険体育の勉強中パソコンに映されてる勉強道具に舐めなくなるのを必死で堪えて……ていうか勉強道具ってヤバ過ぎな表現だね……グフ、グフフ……。

という訳であります。

現在時刻は午後十一時。流石に寒かったから窮屈な白玉模様のパジャマの前をしっかりと閉めて、すっかり暗くなった空を眺めながらぼつと先刻の勉強道具について考えていると、下の階から「メグちゃん。お友達から電話」っていうママの声が聞こえてきた。こんな時間に誰からだろ。男からだったら受話器を置くつもりだけでも雄二なら今何してるのか聞けるな！。うんうん、女の子なら最良なのは間違いないよ。でもまあ、別に雄二でもいいや。って思いながら階段を降りて、ママから「ありがとー」って言って受話器を受け取ると、にわかには信じられない声が聞こえてきたんですねこれが。

「もしもし。こんばんわ、メグ。今時間大丈夫かしら？」

「ま……まままま真姫ちゃん！ な、何で真姫ちゃんがこんな時間に私の家に電話してくるの！」

「あら。嫌だったのなら今すぐ電話を切らせて貰うけど」

「い、いやいやいや！ 待って待って！ 今真姫ちゃんの全裸姿想像するから！」

「……何でそんなものを待たなければいけないのですか」

ハア、とため息をつきながら電話の先の私に「こんな時間なのでですけど、電話いいですか？ ちょっと話したいことがあるのですが」って言うてくる真姫ちゃん。すかさず私が「何かな！ 告白なら二十四時間フルタイムで受信準備完了中だよ！」って言うてあげると、「私は貴女の告白をしない準備なら四六時中出来上がってますからそのつもりでね、メグ」と返す真姫ちゃん。

「というよりも……貴女が私に告白したのは、昔の話でしょう？」

すると真姫ちゃんは平坦な口調でこんなことを口にしてきた。うう、流石クールビューティー代表の真姫ちゃんだよー。

そう、昔の話。

私が『覚えたことを全て間違えて覚える』先輩の卒業した姿を見たのが去年の三月の後半。そこで価値観がかわった私が一直線に向かったのが、下校途中の真姫ちゃんだったんですよ。「どうしたのですか、メグ。そんなに慌てて」って笑顔で対応してくる真姫ちゃんを見て決心した私は、遠い空の下で笑ってる先輩の姿を想像しながら、河沿い堤防の橋の上。「私、アラちゃんのことを好き」って真姫ちゃんに向けて叫んだの。

周りに誰もいなかったのが幸いだったよ。

長い黒髪をなびかせながら私を見る真姫ちゃん表情は全くかわらなかつたんだけど、心中は激変してるだろうなって簡単に想像できた。だってさっきのさっきまで普通に会話してた普通の女の子がいきなり女の自分に告白してくるんだもん。そんな状況想像したら私は興奮するけど、普通の男の子を好きになる女の子はビツクリするに決まってるよ。

その証拠に、真姫ちゃんの口から漏れた言葉は「な……本気なのですか、メグ。だって貴女……え、ええ？」ってな感じでうるたえてたもんね。それでもってそのいつもは見れない真姫ちゃんの姿を見て、可愛いなーやっぱり真姫ちゃんはーと再確認して再確認した私は、もう一度 今度は真姫ちゃんの近くに歩み寄って、真剣な表情で言ったんだ。「うん。私、女だけ女の子が好きなの。ていうかアラちゃんが好きなの」って。

でも真姫ちゃんは 笑顔のままだった。

さっきまで普通だと思ってた女の子友達が 普通じゃない女の子だと知ったのに。

だって真姫ちゃんは 『笑顔しか出来ない間違い』を持っていたから。

そのままメグちゃんは深呼吸をして、私の顔を笑顔のままみると、

こう言ってくれた。

「ごめんなさいね、メグ。私……今好きな人がいるの。だから貴女とは付き合えないわ」

「……ううん。ありがとう、アラちゃん」

返事を聞いた瞬間、私の目からは自然と涙が流れてた。これでもかっけてくらのいの大粒の涙を。

だから。

だから、私は真姫ちゃんを最初に告白したい相手に選んだんだよ。真姫ちゃんは今私をひかずに……正当な理由で断ってくれる。「好きな子がいるから」って言うってくれる。「好きな男の子がいるから」とは言わずに。

実をいうとね皆さん。クラスの女の子はたまに、真姫ちゃんのことを『いつも笑顔で怖い』って言うてるんだよ。

いつも笑顔で何考えてるかわからない。しかも同級生にも丁寧口調でそれがまた怖いって。

でも、そんな真姫ちゃんに告白する男の子は数知れないんだ。だって可愛いんだもん。「女の子の一番の化粧は笑顔だねよ、メグ」って言葉をママから聞いたことがあるんだけど、本当にその通りだと思っ。

いつもいつも。朝も昼も夜も笑ってる真姫ちゃんは、無茶苦茶可愛いんだよ。

「そうして涙ながらに真姫ちゃんと別れて家に帰った私は、真姫ちゃんの恥ずかしい姿を想像しながら、枕とシーツを濡らしましたとさ」

「……いきなり何ですか」

「あ、ゴメンなんでもないよ。ちょっとばかり思い出してた過去編が少し声に出ちゃった」

「そんな過去編が貴女にはあったのですね。正直私、ドン引きです」「またまたー。そんなこと言いながら……私にこうして電話をかけてくれるのは真姫ちゃんだけだよ。ありがとう、真姫ちゃん。告白

した後も、友達でいてくれて」

「……っ。何言ってるんですか。私は貴女の弱みを握ってるから友達でいてあげるだけです。教科書を忘れた時とか都合がいいですし」「私と友達つてところは否定しないんだね、真姫ちゃん。というか私が「お願い教科書貸してアラちゃん！」って頼んだ時、「はいはいメグ。仕方ないですね」って言いながら貸してくれたじゃん」「……と、とにかく。今話しをしても大丈夫なのですね。じゃあ話します」

私が指摘すると、直ぐさま取り繕うかのように真姫ちゃんは話しを切り出してきた。うわー、やっぱり可愛いなー真姫ちゃん。今頃電話の先では額に汗を流しながら　それでも笑顔の状態なんだろうなー。

……いや、ちょっと待って。

本当に今の真姫ちゃんつてそんな姿なの？

「それはそうと真姫ちゃん」

「まだ一秒も私のしたい話しをしていないのですが……何ですか、メグ」

「今全裸？　そうじゃなかったら、今履いてるパンツ何色？」

「……ここまで堂々とした変質者は初めてです、私」

「え、そう？　じゃあもつと堂々とするね。えっと、鈴木とは何回ネッチャリした交流をしたの？　もし一回以上してたら今すぐ鈴木を殺すからさ」

「琢磨君を殺すつて貴女……。いえ、ちょうどいいですね」

「ちょうどいい？　あ、もしかしてあまりにも鈴木がつかない態度とるから私相手がちょうどいいって意味かな！　じゃあ今すぐ深夜のベッドタイムをし」

「ちょうどいい話の切り出すタイミングという意味ですよ、メグ。というよりか、少し黙ってなさい。今からその噂の琢磨君の話しをしますから」

「……へーい」

私が残念そうな声を出すと、真姫ちゃんはもう一度ため息をついて、こう言ってきた。

「私、琢磨君の浮気らしきものを知ってしまったんです」

「え？ 鈴木が浮気？ 真姫ちゃんを？ よし、今すぐ鈴木を全身オレンジ色の刑に……」

「だから少し黙ってなさい、メグ。ていうか貴女、全身オレンジ色って一体何をやる気なんですか」

「じゃ、喋ってもいいのかな、これ。サンタを信じる子供が聞いたら十秒で大人になれる話なんだけど」

「……やっぱり少し黙ってなさい」

さつきから話しがそれすぎですね、ちゃんと喋りましようかって静かに言う真姫ちゃんに対して私が了解すると、真姫ちゃんは話しを始めた。

「今朝のことです。私が、コンビニのアルバイトに行く琢磨君に向けて「いつてらっしゃい」と言ってみ送ったんですけど、その後いつもなら私の両頬にいつてきますのキスをしてくれる筈が……今日だけ片方の頬にしかしてくれなかったんです」

「……うん？ あれ、ちょっと待って……それ想像したら真姫ちゃんと鈴木と一緒に住んでるラブラブカップルにしかないんですけど」

「ええそうですよ。悪いですか？」

「………ううん。悪くはないよ真姫ちゃん」

そんな話しはどうでもいいんですよメグって語りかける真姫ちゃんだけど、今の私には絶望とひしめく闇と、崩れていく私の心の地盤のことしか頭になかった。へ、へ……二人で住んでるんだ！。しかもキャツキャウフフなの？ キャツキャウフフな生活してるの？ 真姫ちゃんが鈴木に向かって「ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ それとも……待ちくたびれて熟し切った私にしますか？」って誘うの？ 誘いまくってネットネットしあうの？ ネットネットしたあとお互いの顔見ながら感想言い合うの？ で、明日もやろうねとか

言い合うの？

「アハハ……ハハハ……」

「ちよつとメグ。何ですいきなり笑い出して」

「いやいやー……何でもありませんよ真姫ちゃん……」

私が依然笑う声を聞きながらも「……まあいいです。話しを戻しましょう」と聞き流すことにしたらしい真姫ちゃん。ハハハ、私なんて所詮その程度の存在なのさつて天井を見上げながらうちひしがれていたなら、いきなり突然突如、こんな言葉が聞こえてきたんです。「それで、おかしいと思った私なんですけど、先刻琢磨君が家を飛び出していったのですよ。こんな時間にです。ますますおかしいと思つたので、今現在尾行してるのですが……一回立ち止まったと思つたらそこから一向に動かないのです。何がなんだかわかりませんし、一人じゃ心細いので……メグも手伝ってくれませんか？」

「……はへ？」

うん？

てことはこれあれかな……要約すると、「一緒にストーリーキングしてくれないですか？」ってことかな？

深夜に。

可愛い女の子と。

……ストーリーキングにトーキングーっ！

「行く行く、行くよ！ 場所教えて！ 今すぐ行く！」

その後真姫ちゃんに「ありがとうね、メグ」って言われながら場所を教えてもらつと、今までの私の話を立ち聞きしてたらしいママの制止を無理矢理振り切り、「ゴメンママ！ 後で説明する！」って言つて着替えて家から出た私が次に目に浮かんだのは、雄二の姿だった。

「……深夜に外出ちゃ駄目って言ってたね、そういえば」

必死に真面目に冷静に、雄二にしては真剣に 私に忠告してた。

でも……ゴメンね、雄二。

「女の子の頼みを断る訳にはいけないんだよ、私は」

それに真姫ちゃん……最後、電話先で泣いてたし。

かすれた声で、「ありがとう」って言ってたし。

そんな頼みを断ったら……あんたに申し訳がたたないでしょ。

「ごめん、雄二」

私は電灯の光りが照らす道路を走りながら、雄二に向かって謝った。

「……………」

「あら？ どうしたのですか、メグ。無言になって」

「あはは……………いやー、私つて無茶苦茶罪作りな女の子だなーっと思つてさー。雄二の言い付けは守らないわ、彼氏持ちの女の子をベッドに連れ込」

「後半部分に関しては何も気にしないでいいからそのつもりでいてくださいね、メグ」

「え、ホント！ じゃあ今すぐ近場のラブホへゴーしよっ！」

「……………片仮名が連なつててよくわかりませんでした」

「あ、そんなら言い方変えるね！ 人間という名の夜のケモノ二匹がアンアン言い合う宿泊所のお客さんになりに行こっつ！」

「もう本格的に黙つてなさい」

私の言葉に、ハア、とため息をつくアラちゃん。ところでこういう時に口から出る白い煙りみたいな息がなんか神秘的に感じるのは私だけかな？ 四月の寒い日に出る白い息……………深夜、憂い顔をした女の子の口から吐き出される白い温かい物……………あああ後半部分だけ取り出したらこれあれだよ色々と危なげだよっ！ あ、ほらまたアラちゃんが白い息を！ しかも今度は電柱の影から鈴木を見ながら……………つて。

「おいこら鈴木っ！ アラちゃんの口の中に何とんでもなく白いの入れてんのよ！」

「ちょ、え、メグ！ 貴女、本当に何を思つてその怒りに達したんですか！」

「なによ、もう！ アラちゃんもアラちゃんだよもうっ！ 鈴木の良いなりになつちゃ駄目だつて！」

「め……………メグ……………貴女もう何を……………」

青ざめた笑顔をした後、額に右手の掌をつけてため息をつきなが

ら俯くアラちゃん。その後ろで「冗談も大概にしておきなさいよ！アラちゃんはあんたの玩具じゃないのよ！」とずっと叫んでたら、アラちゃんが今まで見たこともないような赤い笑顔で「うるさいですよっ！」と大声を出して私を制しようとしてきた。

「あ、アラちゃん声大きい……」

「うるさいですって言うてるでしょうメグ！ 貴女、さつきからこんな夜中に何を言ってるんですか！」

「……………」

叫ぶアラちゃんの顔は当たり前のように笑顔だったんだけど、なんていうか……そのね、気迫というかなんというか、ともかくにもあれだよ、私に迫る勢いが今までと格段に違いました。まさかここまで怒ってるとは思わなんだよお……。そ、そういえば雄二にクミクミと昨日はこういう冗談言っても何やかんや言いつつツッコミを入れてくれるからよかつたけど、アラちゃんは常に笑顔のクールビューティーでも結局は「クール」……私の大好きな話しは基本的にご法度な子だったんだね……。

「一時間！ 一時間でいいから口を閉じるかゴールデンタイムにも流せるような話題と発言だけを繰り返していなさい！ わかりましたか！ もしわからないでわからないままラブホだとかヤルヤラナイだとか女性のアソコをなんちゃらしたいだとか言ったら承知しません！」

「アラちゃん、私最後の奴言ったことないんだけ」

「うるさいですよ！ また女性の乳房を握りたいとか言いたいのですか貴女！ それなら私にも対抗手段があります！ おーい琢磨くん！ 私、この年中絶倫娘に犯されそうに……な、何をするんですメグ！ 離しなさい！」

「あーあーあー！ アラちゃんごめん流石にそれ以上はやめて！」

アラちゃんが口を滑らそうになるのを、アラちゃんの口を両手で塞ぐっていう物理的な手段でなんとか抑えようとする私。ていうかアラちゃんの唇柔らかっ！ こ、このドタバタの中でこれ奪っちゃ

つたりしてもいいのかなこれ！　だ、だって不可抗力だし！　アラちゃんも「んー！　んー！」とか言いながらもまだ叫ぼうとしてるし！　というよりかアラちゃんの「んーんー」のせいで私の両手にさっきの白い息が……うわあああ！　かけられてる！　アラちゃんの中の白いのかけられてるよ今私っ！

そう思いながら興奮の絶頂に達してるとような顔をしてる私だけど、いくらなんでもこれ以上アラちゃんを叫ばせる訳にはいかないのではありません。だってこんな深夜にこんな騒いじゃ遠距離にいるとはいえ目で確認出来るくらいの距離にいる鈴木にこの声届いたら私貞操の危機だよ。……　っていうよりも、鈴木あんたよく気付かないよねこんなにアラちゃんが騒いでるのに……　やっぱり最悪だよあんたなんて！　アラちゃんをストーキングさせる程心配させるなんて……この浮気者！

「アラちゃん静かに！　これ以上大きな声出すと女の子をいじくりまくってる最低な男に気付かれちゃうよ！」

「誰ですかそれ！　そんな男の人知りませんよ！」

「鈴木だよ！　この場で男って言ったら鈴木しか居ないじゃん！」

「……　って、た、琢磨君？　琢磨君が……私以外の、女の、子を……」

私がそんなことを言うと、叫んでいた口を体と共にピタリと止めたアラちゃんが、膝をつきながら上目づかいで私を見上げてきた。

……可愛いつ！　笑顔でア然するっていう変な表現出来上がったやうんだけど、そんなのもうどうでもよくなっちゃうようなこのポカーンとした表情！　その口から覗くことの出来る喉チンコがまた赤いこと赤いこと！　どっかの狼なんかとはまた別物の光景だよこれ！　……　ってまたチンコって言っちゃった！　んー、まあ別にいいよね！　女の子にはないものだからさ！　あ、理由になつてない？　しかも女の子にも小さいけど付いてる？　アハハ、この変態さんったらー！

やった、やった、私が考えるにアラちゃんのこの表情は鈴木をけ

なすことで見れるらしいよだつたら私が捏造した鈴木の実を……
今こそアラちゃんの元へ！

「……そうに決まってるじゃん。こんな深夜に立ち止まるなんて、
誰かと待ち合わせしかないって」

「……っ」

「深夜だよ、深夜。そんな時間帯に待ち合わせして行く所なんて一
つしかないじゃん」

「……」

「だからさ、鈴木服の中には大量のコン……ってあれ？ アラち
ゃん？」

そう雄弁に語っていた私んだけど、ふと気付くとアラちゃんが
笑顔のまま その可愛い目尻に涙をためていた。

え？

泣ってどういうこと？

「あ、あのー……アラちゃんさん……？」

「………琢磨君が」

「へ？」

「琢磨君が、私以外の女の子を、好きになるなんて、有り得ま、せ
ん」

私はここで一時停止のコマンドを、プルプル震えながらぶつぶつ
呟くアラちゃんの前で発動させた。ヤバイかも。私、もしかして言
い過ぎた……？

そう思って発言を撤回しようとした時には、もう既に遅かったん
ですねアラちゃんは。

「あ、アラちゃ」

「だって私と琢磨君は一心同体でいつも一緒に脇目ふる暇もないく
らい愛し愛されることを誓ったのにそれなのになんで琢磨君がこん
な深夜に深夜に深夜に深夜に待ち合わせなんて有り得ないんです浮
気なんて有り得ないんです誰かとベッドなんて有り得ないんです琢
磨君の隣は私そう私しか居ないんです有り得ないんですなのにこん

な深夜に浮気そんな浮気駄目ですよ琢磨君だって貴方は私のものそれなのに浮気なんて私を放って浮気なんて浮気その先には一体なにが深夜にベッドでその後本妻にバレて末には殴りあいの取っ組み合いを泥棒猫にしてそしたらそうしたらその後何があるかっていうとそれはもうあれしか有り得ないんですよそうですねあのキッチンの引き出しにオカレテル ナイフヲカタテニ」

「怖いよアラちゃん！」

やめてよ駄目だって！いくら元がクールビューティーなアラちゃんでもこの台詞の中「フフフフ」って言いながらの笑顔はヤバイって！ 何かする気満々じゃん！ てかナイフってもう完全に殺す気にいるじゃん鈴木を！

こんな感じで（自分から招いた）危機を察知した私は、「落ち着いてよアラちゃん！」って言いながらアラちゃんの体にしがみついた。あー柔らかいなー小さいなー抱き枕にしたいなーなんてことを言うのはいくら私でもやめておくことにするね。で、自然と、さっきまでついていた膝を起き上がらせようとする動きを止めるアラちゃん。「何ですか」とぐるりと頭を回転させて私の方を向きながらドス黒い声で私に言う。思わず「ひい」って声を漏らしちゃった私だけど、今はそれどころじゃないのは私の目から判断しても明らかだった。

「アラちゃん！ 私が悪かったよごめん！」

「何ですかうるさいですね私は今から ナイフヲカタテニ」

「だから怖いってアラちゃん！ 大丈夫！ 鈴木は浮気なんかしてないよっ！」

「ナイフヲカタテニタクマクンヲヤツザキニ……って、今なんていいました、メグ？」

ナイフヲカタテニ、の先が気になりすぎてアラちゃんの暗い笑顔を直視出来なかった私だったけど、覚悟を決めてアラちゃんの笑顔を真っ直ぐ見る。

「だから！ 鈴木は浮気なんてしてないよっ！」

「何を根拠にそう言えるんですか？」

「アラちゃんは根拠がないと鈴木を信じられないの？」

「……は？」

瞬間、暗い笑顔を、何メグ言ってるんですか意味がわかりませんとでもいいいたげな笑顔に変えたアラちゃんは、「どういう意味ですか？」って言って私の言葉を待った。よっしゃ、食いついたねアラちゃん。

こういう時はさ。……やっぱり、もっともらしいこと言ってはぐらかすのが一番だよなっ！

「アラちゃんはその程度しか琢磨君を愛してないの？男は狼なんだよ。浮気なんて、一つや二つ、みんなするもんなのさ。大事なのはその後 ばれた後、浮気をされた女の子がどう対処するかってことなんじゃないかな。私は少なくとも、そう思うよ」

「メグ……」

私がこう言うと、アラちゃんは私を涙目で見つめてきた。当然笑顔なんだけど、この涙は一体全体アラちゃんのどんな気持ちを表しているんだろう。悲しみ？ 怒り？ 感動？ 絶望？ 女の子が好きな私がアラちゃんの涙の真意を理解出来ないのはしゃくだけど、意味不明なものは不明だったから、勝手に予測してみることにしよう。

鈴木への怒り 私の説得 説得からの涙 その涙の意味と
は！

私が思うに、アラちゃんは私を誘ってるんだよ！

だってだってよく考えてみて下さいよ全国の女子高生の皆さん。私が鈴木なんて最悪って言った後説得したら涙流したんだよアラちゃん。じゃああれしかないじゃん。

私弱ってますから今すぐ手取り足取り乱雑に扱って下さいアピールじゃんこれ！

そうとわかつたら即行動それが私！ 悪即斬でおしおきだべーの精神で私はドロソジヨ様並の工口さで近付くんだよそれが私！

「アラちゃん！」

「メグ……私……」

ふおおおお！ か、か弱い声で私の名前を呼んできたよアラちゃんが……あのクールビューティーアラちゃんが！ って身を悶えさせようとした私の耳に、なんか変な固有名詞が入ってきた。

「私……琢磨君のこと、信じることにします」

「……え」

そう言うアラちゃん的笑顔は 涙の後に赤くなりつつ それでいて弱々しくも何かを決断したようなそんな晴れ晴れとした笑顔でした。

「メグの言うとおりですね。琢磨君が浮気しても、それを許すか許さないかが女の分かれ道。許さなかったらそこで琢磨君とは別れることになります。ですが、許したら 一回の間違いを許せば、琢磨君は私とずっと一緒にいてくれるですよ。……メグ」

「え、は、はい」

「私、感動です。貴女が私にこんなことを言ってくれると思います。私、怒ったり怒鳴ったりしてすみません」

言いながら立って、謝罪のお辞儀をするアラちゃん。斜め四十五度の角度のお辞儀を六秒間きっちりすると、私に向けて「さあ、メグ。申し訳ないですけど、もう少し付き合ってください。琢磨君の本意を確かめましょう」って言って、電柱に隠れながら、腕時計を確認してそわそわする鈴木をじっと眺め始めた。

……ええー、アラちゃん私と一緒にストロベリータイムしたかったんじゃないんだー。あーあ、残念だねこりゃ。どうやらアラちゃんにとって、私なんか二の次で大事なのは鈴木みたい。鈴木からアラちゃんを奪うのは……厳しいかー。ハア。なんだよ、もー。私が悪いのか、私が……ってそうじゃん今の一連の流れって私が悪いんじゃない。

今更ながらそれに気付いた私がアラちゃんに「ううん。私が悪かったよアラちゃん。頑張って鈴木を監視しよう」って言ったら、ア

ラちゃん「監視じゃないです。ウォッチングです」って断言してきた。何で英語なんだろ。四十代にして芸歴が少なかったおばさんグーグー芸人？ それともブレイク過ぎたにも関わらず唐突にまたブレイクし始めたやぶからステイック芸人？ ……どっちにしたってアラちゃんのイメージとは合わないにも程があるな。うーむ、ここはいっちょう、こんな話題を出してみよう。

「ところでアラちゃんや」

「なんですかその口調は。お菓子でもくれるんですか、メグ。だったら私、五円チョコがいいです」

「……安上がりだね、アラちゃん」

「何をいいますか。五円チョコ程素晴らしいお菓子はないのですよ。五円で五円の形をしたチョコを買うという発想の斬新さ。加えて、一円でもなく十円でもなく百円でもない 五円というこのチョコの原型。ご縁……ご援助……ご円満…… ああ素晴らしいですね、五円というのは。なので、五円チョコは素晴らしいお菓子なのですよ、メグ」

「うーん、じゃあメグちゃんの場合は五円チョコかな」

「はい？ どういう意味ですか、それは」

興味津々な疑問文で聞いてくるアラちゃんだったが、視線はいつまでもこれまでもこれからも鈴木を一直線に貫いていた。全く、あんな男のどこがいいんだろね。なんかわからないけど黒と白の正装着てるし、その割りには髪ボサボサだし。深夜なのに目は鋭くて何かをキョロキョロ探してるような感じだし。あんな意味不明要素満載の輩のどこがいいんだろ、アラちゃん。

まあそんな愚痴はとりあえずちよいのちよいでどこかに置いて、アラちゃんの興味をひいた話題を展開させようとする私。

「いやさ、話しの流れは関係ないんだけど……無人島に何か一つ持つてくとしたら何がいいかな、アラちゃん」

「……よくある質問ですね、それ。私、その手の質問されたら何を言うのか決めてあるんですよ」

「へー。何々？」

奇しくもアラちゃんにとってのお決まりを質問出来たみたいだね。あ、因みにこの質問、昨日の雄二のパフォーマンスの準備中にクミクミにも聞いた質問なんだよ。クミクミの場合は、『お母さん』だったんだよねー。泣かせてくれるよねー、クミクミ。私がそう言いながら抱き着こうとしてしんみりした空気が台なしになったのは言うまでもない衆知の事実だけだね。うん。

私がクミクミの健気さを思い出しながら遠い夜空を見上げていると、アラちゃんが「わかりました。その質問に答えましょう」「って意気込んだ。すかさず「うん。何なの、アラちゃん？」って返事をする私。危ない危ない。つついクミクミに気をとられてアラちゃんをおごそかにするところだった。もう、駄目だなー皆私を取り合いつこして。そんなに私に構って欲しいのはわかるけど、それは今晚のお、た、の、し、みっ。

「じゃあ言いますよ、メグ」

「あ、うんうん」

「私は無人島に……ドラえもんを持って行きます」

「……え？」

何て言ったのアラちゃん？

まさか……ドラえもんって言ったの？

「な、何アラちゃん。ドラえもん持って行きたいの？」

「ええそつです。やはりドラえもんってすごいですよ。あれ一体でなんでも出来ますから」

「ドラえもんを『あれ』呼ばわりする女子高生を初めて私は見たよ……」

「なんです？ あの青いの、単なる部品の集合体ですよね？」

「言い方の問題だよそれ」

ま……まさかまさかアラちゃんの口からドラえもんなんて飛び出してくるとは思わなかったよ私。つまんな……いなんてことはないよ！ 面白いよ、アラちゃん！ あは、あはは……ドラえもんって

どうなんだろうね。ははは……。

「因みにですけど、メグは無人島に何を持って行くんですか？」

「あ、私？ うん。当然女の子。無人島だったら好き放題出来るし」

「……貴女、命よりも一時の快樂の方が重要なのですか」

「あつたりまえじゃん！ 私の命なんて女の子のヤバ気な表情に比べたら一寸の虫並になっちゃうよ！」

「……一応、五分の魂はあるんですね。それ聞けただけでも少しは安心出来まし……っ！」

私が質問の答えを言うつとドン引きしたアラちゃんだったんだけど、突然、その声が中断された。

アラちゃんが驚いた先 視線の先を見ると、そこには何故だから知らないけど正装のまま臨戦体勢に入った鈴木の様があった。格闘技なんかでよくみる、両腕を構えるあの体勢。あれは……ボクシングかな。顔をガードするように、鈴木の両拳が握られている。

鈴木が目が向く先は、私達から見て右。嫌なことに 電柱に隠れてよく見えない方だった。鈴木がさつきと別格の真剣な眼差しで見ると、何が居るのかよくわからない。鈴木に姿を見られないように、アラちゃんにメールでこの電柱までの行き先を指示されたのがあだになった。

わからないんだよ。

鈴木が……何と対峙しているのか。

「……くっ！ またですか！」

すると、こう言つて構えた拳をピタリと止めながら体を少し動かす鈴木。その動きに「ああ！ 琢磨君！」って言いながら電柱から離れて鈴木に近付こうとするアラちゃんを、私が両腕でしっかりと抱き寄せた。

「何するんですか、メグ！」

「駄目だよアラちゃん！ なんか……嫌な予感がする！」

アラちゃんに言いながら私は気付いた。

深夜。

鈴木が待っていたのは、アラちゃんの浮気相手じゃないのはほぼ間違いない。

だったら 誰なのか。

こんな深夜に、鈴木が待っていたその人物は、誰なのか。

その答えは……目の前にあった。

「……何あれ」

いつの間にか鈴木が、構えた右拳を前に突き出したそこに居たのは。

黒いフードを被り、黒い布で全身をおおいつくした、全身黒尽くめの小柄な人間。

鈴木が放った速い右ストレートを、私達から見て右から現れたらしいその黒い人は、軽やかに左 私達から見て手前に避ける。鈴木が、その黒い人によって被さり、少ししか見えなくなった。

すぐに、私は思い出す。鈴木が時間の余裕を与えないかのように繰り返された腹周りへの蹴りをこれまた避ける黒い人の姿を見て、私は思い出す。

クミクミにお金を渡し、私をいじめるように指示した黒フー
ドの女。

そいつが今。

クミクミを利用しようとした女が今。

私の 目の前にいた。

黒尽くめの女は鈴木を避けるように通ると、そのままの勢いで去ろうとする。すかさず鈴木が体を静かに右へと半回転させると、もう一度構えて拳を黒尽くめの女に突き出そうとした。

「……………」
対して黒尽くめの女がとつたのは マントのような黒い布から何かを下からふりぬく動作だった。さっきまで黒い布で隠れていた右腕が、一瞬姿を現す。

「く……………」
鈴木が呻き声をもらすのも無理はないよね。

細い右腕の先には 一振りのサバイバルナイフが握られていた。薄く 白く 短く 丹念に磨かれているのか 十字交差点の中心に集まった街灯の光りが、遠目から見ても光る切っ先。そこには、鈴木が握られた拳を牽制した 流血の跡が流れていた。一度膝元までナイフを下ろす黒尽くめの女。白の先端に枝分かれする赤を付けたナイフを 躊躇せずにもう一度 今度は鈴木の腹に刺そうとする。その一連の動作に、私みたいな素人から見ても異常って言うていいくらい迷いはなかった。

「鈴木……………」
堪らず電柱の陰から飛び出そうとする私。ヤバイよ。え、嘘でしょこんなの？ だってこのままだと、本気で鈴木が刺されちゃうじやん！

「駄目です、メグ！」
ただここで、私の動きを止めたのは……………今の今まで私が抱いて動きを抑えていたアラちゃんだった。自分の体より大きい私の体を止める為、腹周りの少し上に頭を押さえつけて、両手をふとももの上部分に両手をまわすアラちゃん。

「何で止めるのアラちゃん！ このままだと鈴木がつ！」

「抑えて下さい、メグ！ 貴女が行つても何の助けにもなりません！ それに、琢磨君なら大丈夫です！」

言いながら力を加えるアラちゃんだったけど、その力が意外と強くて驚いた。痛い、痛いよアラちゃん。そんなにきつくされたら動こうにも動けないって。

アラちゃんの説得でなんとか我を取り戻した私が次に見たのはわざと後ろにさがって距離をとり、空振りされたナイフの横を握り拳で一閃する鈴木のだった。思いつ切り横から力を加えられたナイフは、黒尽くめの女の右手から離れて、私達の位置からじゃ見えない 私達から見て左に向かって 街灯が届かない暗闇へと消えていく。

「……チェッ」

しかしここで手から離れさせられたナイフを取りに行こうとし

鈴木に背を向けようとはしなかった黒尽くめの女。そいつは周りを数秒見渡すと、大声がしたと思われる方向
つまり。

私とアラちゃんが隠れる電柱へと目をやり、直ぐさま目標を私達に向けて走って来た。

「え」

「何です？」

「な……くっ！ 何でメグさんがここにっ！」

三者三様の言葉を出す私達。焦った鈴木が黒尽くめの女を止めようと走り出すけど、もう黒尽くめの女は 電柱のすぐ側まで来ていた。若干鈴木の方が速いらしく、徐々に黒尽くめの女に近づく鈴木だったけど、遅かった。

「へー。メグじゃないの。あんた、ウチの前によく顔だせたわね」

至近距離まで近付こうとする黒尽くめの女の顔が影になって隠れるフードの下から こんな言葉が聞こえてきたけど、なんのことだかわからない私は、恐怖でそのまま直立不動で立ち尽くす。「危ないです、メグ！」っていうアラちゃんの声が聞こえた時には私の

前にアラちゃんが立っていて　それはまるで私を庇うようだったけど　一番印象に残ったのは、背中姿だけだったけど　鈴木と同じような構えをしたことだった。

何でアラちゃんがそんな構えをするの。いや、そんなことより早く逃げないと。あ、駄目、逃げるんじゃなくてアラちゃんを助けなきゃ。でも、駄目、無理、だって、体が、怖くて動かない　あんなに簡単にナイフを振り回して、鈴木に突き刺そうとするなんて無理、私じゃ無理、怖い、恐い、こわいこわいこわいこわい嫌だ嫌だ嫌だ嫌だやめて私に近付かないで

誰か、助けて……。

誰でもいいから……なんて、言わない。

私を助けていいのは、いつだってあいつだけなんだ　！

恐れて震える私の体。額から汗が流れたって感じたのは多分気のせいじゃないと思う。

怖い。

怖いのよ、私。

だから、助けてよ……。

私を前みたいに助けなさいよ……。

魔物倒すくらいなら　こんな黒い女なんかから私を助け出すなんて簡単でしょ　！

「助けて、雄二！」

私が叫んでも、黒尽くめの女はナイフを振りかざしながらアラちゃんへと近付く。「邪魔よ、あんた」と言いながら、その振りかざしたナイフを勢いよくアラちゃんに向けて上から突き刺そうとする。アラちゃんは何も言わずに対応しようとしたみただったけど、私が後ろにいるせいでその場を避けて対処することが出来なかった。鈴木も、間に合わない。走ってくる姿は見えるけど、間に合わない。

駄目……このままじゃ私達……死んじゃうよ……！

「すまん、メグ！　助けに入るの遅れた！」

でもこの時 後ろから声が聞こえた。私がいつでも頼れる、私の救世主みたいな奴の声。その声は深夜の交差点に響いて、黒尽くめの女も含めた私達全員の意識を独り占めした。

声を出した後、そのまま黒尽くめの女の腕を左横から握って止める雄二。私の目の前には 両腕を構えた状態のアラちゃんと

右手で右腕の動きを止められた黒尽くめの女と 黒尽くめの女を止めた雄二の姿があった。思わず、ペタリとその場に座りこむ私。

「何でメグがここに……って、おい！ お前、泣いてんのか！」

「う、うるさい！ さつさとそんな奴やつつけちゃってよ！ 雄二なら……っ……そ、それくらい、朝飯前でしょ！」

「俺は普通の高校生なんだが……メグにそう言われちゃ、黙ってる訳にはいかないよな……！」

言つと右手を黒尽くめの女の腕から離し、そのまま浮いた右腕を無視して右ストレートを黒尽くめの女に加えようとする雄二。だけど、黒尽くめの女は鈴木と比べたら明らかに速度が劣る右ストレートを後ろに下がって簡単に避ける。

「だから……」

「……これが狙いです」

その避けた場所には。

ようやく近づき 両腕を構えた鈴木が居た。

「……………」

この状況で焦りをみせたのか、黒尽くめの女はよろめきながらも放たれた鈴木 of 右ストレートを膝をつくことかわす。そして左に転がり、すぐに立ち上がると 雄二に視線を一回やって、背中を見せながら逃げ出した。

「待ちなさい！」

「いや……追い掛けなくていいよ、琢磨」

「でも……」

「……大丈夫。俺が、なんとかする。とりあえず、今はメグと荒垣

を助けただけでもよしとしよう」

「……はい。わかりました」

そう言うと、鈴木は「……すみません。役に立てませんでした」
って言うアラちゃんの憔悴しきった肩に、「大丈夫です。真姫はよ
くやりましたよ」って励ましながら右手を置く。そして泣きながら、
笑顔で鈴木へ体全体で抱き着こうとするアラちゃん。そのほほえま
しい光景を見て、私は鈴木に殺意を抱きつつもほのぼのとした気持
ちになれた。ふう、と一息つくくと、雄二が私に向けて「ほらよ」っ
て言いながら右手を差し出す。「ありがと」って返事をした私は、
続けてよいしょと言って自分の手で立ち上がった。「……ハハハ。
うん……こういうこともあるよな」って呟いて私に差し出した右手
を額に当てて夜空を見上げる。ゴメンね、雄二。今私、震えてるか
ら。あんまりあんたに心配かけたくない……からさ……。それにし
ても悲しそうな顔だなー雄二。そんなに私と手を繋げなかつたのが
残念だったのかな。それともあれかな？ アラちゃんと鈴木絡み
を羨ましく思っちゃったとか？

「……アハハッ」

「ん？ どうしたメグ。いきなり笑ったりしてよ」

「ありがと、雄二。私を助けてくれて。ゴメンね、雄二。深夜に外
出ちゃ駄目って言われてたのに、こんなことになっちゃって……」

「……メグが」

「へ？ 何？」

「メグが俺に御礼を言うなんて……奇跡だろこれ！」

「な、何よ！ 悪い？ 私があんたに感謝したら悪いの！」

私が本音をうっかり漏らしちゃうと、いつもなら何があるかと絶
対に言わない言葉の連なりを聞いた雄二は、本気で驚いたように目
を見張った。な、何さ！ 私があんたに感謝しないことなんて、あ
る訳ないじゃん！

「だってお前……さっきまで俺、お前の半裸姿見たんだぞ？ それ
なのにこんなこと言ってくるなんて……何だこれ！ 何があったメ

グ！ しっかりしろっ！」

「元から私はしっかりしてるっての！」

「じゃ、じゃあこの質問に答えて見る！ ある日、川に溺れている子供をみかけました！ 片方は小学生の女の子！ 片方は二十歳を越えた妙齢の女性！ もしどちらかしか助けられないとすると、メグはどちらを助ける！」

「勿論妙齢の女性の方！ 私が一人しか助けられないなら妙齢の女性に小学生の女の子を助けてもらえばいいんだし！ で、これで二対一のハーレム完成！ 人工呼吸万歳！ マウストウマウス最高っ！ 既成事実の上で妙齢の女性の敏感な口の中を舐めたくったり、小学生の女の子の小さい口の中を丁寧に舐めて感覚を敏感にさせてあげたりする！」

「間違いなくお前はメグだ！」

通り魔に襲われた私達だったけど、そんなことはとうの昔のことのようにギャーギャーと喚く私と雄二。その姿を、二人して寄り添いながら温かく見てくるアラちゃんと鈴木。「勝手にメグを連れてきてすいません琢磨君」……「いいですよそんなの。真姫の気持ちはよくわかりますから」って言い合う二人。

そんな光景の中、私は心のどこかで安堵していた。

確かにさっきまでは怖かった。訳のわからない黒尽くめの女に、恐怖を感じたりもした。

でも……何でだろう。

雄二が私の前に現れてくれた時にはもう……体の震えが弱まっていたんだ。

鈴木じゃ多分役不足だと思う。当然って言ったら当然だけど、アラちゃんの私を守ろうとする姿でもこんな気持ちは抱かなかった。

全部が全部、雄二のおかげ

「……ん？」

こんなことを思っていると、ふいに私はおかしなことに気がついた。

鈴木が何で正装を着た上で、あんなにスマートな右ストレートを突き出せるのか。

そもそも何で鈴木があの場合にいたのか。

アラちゃんが……『役に立てなかった』っていうことはどういうことなのか。

そして。

雄二とアラちゃんと鈴木は、一体どんな関係なのか。

「雄二」

「……ど、どうしたんだメグ？ そんな怖い顔して」

「しらばつくないでよ。アラちゃんも鈴木も 私に隠してることがあるんでしょ？ 早く喋ってよ」

私がそう言うと三人はギクリと体を一時停止させたけど、その後、三人が三人 ちらりと視線を合わせるのを私は見てしまった。

「やっぱりじゃん」

「や、やっぱりってなんのことですか、メグ？」

「アラちゃん。本当は鈴木が浮気してないってわかってたんじゃないの？」

ギクリと。アラちゃんは笑顔のまま凍りつく。

「い、いやいや、メグさん。僕が真姫に心配をかけてしまったんです。本当にご迷惑をかけてしまい、申し訳ありません」

「何言ってるのよ鈴木。あんた、アラちゃんが何でこんな深夜にこんな場所に居るかも聞かずに「大丈夫」とか言ってたじゃん。あんたもしかして……最初からアラちゃんと私がここに隠れてたのわかってたんじゃないの？」

ギクリ。鈴木も無表情のまま凍りついた。

「メ」

「雄二。あんた、今日の夜は危ないだとかいってたよね。もしかしてあんた……私に何も言わないままあの通り魔を捕まえようとしてたんじゃないの？」

俺は一言しか言えないのかよって叫んだ後、凍りつく雄二。

あーあ。

これで、はつきりした。

この三人には……私の知らない『何か』がある。それがどんなものか。最初はわからなかったけど、この一連の反応を見る限り、大体想像が付き始めた。

いやいや待てよメグすいません落ち着いて下さいメグお願いですから落ち着いて下さいメグさんって依然として隠そうとする三人に私が「さあ、早く言っつて。もう隠しきれないよ。全部言わないと、ここから動かないから」って言い張ると、やがて諦めたように三人とも「ハア」とため息をついて、そして目配せをし……三人の真ん中にいる、雄二が「今まで隠しててすまねえ、メグ」って言っつて話を切り出した。

「琢磨と真姫は俺のボディガードだ。深夜。俺達は……協力して俺のストーリーカーを捕まえようと思っつてたんだよ」

「…………え？」

「ちょ、ちよつと待って。冷静になろう、私。頑張って今の雄二の告白を解析しなきゃ。」

「えっと…………昔っから雄二の近くにボディーガードさん達が二人居るのは知ってた。雄二が人質にならないよう、雄二のパパが気をつかうのは無理のない話だし、ご近所さんで仲のよかった私と私のパパママもその話は聞いたことがあったのよ。だから私は 雄二の『間違い』がわかる前から、雄二のボディーガードの存在は知っていたんだね。」

「でも…………その二人がどんな人なのかは知らなかったんだよ。わざわざそんな人達の素性を知る必要はないんだし、ボディーガードって言うから無茶苦茶体格のいい見るだけで恐れおののく人だと思っただけで、私。だってだって、ボディーガードなんて洋画でしか見たことないもん。そんな人達を積極的に調べようとする幼なじみは居ないって。」

「私が困惑した表情をしていると、「メグがそう思うのも無理はありません」ってアラちゃんが笑顔で言ってきた。」

「私が、雄二君のお父様に雇われたボディーガードだなんて…………気付く方がおかしいですから」

「で、でも何でアラちゃんと鈴木が！ 二人共、高校生じゃん！」

「高校生だからですよ…………メグ」

「私が問い詰めても それでも、アラちゃんは笑顔を崩さなかった。」

「雄二君を四六時中守る為には学校の中でも気を付けなければなりません。しかも、私と琢磨君にはボディーガードに適任な『間違い』があっただんです」

「ボディーガードに適任な…………って…………？」

「私の間違いは言うまでもなく、『笑顔しかできない』ことです。この間違いのおかげで、私はもし誰かに掴まったとしても、表情には出さずに嘘を突き通すことが出来ます」

アラちゃんがそこまで言うのと、「そして、僕の『間違い』」ってアラちゃんの話しを断ち切って鈴木が口を開く。

「僕の間違いは、『一日に三時間しか寝れない間違い』なんです。だから僕は雄二君を四六時中……とまではいきませんが、少なくとも二十一時間は一日に雄二君を守れます。だから、僕と真姫は雄二君のボディーガードに雇われたんです」

それから鈴木は、昔話しをし出した。雄二と鈴木とアラちゃんが……どんないきさつで出会って、どんな物語があって、今のようない関係になったのか。物凄く感動出来る話しだったんだけど、いけ好かないあん畜生の鈴木のおかげでこの話を聞くのはいささかしゃくだったから、自分の中で要約してまとめることにしちゃった。悪いのは話しながらもアラちゃんの手を握った鈴木だよ。恨むなら大量の怨恨を込めて鈴木に呪いをかけてね。私も手伝うから。

その昔。私が砂場で雄二へボディーブローを仕返した日。雄二の『間違い』を知った雄二のパパは、今までは定石通り屈強なボディーガードを雇って雄二を守ってたんだけど、『躊躇が出来ない間違い』と『銃を上手く扱える間違い』を持つ雄二に、私以外の友達ができるか不安になった流れで、こんなことを言い始めたんだってさ。「今すぐ養護施設に入れられた捨て子の中で、ボディーガードになれそうなの『間違い』」を持った雄二と同じ歳の子供を一人……いや、二人連れてきてくれ。今から三年間で、雄二のボディーガードがつとまるよう私が世話をする」

改めて考えたらなんて過保護で優しい雄二のパパだって思うんだけど、それは今、三人の関係がちゃんと成り立っているからなんだ

よね。当時、雄二のママも雄二も反対したらしいんだー。「何言ってるんですかあなた！ ボディーガードを雄二と同一年にするなんて！」っな感じで。まあ当たり前だよ、これも。まさか雄二のママもボディーガードを雄二につけるのはまだしも、ボディーガードを雄二の友達にしようって雄二のパパが言うなんて、信じられないと思うもん。

でも雄二のパパは本気の本気で、それから二日後にボディーガード候補となる二人の子供を目の前に召集させたらしいの。

それが 荒垣真姫ちゃんと、鈴木琢磨っていう二人の子供達。

『笑顔しか出来ない間違い』と『一日に三時間しか寝られない間違い』を持った ボディーガード候補達。

無口なままだったけど、手を繋ぎながら、片方は笑顔で 片方は純粋な眼差しで雄二のパパを見る二人を見た雄二のパパは、「採用だ。この二人に雄二のボディーガードをしてもらおう」って言うのと、その翌日から訓練を開始させたんだってさ。自意識が覚醒して間もない頃だよ。まあでも、二人は嫌々言いながらも、それでも自分達を養ってくれる雄二のパパに感謝する為、必死になって頑張ってたんだってさ。

「私達は……雄二君のお父様には感謝しようにもしきれない程の恩があるんです」

「雄二君のお父様に拾われる前、僕達二人は養護施設の中で散々な待遇を受けていました。ご飯がないのは当たり前。掃除洗濯家事手伝い……何かから何まで、僕と真姫がこなしていたんです。あの養護施設の子供の中から僕達を選んでくれたのも、そういう環境から僕達を助け出してくれる為だった。……そんな風に、僕と真姫は思っています」

それから一年。すっかり丁寧語が身についた二人は、ようやくボディーガードの基礎とはなんぞやっていう教養を叩きこまれたんだって。で、ここで初めての雄二ご体面。どんな感じになるかわからなかった雄二のママは雄二に、「雄二の友達になってくれる

つて。仲良くしてね、雄二」とか言つて説得しようとしたみたい。

「荒垣真姫です。これからよろしく願います、雄二様」

「鈴木琢磨です。これからよろしく願います、雄二様」

まるで機械のようにそっくりそのままトレースした動きをしてみせた二人を見て、ぶすつとした表情をしたチビ雄二は（まあ今でもチビだけど）、二人に向けてこんな言葉を浴びせたみたい。

「何が友達だよ。僕は友達に『何々様』なんて言われたくない。それに君達……付き合つてるでしょ」

「「えっ！ な、何でそれを！」」

「……………」

流石『躊躇出来ない間違い』を持った雄二というべきだよ、ホント。そう。この頃から二人は付き合つてたらしいんだよ。疲れる日々をお互い励ましながら過ごしてる内に……いつのまにか付き合うことになつちやつてたんだね。

……糞がつ。地平線の果てまで飛んで燃え尽きる鈴木。

「何でつてだつて君達僕の訓練場でキスしあつてたじゃん」ってしやあしやあといいのける雄二を、「や、やめて！ それ以上言わないで下さい！」って注意するアラちゃん。笑顔のまま真っ赤だったんだつてさーへーふーん。

「な、なんでもいうこと聞きますから！ だから言わないで下さい雄二様！」

「僕からも願います！ こんな、恥ずかし過ぎます！」

二人してこう言つたのを見た雄二は、「はあ」って生意気にもため息をつきつつ、こんなことを二人に言つたらしいんだ。

「じゃあさ、僕のことを『様』付けて呼ばないで。あと、僕を守る対象じゃなくて本当の友達として見てくれると嬉しいな」

「え……は、はい！」

「えつと……ゆ、雄二さ、雄二……君」

「うん。そんな感じ。あ、あと一つ」

「「何でしょうか、雄二君」」

「今のは命令じゃなくて、お願いだからね」
そう言つと、雄二は二人にそれぞれ右手と左手を差し出したらしいのよ。うわー、なんか言い台詞言ってるっばいねーカッコイイヨ
ー雄二はいはい。
きよとんとした二人だったんだけど、雄二の本心を理解した二人は
雄二の友達になるべく、握手したんだって。

「それからが大変でした。まず、当面の目標として……メグ。貴女に私と琢磨君の存在をばらさないようにするのが課題となつたんです」

鈴木がここまで言い終わると、アラちゃんは待つてましたと言わんばかりに会話に参加してきた。小さい頃のアラちゃんかー。さぞ可愛かつたんだらうなー。まだクールビューティーじゃなかつた頃のアラちゃん……んんんヨダレガデマス。

私が実際によだれをだそうとするのを必死に食い止めているのを無視して、アラちゃんは話しを続けた。

でも、ここでアラちゃんが言ったのは、信じたくない一言だったんだ。

「だから私がまず貴女と友達になり、雄二君の近くに居ても怪しまれないようにしたんです」

「……へ？」

平坦な口調の言葉が、私の耳を無下に通過する。

「じゃあアラちゃんは……私と嫌々、友達になつたってこと？」

雄二のボディガードの為。

しいては私をついでに『守る』為。

仕方なく 私と友達になつたってことなの？

じゃあ……今までのあの楽しい会話はなんだったの？ 私の告白は？ 今日だって鈴木 of 浮気調査と一緒に……。

あ。
そう、か。

今日のこの時間も、仕組みられた時間なんだったんだ。

目の前が真っ暗になる私。アラちゃんの笑顔。怒ってる時も常に笑顔なアラちゃんを可愛いつて思ってた私だったけど……今の私の目に、アラちゃんの笑顔は偽物にしか見えなかった。

偽物。

偽物の、友達。

それが アラちゃん。

「う……うとう、ヒグツ」

気付くと私は泣いていた。目から涙が流れてる。雄二が慌てて「な、メグ！」って近寄ってくれたけど、私は差し出された手を振り払った。

「アラちゃんは……私の友達じゃないの？ 私、本気でアラちゃんのこと好きだったんだよ？ 私の『間違い』を知った後も、私と友達でいてくれる女の子なんて、ヒグツ、アラちゃんしかいなかったから！」

「……だから電話先で言ったでしょう、メグ。「ごめんなさい」って」

「……えっ」

アラちゃんが笑顔で言ったその言葉は。

「泣きながら、ごめんなさいって言ったでしょう、私」

私の疑問に対する肯定の言葉だった。

「前々から言いたくて言いたくて堪らなかつたんです。だけど正体をバラス訳にはいかなかったのですが……雄二君のストーカーが大事になってしまいました。それだったらついでに言ってもいいですよねって二人に頼み込んだんです」

笑顔でそう言うアラちゃん。

私は、アラちゃん的笑顔が完全に信じられなくなっていた。嗚咽をもらしながら、「グスっ……そんな……アラちゃん……」と言う私。

信じたくなかった。受け入れたくなかった。

だけど、アラちゃんの口からそう言われてしまった。

再びへたりこむ私に、アラちゃんが「メグ」って呼びかけながら私のすぐ側に座ってくる。

「嫌っ！ そんな気休めいらないっ！ アラちゃんだけは……アラちゃんだけは私の女の子友達だっと思ってたのになっ！」

「……はい？ 貴女、一体何を言っているのですか？」

私の渾身の叫びを聞くと、アラちゃんは笑顔のまま首を傾げて疑問を表現してきた。そしてそのまま、柔らかい右手で私の髪を「よしよし」って言いながら撫でてくる。輝かしい、笑顔のままです。

……あれ？

「私……何か勘違いしてる？」

「ええ、そりやもう。重要なことを勘違いしてますよ、メグ」

アラちゃんは、私の目尻に溜まった涙を左手の指で拭き取ってくれた。くすぐつたい。

「私が謝りたいのは、貴女と仕方なしに友達になったことなんていう有り得ないことはありません。私が謝りたいのは、今まで雄二君のボディガードだということを貴女に黙っていたことです」

「……」

「私にはこんなにも嫌な『間違い』がありました。このせいで、全く友達が出来ずに敵ばかりつくっていた私の前で、唯一笑顔で私と接してくれたのは……メグ。貴女だけなんです」

「アラ、ちゃん……」

「だから私は言いたかった。貴女に私が雄二君のボディガードだっけって言うべきだった。その上で、私は貴女と友達で居たかったんです」

「アラちゃん……アラちゃんっ！」

思わず座りながら抱きしめた私だったけど、アラちゃんも私を笑顔で抱きしめ返してくれる。

「言わせて下さい、メグ。ずっと笑顔でこんなにもカタイ私でよければ……これからも友達でいてくれますか？」

「うん……うんっ！ 友達というかもう親友になろうっ！ で、飛び越してガールフレンドになろうよ、アラちゃん！」

「貴女が言くと生々しいのは……気のせいですね。きっと」

深夜の暗い空の下。

電柱の傍で抱き合っただけ泣き合う私達。

その近くには、「よかつたですね、真姫……メグさん……」っていやらしい顔で拍手する悪漢の鈴木と、「あれ？ 俺って結局空気がね？」って違う意味で涙ぐむ雄二の姿があった。

ねえアラちゃん。

さつきさ、魔物倒したりラッキーパンチにでくわしたりちよつといい台詞はただだけで女の子に好かれるハーレム小説は嫌いだって言ってたよね。

私も、そんな小説大っ嫌いだよ。

だってそれが成り立つんだったら ストーカーを撃退してくれて私を助けてくれた、良いことたまに言うエロい雄二がモテちゃうじゃん。

そんなのは……嫌だよ。

雄二が颯爽と現れてくれた時……私の命を助けてくれた、小学三年生の時と今日。

ズルイよね。

普段は馬鹿でエロくて狼でへたれで泣き虫で……良い所なんて全くないのに、こういう時はカッコイイんだもんさ。

「ねえ、雄二」

「ん？ どうした、メグ」

「大好き」

こんなちよつとした会話をすればいいのに……そうしたら、雄二

との関係も変わるのに。

「ねえ、雄二」

「ん？ どうした、メグ」

「だ……」

「だ？」

「……大好物は女の子です」

「今すぐ真姫から離れるや！」

あーもうなんなんだよもう！ って荒れる雄二を見ながら、私はため息をついた。そんな私を抱いたまま、私の耳にポツリと「押し倒しなさい、メグ。私はそうして琢磨君を手に入れました」って入れ知恵してくるアラちゃん。

これから先、色々なことがあると思う。楽しいことだったり、嫌なことだったり。

あんな大声出してたら簡単に隠れてるってばれますよねっていう鈴木のスバリな指摘に笑ったり。

アラちゃんと「また明日ね！」って言って手を振りながら別れた。その時、横に寄り添う鈴木を地獄におとす算段考えたり。

「じゃ、じゃあね、雄二」

「おう。また明日、学校でな。あ、そういえばメグ。明日数学のテストあるってわかってるか？」

「え、嘘ホント！ うわー……ヤバイかも。何にもやってないや」

「そう言うと思ってな……」

「ま、まさか雄二、ポイントだけ抑えた特別ノート作ってくれたとか！ やったー助かるありがとー！」

「俺もお前と同じ様に、何も手をつけてないぜ！ これでもしメグが酷い点を取っても全く気にすることはないっ！」

「……馬鹿」

「おいおい二文字のみの罵倒は破壊力が半端じゃないぞ、メグ！」
「ふん。本当に……馬鹿なんだから……」

雄二とこんな風楽しく会話して家に入って。

ママの「メグちゃん。あなた、こんな時間に何してたの。それにあなた、電話で何て言ったの？ 相手女の子だったわよね。告白ってどういうこと？ さー……詳しく聞かせてもらいましょうか」
っていう問い掛けにどう答えようか迷ったり。

朝になって。

休日あけの学校に辿り着いた時。

私と雄二が……あんな目に会うなんて。

この日この時間には、思いもしない。

楽しい時は、楽しいことだけ考えていたいもんね。

でも……私は明日。

受け入れ難い一つの事実を知ってしまうことになっちゃみたい。

「うー……何、あーちゃんこんな時間に」

「ゴメンね。ちよつとあなたに伝えたいことがあってさ」

「伝えたいって……今朝の五時半だよ？ もう少し遅くに電話してきてよー」

「ごめんごめん。で、ものは相談んだけどさ 今日、いつもより早く学校に行く気ない？」

「んー？ 何時くらいー？」

「えつと、七時二十分なんてどう？」

「いやいやあーちゃん疑問形に疑問形で返されても困るよー。うーん……眠いー」

「……早く来てくれたらあなたの欲しいもの一つあげるわ」

「そこで物で釣っちゃうのはどうなのあーちゃん！ うー、えつと……じゃ、じゃあね、私……彼氏が欲し」

「ごめんそれ無理」

「即決！ 即決で拒否なのあーちゃん！」

「いやー……だってあなたじゃ無理でしょ」

「酷いっ！」

「あ、違う違う。勘違いしないで。ただ単純に、あなたのテンションについていける奴はいないって話だから」

「それはそれでキツイものがあるんだけどあーちゃん！ え、え、私のテンション駄目なの！ あーちゃんみたいにクールぶってるおかしなテンションなんかより断然いいじゃん！」

「……あなた、今日の朝覚えておきなさいよ」

「低いっ！ あーちゃんの声があーちゃんテンションに比例して低いよっ！」

「なっ、あなた……もういいわ。これ以上言っても多分あなたの私への評価変わらないし」

「な、あーちゃん凄い！ エスパーなのあーちゃん！」

「……本心だつてことが言いたいよね。本気の本気で今日の朝の時覚えてなさいよ」

「え、あーちゃん一体私に何する気……つてもしかして！ 上履きに画鋏とか入れるの！」

「そんな一昔前の少女漫画みたいな復讐はしないわよ。別に。ちよつと上履きを学校のどこかに隠すだけ」

「それも一昔前だと思っただけど……ほ、ホントにあーちゃんそんなことするの？」

「……何言つてんのよあんだ。いくら私が年中彼氏とイチヤラブだからつてする訳ないでしょ」

「あれなんかちよつと自慢が入ってるよあーちゃんそれ！ 畜生……彼氏つてなんなんだよ……彼氏いるやつ全員消え去れ……」

「またキャラ変わってるわねあんだ……。あ。そうそう、彼氏云々の話しになるんだけ」

「一秒でも彼氏の話したら今すぐあーちゃんの家を焼くからね」
「放火魔になるくらいの覚悟があるのねあんだ……。いいわよ、出来るものならやってみなさい」

「ファイヤーブリザードっ！」

「……」

「……今の叫び何なの！ どうしたのいきなり！」

「私の魔法だよっ！ どうあーちゃん？ あーちゃんの家焼けた？」

「そんなもんで焼けたら放火事件全部が迷宮入りになるっての！
そもそもあんだ、呪文にブリザードって入ってるじゃないの！ フ
アイヤーにブリザードって結局何したいの！」

「人は家を燃やされた後、凍るのさ……ああ何で家が無いんだつてね。凍り付くんだよ、ローン返済も終わってなかったのに……」

「何ニヒル気取つてんのよあんだ！」

「うるさいあーちゃん！ チチンパイパイチチンチンパイパイ」

！」

「……途中で女子が言ったらヤバイ四字があつたのはウチの気のせいよね！ まさかよね！ 言う訳ないわよねそんなこと！」

「チンチラチンチソチソチンチクワっ！」

「ってフェイントじゃないの！」

「流石あーちゃんだね……ここでまたさっきの長つたらしい台詞を言っていたらあーちゃんの家に放火する所だったよ……ファイヤーブリザ」

「また同じ会話繰り返しちゃうからそれ言ったら！ 往年の板東工イジかあんたは！」

「……で、あーちゃん。何で学校早く行った方がいいの？」

「ここでスルースキルを使うのね……。ハハハ、泣けてくるわホント」

「泣いちまいなあ！ 私はそれを……あーちゃんの心の叫びを私の寛大な心で抱きしめてやるよお！」

「あんたのどこに寛大な心があるのよ！」

「失敬なあーちゃんだね！ 全く、教育が成つとらんよ教育がー！」

「ほら無いじゃないの寛大な心！ あんたの心が寛大なら私の心は地球の大きさにも匹敵するから！」

「……はいはい。あーちゃん気は済んだかな？ 早く本題に行かない？ 私、喋り疲れちゃったよ」

「……あああ今すぐ電話越しのあんたの家を燃やしたいわ。ファイヤーブリザードっ！」

「痛っ。あーちゃん痛っ。女の子同士の会話でファイヤーなんちゃらって……アイタタタだよあーちゃん」

「……この苛立ちをウチは一体どこにぶつければいいんだらうね」「闇討ちとかどう？」

「は？ 闇討ち？」

「うんうん。最近見たドラマでね、『必殺闇討ち人』っていうタイトルのもステリーがあるんだけどね」

「そのタイトルでミステリーなの？ いろいろとキツくないそれ」

「まあまあーちゃん慌てない慌てない一殴り一休みー」

「一休さんも大泣きするフリーズね」

「うん。でね、主人公が野球好きのサッカーオカマって設定で、ヒロインが犯人って設定なの」

「……あれ？ なんかこの数秒で指摘しなきゃならないところが数多くあるのは私の気のせい？」

「気のせいじゃないかなー。でねでね、私も友情出演してるんだけどね」

「あんたドラマに出演してるの！ しかも友情出演！ 普通に凄くないのそれ！」

「まあねー。私の美貌と性格と素質と根性と存在があれば簡単に出れる話なんだけどさー……ってあーちゃんゴメン！ 違うの、別にあーちゃんに美貌と性格と素質と根性と存在が無いって言ってる訳じゃないんだよ！ 違うの！ 悪いのは全部私！ この世の全てを兼ね備えた私が悪いの！ だからあーちゃんは全く悪くないの！」

「……………」

「あ、あーちゃん……さん？ あの、無言は怖いっていつか、その……………七時二十分に学校に来なさいね。てか来い。来なかつたら全校生徒にあんたのヌード写真ばらまくから」

「あ、待ってあーちゃん！ まだ私が演じる美人秘書力オリさんの素晴らしさを語ってな……………」

「……………」

「……………」

「……………はあ。あいつも大概にして欲しいわ。鬱陶しいったらありやしない。……………まあ、とりあえずあいつを朝早く来させることは成功する筈だから……………あとはウチの準備だけね。フワア……………。ていうか眠いわ。いくら雄二君の跡を付け回すっていったって深夜越してまでやるんじゃないわね。途中でウザイ死ぬ死ぬ糞メグにも会っちゃったし。声低くしてたからばれてはいないと思うんだけど……………」

ばれてたら怖いわね。まあそんなことは有り得ないか。だって馬鹿のメグだし。ていうか何であいつ学校に来てんの。ていうか何であいつ生きてんの。死ねばいいじゃんホント雄二君の幼なじみとか死ねばいいじゃん。雄二君の全てが欲しいのよ、ウチは。そのために……今日。メグに全てをばらして、あいつをバラしてやる。まずは……早く学校に行きましょつか」

翌日の朝。……あああ私を知る限り最悪の目覚めを体験しちゃったよー。途中まで最高だったの。全裸のクミクミが『だからよ……その……早く裸になれつての』って言いながら私に迫ってきてね、私の服を脱がそうとしてくるのよ……ビリビリに無理矢理引き裂いて。キャーこれヤバイヤバイ！って興奮した私の前に続いて現れたのがこれまた全裸のアラちゃんだったんだよね、これがさ。『メグ……私、貴女のおんな所を……いじめてあげます』って言うたらちゃん笑顔をのまま私を押し倒してきてね、どさくさに紛れて私が胸を揉んであげると喘ぎ声を出してね、もうね、フィバー寸前だったんだよ、いやこれ本当。

なのになのに、ここで何故だか起きちゃう私。目覚めの大声は「なんじゃこりゃー！」でしたね。だってしょうがないじゃん皆さん。よく考えてみてよ、折角の夢中乱交が台なしになっちゃったんだよ？一日に一度しかない贅沢な時間を途中で切られるってこと程残念なことはないんだって。何でよ……何で目覚ましも鳴ってないのに私起きちゃうてるのさー。原因は何さ原因は。そう思いながらも重い瞼をこすってデジタル目覚まし時計を見てみると、そこには六時三十分って表示されていた訳なんですよねこれが。早っ。いつもは七時五十分起きてる私がまさかの六時三十分起き……信じられないよ、流石に。昨日の深夜（今日の早朝っていった方がいいのかどうかわかんないんだけど、ミッドナイトってなんかいかかわしい雰囲気するからわざと深夜って表すね）に色々あって疲れてるっていうのに。……って、あ。今日数学のテストじゃん。あーあ、ヤバイねこれは。白紙で提出も有り得るかも。真っ白になっちゃっねーホント。真っ白のドクドクしてぐちゃぐちゃした紙になっちゃっよー。……いやいや、何でもありませんよ皆さん。紳士の皆さんはスルーを決め込め、淑女の皆さんは今私が思った言葉の羅列をそ

のまま繰り返してくれると嬉しいなー、うん。

こんな感じの心情変化を抱くこの間わずか五秒。やっぱりあれだね、好きなことを考えてると時間ってのは早く感じるものなんだよ。…ん？ あれ？ 今の私の場合逆かな… よくわかんないや、ホントに。こちらへんの事情は後でアラちゃんに聞くとしよー。話しを切り出す最初の言葉は「アラちゃんってエロいこと考えてる時、時間の流れが変わるって思ったことない？」だね。まーアラちゃんのことだし「うるさいですよ、メグ」とか言われて一蹴されちゃいそうだけど。うん。その時にはその時で違う話題に展開しよーっと。

「メグちゃん！ ピンポンピンポンメグちゃんーん！ 居るなら返事しろー！」

私アラちゃんにどんな話題をふるうか考えていたところに、突然、家の二階にも響くような大声が聞こえた。

直ぐさま、私は私なんでこんなに早くに起きたのかを理解したんですよ皆さん。

私は…彼女が来るって感覚が体を襲ったから夢中乱交の快樂の中起き上がったんだ…！

この声は…麗しのお姫様、クミクミに違いないんだよ！
「わーいクミクミが家に押しかけてきたよ何これどういう展開かはわからないけどとりあえず最高の朝がやって来たっ！」

やったやったクミクミが私の家に来た！ 何これ！ サンタさんの季節にはまだ早いのにこんな可愛いプレゼントが私の元に届けられちゃったよ！ 因みに私は昔、外国のサンタさんは夏にやってくるって話を聞いた時、無理矢理サンタさんをグラマーなそれでいて小さいパーフェクトな女性にみたてることにしたんだよ！ で、サンタさんが水着姿で家に来て「ハイイガル？ アナターハ、ナニガホシーノアーハー？」って私に聞いた瞬間にサンタさんを縄で縛って羽交い締めにした後、「私、サンタさんの初めてが欲しいです！」って断言するんだよ、私！ それ聞いた瞬間ピンク色に頬を染めた金髪ロングのサンタさんが俯きながらも「アーハー…シヨ

ウガナイデスーネ」って言いながら私を見て……キヤアアアア！
ああもう最っ高！ サンタさん最高！

「メグちゃん！ ピンポンピンポンメグちゃん！ 居ねーなら居ねーで居ねーって言えばよー！」

私がこうやって一人で部屋の中で悶えていると、クミクミの大声がまたまた聞こえてきた。おおっと、こりゃいけないね、私。サンタさんも可愛いけど今は目の前のお姫様に集中して可愛がってあげないと。平等社会。私はその実現を目指してるだけなんだよ、うん。水着のサンタさんでもお姫様でもナーズさんでも着物姿の艶やかさんでもレースクイーンでも女子高生でも……全員を平等に寵愛するのがこの私。

勿論それは、チャイムを鳴らさずにわざわざ自分の口でピンポン言ってくるクミクミでも同じ話なのですよ。

パジャマ姿のまま部屋を開けて階段を駆け降りて、「なんなのこんな時間から」って眠たそうな顔で玄関に居たママに「私の友達。大丈夫、心配しないで」って言う私。「心配とかじゃなくて……まあいいわ。とりあえず早く出なさい」っていうママに向かつて頷くと、玄関にある運動靴を履いてドアを開ける。

「……キヤーーー！」

「……うおおお！」

そこには、パジャマの前が完全に開いた状態の私を見て驚くクミクミと　クミクミのスカート姿を見て興奮する私の姿があった。ていうか細い生足が完全に見えるミニスカだよクミクミ！　ふともも……ふともも柔らかそう！

「すいませんクミクミ今すぐふとももなめていいですか！」

「いや駄目だろ！　そんなことよりお前……パジャマの前閉める！　大体なんでブラしてねーんだよ！」

「いやいやあんな窮屈な布はめてらんないですし。あ、じゃあ今からパジャマの前閉めるんでしたらクミクミのふとももなめてもいいですか！」

「どんな交換条件だよそれは！ 成立ってねーにも程があるだろ！」
「もう、このいじわるおてんばお姫様ったらー！ しょうがないです
ね…… 全身なめつくしてあげるんで許してください！」

「難易度が上がった！」

あーもう違うって僕！ こんな朝っぱらにこんな話しわざわざし
に来たんじゃないだろ僕は！ ってな感じでわーわー騒ぎ立てるク
ミクミ。いやー可愛いなあクミクミー。前見た時はなんだかヤンキ
ーっ娘丸出してみたいな恰好だったのに、今日のクミクミはなんだか
可愛い系の服着てるんだよねー、これがさ。黒のミニスカートは勿
論、ピンクのワンピースとかもう最高だよね。最上にして最強だよ
ね、この組み合わせは。あー、可愛いなーホント。

「平日の朝にこんな眼福なお届け物が届くなんて……」

「うつとりした顔しながら呟かかねーでくれよメグちゃん……」

言いながら啞然とするクミクミがまたそそられるものがあつたん
だけで流石にそれは口にしなかった私。うん、偉い。ここで私の思
ったこと全てさらけ出したら話し進まないの目に見えてたからね。

大人しくクミクミの話しを聞くことにしましょー。てな訳で私が「
それで、どうしたんですかクミクミ？こんな朝早くに家に来るなん
て」って話を催促すると、「おう。ちよつとメグちゃんに伝えた
いことがあつてな」って言うクミクミ。何何何何伝えたいことって
思い付くのが告白しかないんだけど私。

「なんとというか……とりあえずすまねえ。こんな朝早くに来ちゃっ
てよ」

「あ、そんなことはどうでもいいんで、早く告白して下さいよクミ
クミ」

「告白ってお前……。ちげーよ。何で僕がメグちゃんに告白しなき
ゃならねーんだよ」

「え、違うんですか？ じゃあぶぶ漬け食べてください」

「……帰れってことか！ 告白しなきゃ帰れってことか！ どん
だけヒデー扱いなんだよ僕は！」

「……あ！　もしかしてあの……セレブなフレンド略してセフ」
「おいおいおいおいそれ略し切るとヤベーことになるからやめとけ
メグちゃん！」

だからだからもうなんで話しがこつも進まないんだよ！　おかし
いだろこれ！　って頭を押さえながら騒ぐクミクミを見て微笑む私
ここで冷静に考えてみてくださいよ全国の可愛い女子な皆さん。
私はパジャマの前が閉じてない状態で、そんなグラマーなナイス美
人を前に悶えてるヤンキーっ娘……さつきから何人かいる通りすが
りの人達はこの光景見て何を思ってるんだろ。まあ当然、考えるこ
と悩むこともなしに普通にクミクミが私を襲おうか襲わないか迷っ
てる光景に行き着くよね！　というより何でクミクミは私を襲わな
いんだよっ！　ほら、無防備じゃん！　悲鳴どころか喘ぎ声も出さ
ないから早く襲ってよクミクミ！

「さもないと私がクミクミを襲いますよ！　てか決めたもう襲う！」
「なっ、こら、やめ……な、ふとももを撫でる……なあ！」
「グフフ……ほらほらねーちゃんもっとなげや……」

……はいこれからの五分間を緒事情で省略！。この間に一体全体
何が起こったのかは各人の想像と妄想の発達具合によって変わるか
らそのつもりでね。

そんなかんやなんやかんやで私とクミクミがハアハア言い合っ
ていると、「と、とにかく僕に話しをさせる！」っていきり立って無
理矢理私の手を退けてきた。なんだよもうクミクミったらー、もう
少し時間くれたら別世界に連れて行ってあげるのにー。

まあでも私にもクミクミにも今日は学校がある訳です。とつと
とクミクミは話して学校に向かわなきゃいけないのもまた事実なん
だよな、悲しいことにさ。もっともつと絡み合っていたかったのを
我慢に我慢して、「……はい。何ですかクミクミ」って話しに応じ
る私。

「おう。あのな、そんなたいした用じゃないんだけどよ……迷惑か
けた二人にはどうしても言わなきゃならねえと思ってよ」

「あれ？ ってことはクミクミ、雄二の所にも行ったんですか？」
「おう。でもよお、何だかしらねーけど雄二君の奴もう学校に行っ
ちまってたらしくてよ。居なかつたんだ」

「え？」

雄二がもう学校に行ってる？ まだこんな時間なのに？

何があつたんだろねこりやと思いながらもとりあえずクミクミを
優先した私は、「じゃあまた後で雄二の家に訪ねて下さい。あいつ、
たいていは家で銃撃ってるんで」って伝えると、「おう、わかつた。
じゃあ今のところはメグちゃんだけに言わせてもらうぜ」って返し
てくれたクミクミ。私だけに言う……うん。なんかいい響き。

そんな風にちょっとだけうつとりしていると、クミクミがとてつ
もないくらい嬉しくなることを言うてくれた。

「じ、実はよ……母ちゃんの『間違い』が……一個無くなつたんだ」
「ほ、本当ですかそれ！」

言いながら私はクミクミのはにかみ笑顔を見て思い出す。
クミクミのママの間違いは確か……『お金のつくり方を間違える』
ことと『料理のつくり方を間違える』こと。それで、今までは散々
な職業に就いていたクミクミのママだつたんだけど、土曜日に宝く
じを当てて億万長者になつたんだつたよね、うん。
その二つの内、どっちかの『間違い』が遂になくなつたらしいん
だ。

「ど、どっちの間違いがなくなつたんですか！」

「ふっふっふ……驚くなかれメグちゃん。なんとなんと母ちゃんは
昔……『お金のつくり方を間違える』間違いを無くす方を選んでた
んだよ！ てことはつまりだ！ 母ちゃんの病気が治ったら普通の
職業に就いて働けるんだよ！」

「や、やつたねクミクミ！ 万々歳じゃないですか！」

「そうだよな！ そう……なんだよ……万々歳なんだ……。でもよ、
メグちゃん。考えてもみるよ。もし、だ。もう少し早くに母ちゃん
の間違いが無くなつてたら、母ちゃんの病気を治すお金もなかつた

ってことだし、なによりも……雄二君にもっと迷惑をかけてたつて
ことにならねえか？」

「……………」
クミクミの言葉を聞いて、思わず無言になる私。言われてみれば
確かにその通りだよ。少しでもタイミングが早かったら　クミ
クミのママの病気を治すお金もなかった訳だし　雄二のお金を使
わなきゃいけなくなってたんだ。

この奇跡みたいなタイミング……一体何を表してるんだろう。

「……………思っただけだよ。これって、神様って奴が僕達の為に譲歩し
てくれたんじゃないかな」

「神様……ですか」

「おうよ。この街じゃ皆間違えるじゃねーか。でも間違いは直さな
きゃならねえ。間違いをそのままにするなんてのは馬鹿みたいなこ
とだしよ。だけど……この街の皆の間違いは絶対に無くならない『
間違い』だらけなんだよな。だったら……その間違いに向き合わな
きゃならねえ。それでも……雄二君みたいに上手く向き合える奴も
いれば……一生悩む人もいるじゃねーか。なら……少しくらいはそ
の様子を眺めてる神様からの報酬みたいなもんがあってもいいだろ
」

「報酬……………」

「そう、報酬だけ報酬。普通の間違いなら直そうと思えば直せる間
違いだらけなんだからよ……直せない間違いを僕達が強制的に持た
されてるなら……少しの褒美くらいあってもいいんじゃないか？だ
から母ちゃんの『間違い』は上手い具合に僕達を助けたんじゃない……
……って何だかからに合わねーこと言っちゃまったな。すまねえ。今
の、無かったことにしてくれ」

「……………はい」

私はそう言ってたけど、今の言葉を忘れられるとは到底思わなか
ったんだよ。

クミクミの言う通り……この街の『間違い』は正そうにも正せな
い。だったら、正面からぶつかってくしかないんだよね。

だってクミクミのママの間違いも……一つは消えたとしても、片方の間違いは残ったまんまなんだから。

これから先、クミクミのママは料理を絶対につくれない。

クミクミに自分の料理を食べさせてあげようと思っても、絶対に無理なんだ。

だったらさ。

そんな不幸がクミクミのママに襲いかかるならさ。

少しくらい……何かいいことあったっていいじゃん。

「じゃ、僕はこの辺で。朝早くにすまねえな。またメールするからよ、次の土曜日からカラオケにでも行こーぜ」って言うと、クミクミは私に手を振りながら、笑顔で走って去って行った。私はそのクミクミの後ろ姿に手を振って見送ると、なんだかよくわからない気持ちになった。……安心感かな、これ。それとも満足感？ 本当になにがなんだかわからないんだけど、そのなになんだかわからないの気持ちのおかげで……私は眠気がすっかり無くなって、物凄く嬉しくなった。自然と笑顔になる私。

間違いに立ち向かう人には、何か嬉しいことが待ってるってことだよな、これ。

私にも……何か嬉しいことが待ってるのかな。

そうだと、嬉しいなあ。

「……よし。今日は早めに学校に行こう」と

雄二も既に学校に向かっているみたいだし、今日くらい無茶苦茶早く学校に着いたって何も悪いことはないよね、絶対。早起きは三文の得とかよく言うじゃん。実際にクミクミに朝早くに会えた訳だし。それにしても笑顔のクミクミ可愛いかったな。カラオケか……クミクミが歌った後のマイクをなめさせてもらおうと。

「さてさて。ママに頼んで朝ご飯を早めに食べさせてもらおうとしますかね」

私が家に入り、「今日の朝ごはん何ー？」ってママに聞くと、「ぐすっ……今日の朝ごはんはパンだけだね……昼ごはんはお赤飯に

しましうか」「って何故だか涙ぐみながらキッチンで料理をつくるママ。

……間違いなく玄関で立ち聞きしてたね、こりゃ。

まあでも悪い気はしなかった私は、「早めに作ってよママ。あと

……料理毎日つくってくれてありがと」「って言ってママの昼ご飯の準備が出来るのを待ちました。

結局朝家を出たのは七時ジャスト。学校に着くまでにかかる時間はバスも含めて二十分だから……七時二十分になっちゃうね。

ま、いつか。

パンを頬張りながら制服に着替えるっていう偉業を達成した私は、「行つてきます！」って叫んで学校へと向かった。

信号で停まったバスの窓の外に金髪ツインテールのいかにもお嬢様って感じの女の子が居たから、バスに揺られぶらり途中下車ならぬ揺らり途中下車をしようとした私だったんだけど、どうやらその女の子が待ち合わせをしていたらしくて横から見た目大学生の優男が現れました。……ってあれなんだか絵面ヤバくない？小学生女子の横に大学生男子が並ぶ姿ってあんたちよつと……ヤバくない？だから私が途中下車して「これこれその女の子。そんなやばげな男にひよひよいついていつて人生駄目にするくらいなら私みたいな純情可憐な女子高生に人生駄目にされたくない？」って勧誘しようとしてもう一度降りるボタンを押そうとしたら、女の子の発言に無茶苦茶盛大にリアクションする大学生の姿がありました。……うーむ、この二人の関係性が見えないね。台風の中、女の子を大学生が救出したとかそんな関係なのかな。そうでもしないと小学生と大学生が平日のこんな朝っぱらから隣同士で並んで歩くななんて有り得ないし……。うん、とりあえずあの金髪ツインテール女の子の五年後と十年後を想像しながら時間を潰すことにしよう。

とまあそんな感じでガラガラなバスの二人乗りの横椅子に座ってポケーっとしてた私だったんだけど、最終的に二十歳になった熟したての金髪ツインテール美女が私に向かって『……ある意味成人式よね、これって』とか言いながら一枚一枚服を脱ぎ始めた段階で学校のすぐ側に着いたバスから降りることに。いやはやいやはや、まさか二十歳になっても胸の大きさが変わらないとは思わなんだよ、うんうん。まあ私の想像下の世界の中だし、美乳だったから言うことないんだけどアツハツハ。

「……妄想し過ぎて数学のテスト勉強するの忘れてるじゃん私」
こんなことを呟きながらも全く後悔してない……寧ろ満足しきってる自分に微妙に歎きながらも「なんのお！一片の悔い無し！」

って叫んで右拳を掲げる私。あ、安心して。石にはなつてないから。まあ石並の堅さにはなつてる部分が二カ所程あるんだけど……追求しない方向でいこうね、これ。

「……………」

コンクリートで出来た壁の間に鉄製の横開き門……何だかなあのコラボとも思いつながら校門を通り、馬鹿でかいグラウンドを横目にしながら歩く。今日も昨日一昨日と同じ様に晴れやかな晴天。太陽も女の子のブラジャーを透かす為に頑張ってるな。このいけ好かない太陽めっ！ 全校生徒の女子の服を私の為に暑さから流れ出る汗で服を透かしまくれこのヤロー！

「あーあ、早く夏にならないかな……。……そういえばあの年齢詐称した長髪アイドル何処に消えちゃったんだろ。何気に私ファンだったのにー」

ぐだぐだ呟いても校舎に先生以外誰もいない学校から返事が来る訳ないので、私はすたこらさつさと歩いて四階建ての校舎に入りまして、靴を脱ぎ下駄箱から濁った赤色のスリッパを取り出しそれを履き、二階にある我が二年三組に向かおうと階段を上がりました。チツ。女子高生が上がり途中の階段なんて疲れしか生み出さないってのー。何なのよこれー。三文の得って嘘じゃんこれー。

「ハア。やっぱり遅く来た方がよかったかも……………」

悲しみて俯きながらようやく踊り場に着いて、もう一度階段を上がり切り、渡り廊下走りたい。なんて思わずに普通に歩いて教室に向かう私。階段から左に向かつて一組。二組と並んだ次にあるのが三組なんですな、これが。いつも来る時間帯なら女の子達がキヤッキヤッキヤしてるのに……今の時間帯見事にだーれもないんですよ、すごいことに。この学校には朝早くから来て勉強しようとか思う人は居ないのかいな。ん？ そういう私はどうなんだって？ んー……保険体育なら二十四時間勉強出来るんだけど、やっていい？ まず最初に美術の科目を音楽選択した女の子のロッカーを探つてアルトリコーダーの口の前についてる部分の成文検査を私

の舌で……ってこりや化学とか生物の分野だね。全く私としたことがってな感じだよ。

「どうしようやるうかなでもでもやっぱり流石にやったら駄目でしょでもなー……よし、やるう」

そう決めるまで十秒かからないのが流石私といった所。ともかくにも教材が入ったこの肩掛けバッグを私の席の近くに置いてから実行しよう……と思った私が教室に入ると。

そこには、信じられない光景が広がっていた。

「グスツ……ヒグツ……消えないです……なんなんですかこれ……」

そこには。

全身が白く染まっっていて 涙ながらに黒板に広がっている白い文字を黒板消しで消そうとする アラちゃんの後ろ姿があった。

「アラちゃん……アラちゃん！ どうしたの、これ！」

「ヒグツ、め、メグですか……駄目、見ちゃ駄目です……」

私の存在に気付いて後ろを振り返るアラちゃん。サラサラな長髪も白く染まっっていると思ったら……振り返って見える笑顔も白かった。

まるで 黒板消しの粉を上から被ったような そんな姿。

私が「アラちゃん泣かないで！ とにかくこの粉を落とさないと！」って言いながらバッグをその場に放って教壇に近づくと、アラちゃんが「見ちゃ駄目ですメグ……消えないんです……読まないで……」と呟いた。

読まないで ってどういう意味？

「……へ？」

そこで、私は気付いてしまったんですよ、みなさん。アラちゃんの側に近寄る途中 周り椅子やら机やらがほぼ規則正しくならぶ教室の真ん中で

私は、黒板全体に広がる文字の意味を読みとってしまった。

『芽救は女の子が好きらしいです！ あー気持ち悪い！』

「何……これ……」

私が『女の子を好きな間違い』持つてるってことを……悪意剥き出しにして横書きで書いてある……。アラちゃんはこれを消そうとして……。

「アラちゃん……どういふことなの、これ！ 何でこんな……」

「……わかりません。ヒグツ、雄二君が朝早くに学校に向かった私がこの教室に着いたら書かれてたんです……教室のドアを開けた瞬間に上から粉が降ってきて……グスツ……」

「と、とにかくアラちゃん洗わないと……」

目の前に広がる文字を可能な限り無視してなんとかアラちゃんにこういふ私。駄目、気にしたら駄目。思い浮かぶから……私のトラウマが……今までの……私の告白を聞いて青ざめる女の子皆の顔が一斉に頭に……っ！

涙を流して黒板消しを手に持ちながらその場にへたりこむアラちゃんの肩を支える私。白い粉が手に付く……と思ったんだけど、白い粉は全く 私の手に広がらなかった。

「何この白いの……」

「消えないんです、メグ。グスツ……一度ついたら引っ付いて消えないんです、その粉は……だから……黒板に広がるこの文字も……消えないんですっ！ 水で流そうにも雑巾で拭き取るうにも黒板消しで消そうにも……でも、でも！ 消さなきゃ駄目でしょう……」

の！……こんなの……こんなのっ！」

私の両手に体重を預けながらも叫ぶアラちゃん。そうなんだ……だからアラちゃんは無駄だと思ってもずっと黒板消しでこの文字を消そうとしてくれてたんだ……。

もし。

もし、だよ。

この文字が消えずに私の『間違い』が全校生徒にばれたりでもしたら……。

私はきつと、居場所を失う。

「めぐちゃん、絶対にこの間違いをばらしたら駄目よ！もしばれたらりでもしたら……貴女は学校に居られなくなるから！」自然とママの必死の形相が思い浮かぶ。わかってる。わかってるよ。だから私は尊敬する先輩の姿を見て思い立った後でも……信用出来そうな先生とか、この子なら絶対に私の『間違い』をばらさないって確信出来る良い子にしか告白しなかったんだ。

だから、今まで私の『間違い』は一部の女の子と雄二にしかわからなかった。

でも……もし。

もし、私の『間違い』がばれたら……。

女の子も男の子も……私に近寄らなくなる……。

『芽救は女の子が好きらしいです！ あー気持ち悪い！』

もう一度、黒板に書かれた文字を見る私。

気持ち悪いって何よ。

いいじゃん、女の子が好きでも。迷惑かける訳でもないんだし。

なのに……気持ち悪いって何よ。

「気持ち悪いって……何よ……」

重い苦しみが私の胸を襲った。ズシリと、この重みが無くなる気配がうまれない。気付かない内に私は涙を流していた。初めて女の子を好きになった時見たママの表情。アラちゃんの後には告白した女の子の啞然とした表情。今まで親友だと思ってた女の子が、自分を好意の対象に見ていたと知った時のあの表情。荻原さんの、あの表情。

「なによ……いいじゃん女の子が好きでも……」

「……いいんです。メグがいいなら、それでいいんです」

アラちゃんが自分の涙を白い指で拭き取った後、私を抱きしめてくる。

「ヒグツ……ウワアアアーン！」

私は、泣いていた。教壇の側。アラちゃんに……昔告白した、一度好きになった相手に。私は泣いていた。気持ち悪いって書かれた黒板の下、女の子に抱かれながら。

「……屋上に、居ます」

私が泣いていると、アラちゃんが私を抱きしめながらこう呟いた。「……屋上？」と私が涙ながらに聞くと、「はい」って答えるアラちゃん。

「多分……屋上に、居ます。教壇に、このメモ用紙が置かれていました」

誰が居るのって聞こうとした私の視線の下に、アラちゃんが胸ポケットの中から取り出したメモに書かれる文字が見えた。

『琢磨。真姫。黒板の文字をなんとかして消してくれ。俺は屋上で、あいつをなんとかする』

「これは……」

文字を見た瞬間に、私の心に少しの安堵が漂った。

そこに書かれていたのは 私が何年間も見てきた ミミズがはったような汚い字

紛れも無い 雄二の文字。

「雄二君の字に間違いありません。メグ……行って下さい」

「でも……アラ、ちゃんが……」

「このメモ用紙を見つけてから二十分以上経過している筈です。なのに……雄二君は屋上からこの教室に戻ってきません」

「……でも……でも」

アラちゃんは私を抱きしめて、顔を合わせずに耳に言ってくる。

「私のことは心配いりません。黒板の字も私がなんとかして消してみせます。だから……貴女は雄二君を助けて下さい」

私は雄二君に頼まれた仕事がありますし、何より私じゃ役不足で

すから。

そう小さく続けたアラちゃんの顔には、笑顔が広がっていた。

白くて……目の辺りだけ赤くなっている、笑顔。

「行ってください、メグ」

「うう……アラちゃん……ごめんね……ごめんね……」

ごめんね……アラちゃん。本当に、ごめん。泣きたいのはアラちゃんも同じ筈なのに……消えそうもない粉の始末なんか頼んだりして……。

「何を謝ることがあるんです、メグ。何も心配することはありませんよ。私は雄二君のボディガードなんです。雄二君の命令ならば、それが私の意志に反することでも、絶対に従わなければなりませんから」

「……………」

私は無言で、アラちゃんに抱き着く。アラちゃんは、無言で私の背中をポンポンと後押ししてくれた。

アラちゃんの視線を感じながら、私は早足で教室を出る。廊下を走り、上の階へと続く階段の前に着く。目指すは屋上。その為にも早く階段を昇らないと　早く　早くっ！

二段飛ばしで駆け上がり、三階にあがる。

ここまででは、何の問題も何の奇遇も何もなかったのよ。

でも　四階に上がる途中の踊り場に。

「……………」

「……………」

私の姿を確認した途端に目を逸らす　荻原さんの姿が、何故かあった。

「……荻原、さん？」

「……何、メグちゃん」

何でこんな朝早くの時間に 四階へと続く踊り場に 荻原さんがいるのかわからなかったんだけど、とりあえず話しかけたら、荻原さんは私と目を合わさずに応じてくれた。その姿を見て、胸がキリキリと痛みつけられるのを感じる私。

やっぱり……私って気持ち悪いのかなあ……？

女の子が女の子を好きになるって、本当に『間違い』なのかなあ……？

そう思いながら視界が滲み始めたんだけど、今は早く雄二がいるらしい屋上に行かなきゃ駄目だよな。わかってる。わかってる……うん。だから私は右手で無理矢理拭き取って、荻原さんに「ごめん、荻原さん。そこ通してくれない？」って聞いた。荻原さんを素通りにすることも可能だったけど、荻原さんの私への反応が知りたかった。金曜日の告白以来喋ってないからさ、荻原さんと。私が気持ち悪いのかもしいけれど……やっぱり、荻原さんともう一度喋りたいし。「め、メグちゃんも……屋上に行くの？」

すると荻原さんはこんなことを言ってきた。

メグちゃんも……ってことは、荻原さんも？

「そうだけど……荻原さんも屋上に？」

「う、うん。……あーちゃんに、行けって言われたの。行かないと上履き隠されちゃう……から……」

「え？ 上履きって……スリッパのことなら、今履いてるじゃん、荻原さん」

「え、あ……そうだった」

そう言って「ハハ……」って私に苦笑いしてくる荻原さん。そしてその直後に俯くと、そのまま階段を昇り始めた。その姿を見て、

「ちょ、ちょっと待って！ 屋上は駄目！」って荻原さんの肩を掴んで止めようとすする私。

屋上には多分……雄二がいる。

二十分、姿を見せない危ない状態の雄二が。

そんな危険な場所に荻原さんを行かせない為にとつた行動だったんだけど、荻原さんは「キヤア！」って悲鳴をあげて勢いよく私の手を払いのけてきた。

「あ……」

「ご、ごめんメグちゃん。ごめん、なさい……」

階段の上の段から私を見下ろしながらお辞儀をして謝る荻原さん。その言葉には、恐怖しか残っていなかった。女の子が好きな女の子に触られるっていう 恐怖しか。

「……あーちゃんに行けって言われてるから」

そう言うつと踵を翻して階段を二段飛ばしで上へと向かう荻原さん。私が慌てて「駄目！ 屋上は危ないから！」って忠告を大声でしたんだけど、多分荻原さんは……私の方が危ないって感じたんじゃないかな。……ネガティブだね、今の私。駄目なのよ、ホント。荻原さんの姿を見る度に、さっきの 黒板の文字が頭に蘇るの。気持ち悪いって。私は気持ち悪いんだって。

「……何なのよ、もう」

言いながら私は気が付いた。というより、思い出した。

荻原さんは、私と同じクラス。

てことは荻原さんは 私の名前が書かれた黒板を見たってこと？

「荻原さん。ねえ。黒板……見た？」

私が言葉足らずの疑問を発したのはもう四階を通り過ぎた時。私の目には、小さい背を見せながらびたりと止まった荻原さんと光りが少ししか届かない暗い空間にある 屋上へと続く扉しかなかった。私の声が聞こえたのか止まった荻原さんは、ゆっくりと振り返ると、私の顔を見ながらこう言ってきた。

「うん……見たよ、私。あの黒板に書かれた……芽救ちゃんの……」

「……あれ見て、どう思った？」

この時私が言うべき言葉は、本来なら「いいから早くドアからどいて」とか「そう。わかった」とかだったのかもしれないね。雄二のことが心配なのは確かだし、時間は着実に 彼の生徒が来るかもしれない時間は 着実に近付いていたから。

でも、私は敢えて言った。酷いことかもしれないね。ていうか酷いよ、私。

私……優しい荻原さんならきつと……「あんなの書いた人、許せない、よね」とか言ってくれると思ってる。それを聞いて、少しだけ心を軽くしようとしてる。

傷心状態の荻原さんに……私はそんな安易なことを期待していた。でも。

荻原さんは。

一度、輝かしい でも昔私に見せてくれた笑顔じゃなくて

黒い、笑顔を。

私に向けながら、女の子みたいな可愛い声で、こう言い放った。

「あーちゃんに言われたことがよくわかったよ。メグちゃん……気持ち悪い」

「……え」

私は聞こえた言葉を信じる事が出来なかった。だって……あんなにも可愛く笑って……私と、接してくれた、あんなにも優しい、荻原さんが、私を、あんだとか、私を、き、気持ち、悪いなんて、い、言う筈ない……言う筈、ない、じゃん！

「そんな……荻原さん……」

「あれ？ メグちゃん、聞こえなかった？ じゃあ、もう一回言うね」

「え」

「気持ち悪いの。もう喋りかけないでくれるかな？ ……私、あー

ちゃんに屋上に行けって言われてるから」

私が絶望にうちひしがれたような表情をしたのを見ても顔色を全く変えずに　笑顔のまま、ドアノブに手をかける荻原さん。私にはもう、屋上には入っちゃ駄目っていう元気さえ残っていなかった。俯く私にもわかる程の風が、開かれた扉から入ってくる。髪が靡くのを感じた私は、弱々しくも頭をあげて、屋上へと足をかける荻原さんの姿を見た。

そこから見えたのが　小さくなった荻原さんが中央に見える視界の端に居たのは。

「ゆ……雄二！」

太い縄で手と足を縛られて、安全の為につくられた緑色の高い柵にもたれた　体操座りに強制的にさせられた雄二の姿だった。その姿をみて今までの悲しみが全部とんだ私は、「雄二！」って叫びながら荻原さんの後をついて屋上へと足を向ける。「な、メグか！　駄目だ！　屋上には来るな！　あいつが居る！」っていう雄二の忠告なんか知ったことかだよ。そんなの気にするくらいだったら荻原さんの発言のこと気にした方がよっぽどためになるね、うん。

荻原さんが言うあーちゃんとか……雄二が言うあいつとかいう誰かが気になる私だったけど、向かい風を感じながら屋上に入り、一直線に走って雄二の元へ辿り着くと、私は聞いた。

いつの間にか、私の中には荻原さんの言葉の悲しみなんか消えていて。

ただ一つ。雄二の心配しか頭になかった。

「何であんたこんなに縛られてんのよ！　アラちゃん心配してたよ！」

「ま、真姫？　なんであいつがこんな時間に学校に居るんだ？」

「あんたの跡つけたに決まってるでしょうが！　仮にもボディーガードよボディーガード！　……そんなことは、今はどうでもいいから！　早くこの縄解いて……！」

手をかけたけど、きつくきつく縛られた縄は解ける気が全くしな

かった。何この茶色の糸で編まれた太い縄っ！腕も足も……全く解けないじゃん！

「め、メグ！俺はいいから早くここから逃げろ！」

「うるさい！ちよっと黙っててよ、雄二！」

言いながら出来る限りの力を込めて雄二の学ランと縄の間に指をねじ込もうとした私だけど、全つ然、入らない。びくともしない！何なのよ、この縄！いくらなんでも高校生の力を加えても全く動かないってのはおかしいでしょ！どんだけキツイ縛られた方してるのよ、雄二！

「もういい……もう、いいから！」

「もういいくない！いい訳ないじゃん！このままだとあんた何されるかわかったもんじゃないじゃん！」

「何言ってるんだ！俺より、お前の方が危ないんだっての！」

「……へ？」

言われて疑問に思う私。そう言えば……雄二の体には傷一つない。いつもの雄二の制服姿にないものは、雄二を縛る縄だけ。

じゃあ……何で雄二は二十分も動けない状態で縛られていたの？

それに、普通監禁とかなら口も塞ぐ……はずだよな。最近見た『必殺闇討ち人』でもそんな場面があった気がする。

だったら。

雄二は何の為に、縛られているの？

「メグ！後ろ！危ねえ！」

すると雄二の口からいきなりこんな大声が叫び出された。言われて振り向く私。

そこにあっただのは。

私の視線の先にあっただのは。

日曜日の深夜。

あの、黒尽くめの女が握っていたものと 同じだと思われるサバイバルナイフの

先端。

それが、私の額に向かって、力の限り突き出されていた　！
「キヤアアア！」

慌てて私が頭を下にして避ける。ナイフの先端が頭の上を　風
を切りながら通り過ぎるのを感じた。

「メゲ！　避ける！」

少ない言葉で私を恐怖から救いだしてくれた雄二の声に感謝しつつも、額から汗が流れるのを感じながら、私は雄二をそのままにして右に転がり込んだ。スカートの中身も多分まる見えだと思っけど、そんなどうでもいい体裁よりも気にしなきゃいけない存在が目の前に居る。

体が四、五回転くらいしたのを感じた後、私は起き上がり、視線の先　屋上の床と、四階へと向かうことが出来る扉を備えたマンションの一室みたいな大きさのコンクリートの直方体と、青空と、緑色の高い柵と

私にナイフを突き出してきた　人物。

クミクミに雄二の合成した写真を渡して、お金を見返りに私を力ツアゲさせた　人物。

鈴木に襲い掛かり鈴木の手を傷を負わせた　人物。

アラちゃんに取れない粉を被らせた　人物。

私の間違いを黒板いっばいに書いて私を気持ち悪いと断言した
人物。

荻原さんにあーちゃんと呼ばれている　人物。

雄二にあいつと呼ばれた　人物。

躊躇が出来ない筈の危険な雄二を何らかの方法で縛って動けなく
した　人物。

私に恨みをもった　人物が。

私の視界の中に、居た。

「ホントあんだ……よくウチの前に顔をだせたわね」
そこに居たのは。

私がよく知る　人物で。

紛れも無い 人物で。

幻とかでも幻覚とかでも なくて人物なのに。

私は一瞬、自分の見ている者が信じられなかった。

そんな そんな、人物。

「あ…… あーちゃんって…… そんな…… な……」

私の思わずもれた声を聞きとつたのか、「そうよ。ウチが あーちゃん」と断言する 人物。 あ

「荻原……さん……」

サバイバルナイフを悠然と構えるのは。

あーちゃん。

荻原彩さんの 姿だった。

「そうよ。ウチが、あーちゃん。ウチが、荻原彩。あんたがうざくてうざくて本当にうざくて何回死ねって思ったか数え切れなくなっちゃったのが……ウチ」

荻原さんは、さっきまでと同じ声で……なのに、淡々とうろく切った。

「そんな……そんな筈、ないじゃん！」

私は言いながら、荻原さんが『あーちゃん』じゃない理由を頭の中をフル回転して調べ上げていく。

「さっきまで、自分で『あーちゃん』に言われて屋上に来た」って言うたのは何だったの！」

「そんなの嘘に決まってるじゃない。てか叫ばないで。あんたの一声一声がウチの背筋を走るなんて気持ち悪いにも程があるから」

「……っ！　なんで……じゃあ、あれは！　クミクミ……久美さんに渡したお金は！」

「久美……って、ああ。あの不良のこと。言っていなかったっけ、あんたには。ウチ、お金持ちなの。お父様に頼んだらあれくらいのお金、簡単に用意出来るし」

「さ、さっきまで、私って言うてたり、に、日曜日の夜！　私に向かって言った声は荻原さんの声じゃなかった！」

「だから演技だつての、演技。やっぱりあんた、あの時ウチだつて気付いてなかったんだ。ほんつとに、馬鹿だわ。女なのに女が好きとか信じらんない……気安くウチに告白してんじゃねえよ！　キモいんだよ、あんたが！　存在自体が気持ち悪いんだよ！　消えろよ！　本当に死ねよ！　死んで死んで死んで死んで消え去りなさいよ！」

「そんな……な……」

こんなの……私の知ってる荻原さんじゃ……ない。

きつたなっ」っていいながら逃げる荻原さん。何も考えられずに横たわった私な背中を踏んで、踏んで、踏んで、踏んで、何度も何度も何度も……踏んで、踏んでくる荻原さん。いつもは助けしてくれる雄二も何か弱みを握られてるのかなんなのか……無言で動かない。私には、絶望しか、なかった。

「ああああああ、駄目だ駄目だこんなんじゃ駄目だ！ もっと！ こいつには！ キツイお灸が必要！ なんだよ！」
なのに。

なのに、荻原さんは。

私を更に、どん底へ突き落とそうとする。

「ねー雄二君。言っていいかなーもうさー？」

「や、やめろ！ 頼むから、言うな！」

荻原さんの言葉に慌てる雄二を見て、「やーん、可愛い」って体をくねらせる荻原さん。

「やっとウチを見てくれたね。やっとやっとやっとウチを見てくれたね。ウチは雄二君の楽しそうな姿や嬉しそうな姿や笑ってる姿や感動して涙を流す姿や……絶望してうちひしがれる姿や何もかも上手くいなくてやつ当たりする姿や怒った姿……全部好きなの。ゼーんぶ、好きなの。雄二君の全てがみたい。だから、言う。決めた、言う」

「やめろっ！ メグ！ 聞くな！ こいつの話しを聞くな！」

雄二が何か言ってるけど……もう、無理だよ。無理、だよ……気持ち悪いって言われたり、好きだった女の子に、こんな……こんな……。

「ほーらこいつ雄二君の話しなんて聞かないじゃーん。じゃあ言うね。メグちゃんのお、の、ぞ、み、ど、お、りっ」
「くそっ……くそっ！」

荻原さんが言っつて、雄二が言う。悔しそうに、言っつてる。

荻原さんは、横たわった私の耳元に口を近づけて　こつ言っつた。

「あなたの間違い……」
『同性を好きになる間違い』
だけじゃないわ
よ

「……………っ？」

私が声にならない声で、荻原さんに聞く。

今荻原さんは……………なんて……………言ったの？

私の間違いが、一つだけじゃない？

「ウチに顔向けるんじゃないっての」

私が荻原さんの顔を見ようと頭を傾けたら、いきなり荻原さんはサバイバルナイフで私の左耳を横に切り裂いてきた。

「うああ！ あああああっ！」

「うるさいっての。うるさいうるさいうるさいうるさいうるさい」

「あああ！ ああああ！ ぎゃあああああああ！ あぎぐっ！

ああ！」

うるさい、うるさい、うるさいと言っ度に私の耳に切り傷を付ける荻原さん……………痛い！ 痛い！ 痛い！ 痛い痛い！ 痛い痛い痛いやめてやめてやめてやめて！ やめてよお！ お願ひ、荻原さん！

「やめ……………て……………」

「うるさい」

「あぎゃあ！」

駄目……………もう……………駄目だっ……………何も……………もう……………考えられ、ないのに、こんなの、駄目……………。

助けてよ……………誰か……………。

「メゲ！」

「黙っててよ雄二君。動けないなら私だけを見てて。今こいつなぶるから。そうね、何から話そうかな。まずは、あんたの本当の『間違い』の数を言ってあげる」

言いながら私の頬に血のついたサバイバルナイフを横につけてくる荻原さん。ひんやりしたってことしかもう、耳の痛み以外に感じなかった。

「あなたの『間違い』は四つよ。『同性を好きになる間違い』と」
言って、頬を深く切る荻原さん。「いああつ！」と悶える私。

「『電話をかける相手を間違える』間違いと」

言って、頬を深く切る荻原さん。「うぎゃあ！」と悶える私。

「『電話での応対を間違える』間違いと」

言って、頬を深く切る荻原さん。「あぎゃあ！」と悶える私。

「『自分の間違いに対して記憶した筈の記憶を間違える』間違い」
言って、頬を深く切る荻原さん。「んぎゃあ！」と悶える私。

「あなたは毎日毎日雄二君に向けて、電話をかけていたつもりだろうけど……それが全部、毎日毎日ウチにかかってくるよ。去年の三月くらいからだだったわね。最初は訳がわからなかったの。周りに良い印象与えるためにウチがやってる猫かぶりをあなたがしてきて、ウチをあーちゃんって軽々しく呼んで。お呼びじゃないって言いたかったのに、あなたは毎日毎日嫌って程電話をかけてきた。翌日にウチが「なんで電話かけてくるの？」って聞いたのに、あなたの返事は「なんのこと？」一点張りだったわ」
「やめる荻原！ お前……それ以上言うなって！」
「あ、なーに雄二君！ ウチへの告白以外だったら今すぐこいつのほっぺたに五本目の切り傷増やすけど」
「なっ……」

切られた傷から鋭い痛みを感じる私。耳からも頬からも流れる血の存在を認めながら、私は荻原さんが今言った言葉を痛みで狂う私の頭で必死にまとめる。

思い至ったのは、私が尊敬する先輩の『覚えた筈の記憶を全て間違っただけ』間違い。

ああいう間違いが、もし私にあった場合。

それが、自分自身の『間違い』に関する間違いだった場合。

私は、卒業式で「俺、最悪！」って言い切った先輩を知っている。先輩は、自分の間違いに全身全霊で立ち向かっていた。

それでも、ぎりぎりなんとか対処しきれたくらいだった。

そんな感じの『間違い』がもし私にあったなら。

「私は……荻原さんと……あーちゃん、と……」

そして、その『間違い』の真実を　私が何も考えられない空っぽの状態で、ドスン、と突き付けられた時

私は一体、何に行き着くんだろう。

「あーちゃんと、逃走中の話しを、した」

「うるさい喋るな」

頬をまた切られたけど、痛みを感じたけど、真実を　私の真実を、丁寧に、確かめる。

「あーちゃんと、好きな人の話しを、した。あーちゃんは、雄二が彼氏だつて、言った」

「うるさいつての喋るな黙れ」

今度は縦に　唇の真ん中に傷を入れられた。痛い。痛いけど。

口の中に唇から出る血が流れるのを感じながら、私は、言う。

「あーちゃんが……じゃない。雄二から朝早くに電話がかかってきて、それで起きて。その電話にリダイヤルしようとして……あーちゃんの……荻原さんのケータイに……電話した」

「あーあーあー。そうだねそうですねー雄二君のケータイを奪いましたよはいはい！」

棒読みで言いながら、私の顔から離れると、私の右手におもいつきりナイフを突き刺してきた荻原さん。

「ぐぎゃあああああ！」

右手の甲から縦に異物が入ってくる感覚が、全身を伝う。鋭い痛みつてレベルを完全に越えた訳のわからないのが、私に悲鳴を叫べつて命令してくる。

「うざい、うざい、死ぬ、死ぬ、消えろ、消えろ、もっと、もっと泣けよ、鳴けよ、啼けよ、喚けよ、哭けよ、ナケヨ、ナケヨ、ピーピー喚いてウチを満足させるよ！　ほら！　ほら！　ほら！　ほら！　ほらあー！」

「あぎゃー！　ぎゃああー！　ぐぎゃあー！　あー！　ああー！　あああー！

力が何倍にもなっている雄二が走り、目を点にした荻原さんの顔を思いつきり殴り飛ばし、荻原さんの体が飛んで、頭から屋上の床のコンクリートにたたき付けられた音がした。

「すまない、メグ。こんな……こんなになるまで何も出来なかった……すまん！ 保健室に行くぞ！」

「う……ん……」

「喋らないでいい！ ただし寝るな！」

「き……きつ……いよ……それ……」

私はこう言いながらも、私の頭の後ろに手をまわして枕代わりにしてくれる雄二の声に安堵していた。荻原さんの声は聞こえない。多分、雄二の一撃で気絶したんだと思う。

青空を背景にして見える雄二の顔を見ながら、私は襲い掛かる睡魔に対抗しようとしたけど、無理だった。あ、やばい。これは本気でやばいかも。力が、入ら、ない。本気の本気で保険室行かないとやばい。

だけど。

「行かせ、ないわよ。雄二、君はあ、ウチのもの、だからあ……」

フラフラと。

荻原さんが、なけなしの意識でこう言ったように、聞こえた。雄二の顔が、横に向けられる。

雄二の口から、こんな言葉が、聞こえて、き、た。

「お前……死ぬか」

『躊躇が出来ない』雄、二が、学ランの内、側のポ、ケットから、銃を上手く扱、える』雄二が、銃、を、出す。

「ウチを、殺すの？ 雄二君なら、出来る、もんね。じゃあウチは、万々歳、だあ。雄二君の人生にい、ウチを、残せ、る、からあ」

雄二、は。

雄、二、は。

今ま、でに何、度も、見たこと、がある、あの、何も考えていないような、無、表情を、荻原、さんに、向け、る。

何、やつ、て、ん、の、よ、あんた、は、そ、ん、なこと、し、たら、こ、の、おん、な、の、お、も、う、つ、ぼ、じ、ゃ、ん。

「ゆ、う、じ」

「待て待て。今からこの女消すから待ってるな。その後保健室行こうぜ」

さ、いごの、力、を、ふ、り、し、ぼ、つ、て、言わ、ない、と。

ゆうじが、止まる、な、にか、を。

「雄二！」

「何だ？ どうしたよ、メグ？」

私、は。

わ、た、し、は。

ゆ、う、じに。

何、を、いいた、いんだ、ろう。

な、にを、い、え、ば、ゆ、う、じはと、まる、んだ、ろう。

なん、だかあたまのな、かが、ぐちゃ、ぐ、ち、ゃ、になつて。

何がな、んだか、わから、なくな、つ、て。

だけ、ど。

だけ、ど。

だけど！

言わなきゃ駄目、だ。言えば止まってくれかもしれないしそれにそれにそれにそれにそれに、、、、、、、、、、、、それに、、、、、、、、、、、、

私には今一番言いたいことが 昔から言いたいことがあるんだからっ！

私は。

全身が軋むのを感じながら。

横たわった状態のまま息を大きく吸い込んで。

雄二に向けて、こう叫んだ。

「大好き！」

全力を使い果たして血を流しすぎた私の意識が途切れる。

私は、多分一生忘れない。

意識が無くなる前の一瞬。

その、刹那。

私が雄二に向かって言った どストレートな告白を。

エピソード

「ふう……。怖いですねえ、近頃の若者は。ナイフで何箇所も刺す女の子や、銃を撃つ男の子……。怖いですよ、先生は」

「そうですね。でももつと怖いのは、メグをこんな目に合わせた荻原彩の持っていた間違いが『挨拶をするタイミングを間違える』というものだったことだと思います。そんな間違いしか持っていないかっただのに、こんな酷いことをメグにするなんて……」

「確かにねえ。この街の人間なら誰しも必ず間違える『間違い』なんかよりも一番気をつけなくてはならないのは……。人間そのものなにかもしれません。いずれにせよ、荻原さんという女の子は学校にはもう戻れないでしょう。その……。何でしたっけ……。た、た、たな」

「田中雄二君のことですか？」

「そうそう、田中君。田中君のストーカー被害はこれだけでなくなるでしょうね。過程がどうあれ、終わりよければ全て良しです」

「……。そうですね」

私が意識を取り戻すと、視界には白い天井と、私が横たわっているその傍でメガネをかけた白衣のヒゲ面な先生と、全身真っ白からすっかり元通りになったアラちゃんの私服な姿があった。

「……う」

「あ。大丈夫ですか、メグ？」

「おっと、起きたようですね」

私が一言呟くと、アラちゃんとメガネの先生は私に向けて安心した声を出す。体を起こそうとすると、痛みが私の意志を邪魔してきた。ああはいはいわかりましたよ動きませんったら。口だけ動かさせてもらいますよ、はいはい。

「うつつ、痛い。こごとこ？」

言って私は唇が切れていることに気が付いた。おーいこれ物凄く喋りにくいんですけども。まあでも今の私には喋ることと女の子の

色々なところを舐めるしか出来ないから、頑張つて喋らせて貰つとしましようかね、はい。

私でもご口を動かしてるのを見ると、アラちゃんが笑顔で私にこう言ってくる。

「病院ですよ。貴女、三日間ずっと寝っぱなしだったんですから」

「……そうだ、雄二は！ 雄二はどうなったの！」

私がこう叫ぶと、メガネの先生とアラちゃんが暗い顔で俯き始めた。俯いたことによつて顔が一層私に近づくんだけど、両方とも目をつぶってるからわかつてないんだろくなー。

でもここでこういう反応するつてことはもしかして……。

「ちよ、ちよつと待つてよ、アラちゃん！ まさかあいつ、一発撃つちやつて刑務所行きとかじゃないよね！」

「すいません、メグ……私の力不足でした」

「そん……な……」

悲しそうな顔でそう言うアラちゃん。間に合わなかった……つてことなの？ じゃあ私はこれから先、雄二とは学校で……会えないの？ それどころか、たまにしか会えなくなるつてこと？

もしかしたら。

もう二度と、会えないかもしれないつてこと？

私がそんな風に呆然とした顔で無言になるのを見たアラちゃんは、口の端で笑いそうになるのを堪えている。そんな笑顔で、こう言つてきた。

「雄二君は今、刑務所で雄二君のお父様に説教を受けています」

「……え？」

アラちゃん言葉で意味不明になる私。

説教つて何？

一体全体どういうこと？

はてなハテナの集大成がうごめく私の頭だったけど、なんとかアラちゃんに「……雄二は何したの？」つて言い切ることができた。

「雄二君は銃を一発撃つたんですよ、メグ」

「そう、なんだ。結局あいつ、撃っちゃったんだ……。……誰に撃つたの？ 荻原さんに、撃っちゃったの？」

「いいえ、違います。空に、です」

「は？」

私は笑顔で言い切るアラちゃんの言葉にまたもや訳がわからなくなりまして。空についてどうということなのさね。何で空なんかに銃を撃つたのさ、雄二は。

……うーむ。

あー、まあでもなんやかんやいつて最終的には荻原さんを撃つた訳じゃないんだって少し安堵した私に、「雄二君が言うには……。です」ね」と笑顔のアラちゃんから 一時の勢いが生み出した 一生後悔で苦しむことになりそうな事実を聞かされました。

「雄二君は、メグからの告白で舞い上がってしまったらしいですよ。撃つた後、そのまま嬉しさのあまり気を失ってしまっただけです。第一発見者の話しによると、雄二君の顔は赤かったらしいですし」

「な……。え、ええ！」

言われて私は思い出した。いやいや、本当のところをいうと、覚えてはいたけど思い返すのが恥ずかし過ぎたことなただけだね、これ。

うわ……。うわああっ！

私……。あの時、無我夢中で一体全体何を口走っちゃったのよ！

「きゃあああああ！ 私、私……。私、雄二なんか好きじゃないしー！ 雄二なんかどうでもいいしー！ ていうか雄二なんかよりも断然アラちゃんの方が好きだしー！ い、今でも私、アラちゃんの唇を奪いたいと思ってるしー！」

あたふたしながらやばいことを言う私を見てどん引きするお医者さんと、はいはいわかりましたよもう慣れましたよメグとでも言いたげな笑顔を私に見せるアラちゃん。そ、そうだよ！ 私はアラちゃん大好き！ そして全校の女子高生の皆さん並びに全国の全女性が大好きなんだあ！ 決して絶対百パーセント間違いない圧倒的に

雄二が大好きなんて……有り得ないっ！

私が「うつつ……違うの、違うもん」って唸るのを見てため息をついたアラちゃんは、私の右耳　切り傷が片方と比べて少ししかない方の耳に口を近づけて、ボソリと魅惑の女王みたいに呟くアラちゃん。

「……雄二君の唇を奪いたいとは思わないんですか」

「うつつ！　う、うつつ……お、思わないよ！」

「否定までの時間がメグにしては長いですね。丸つきり嘘ではないんじゃないですか？」

「そ、そんなこと、ないもんさっ！　雄二なんか……雄二なんか……」

「顔が赤いですよ、メグ。雄二君なんか……何でしょうかね。私はその続きが気になります」

「……アラちゃんの意地悪」

私がそう呟くと、アラちゃんは一瞬呆気にとられた笑顔をしながらも、そのままニッコリ笑って、私にこう言ってきました。

「やっと、素直になれたんですね、メグ。その代償がこんなボロボロな姿というのは些かどうかと思いますが……まあ、顔に傷は残らないみたいなので、プラマイゼロと言い切ってしまうてもいいかもしれません」

「え？」

アラちゃんに言われて頬を触ろうとした私だっただけけど、残念ながら痛みで腕の動きがゆっくりになっっちゃったんだよね、これがさ。でもまあゆっくりにゆっくりにふかふかの布団の中から右腕を出した私は、手の甲と掌にガーゼが巻かれているのを確認しながら、頬を触ってみました。そしたら普通に布の感触が私の手を伝う。どうやらドデカ盤バンドエイドが貼られてるみたいだね。……荻原さんが凄く深く切り付けていたからどうなるかわからなかったけど、アラちゃんの言う通りなら傷は残らないみたいだから、とりあえず私は安心しました、はい。

フウ、と安心の溜め息をつく私。色々なことがあったなー、今日は。

……ってちょっと待ってよ。

「今日って、何曜日？」

「木曜日です。丸三日寝てましたからね、貴女は」

「木曜日……そっかあ……必殺闇討ち人の録画ちゃんと出来てるかな……」

「……なんですかその物騒なタイトルは」

「あ、アラちゃん知らない？ 私が美人秘書カオリさんの役で友情出演してる大河ドラマなんだけどさ」

「そのタイトルと世界観で大河ドラマなんですか……。ちょっと私見たくなりました」

何曜日にやってるドラマなんですか？ って聞くアラちゃんに毎日放送してるよって返す私。アラちゃんは再度驚いていたけど、お医者さんが「あーあのドラマですか。いいですよー毎回毎回に起こるあのどんでん返し。先週の地球消滅エンドには驚きましたよー。まさか大きな手が地球を一掃するとは」ってうっとり語るのを見たアラちゃんが「……絶対に見ます、必殺闇討ち人」って決心してた拳を顔の前でにぎりしめてよっしゃってな感じで断言するアラちゃん……やっぱり可愛いよ！ 可愛いよ、アラちゃん！

「可愛いなーホントもうさーアラちゃんのうなじを指でツーってなぞって「ひゃん！」って喘ぐアラちゃんがみたいなー私」

「一人でやってなさい」

「じゃ、じゃあやるね！ って痛いっ！ 体全体が痛い！」

「ほらほら。動かない方がいいですよ、メグ」

「何さー！ アラちゃんがやれって言ったんじゃない！ 何なのさーホントさー！」

「……一時間安静にしていたらいくらでも喘いであげますよ」

「了解ですアラちゃんさん！」

「さん付けってどういう意味ですか。まあ……いいです。とりあえ

ず、メグに聞きたいことがあるので、答えて下さい」

私が布団の下に右腕を忍ばせたのを見て安心すると、アラちゃんは私にこんな風に尋ねてきた。ん？ アラちゃんが私に聞きたいことって何なんだろ。

というよりか……寧ろ私の方が聞きたいこと山程あるんだけど。

そう思った私は、アラちゃんが「じゃあメグ。今から私の質問に答えて下さい」って言い切った後、「ごめんアラちゃん。今から私の質問に答えて」って言った。私の言葉に口を開けたまま呆然としたアラちゃんだったんだけど、そこは流石アラちゃんといったところ。直ぐに口を閉じたアラちゃんは、溜め息を一回つく……「わかりました。そう言えばメグは三日間寝ていたんですね。聞いたことはいっぱいあるでしょう。私の質問なんて些細なことですので、遠慮しないでなんでも聞いて下さい」って私に言ってくれた。本当にありがと、アラちゃん。アラちゃんのそういう臨機応変な優しさ……可愛いと思う。単なる良いじゃないところがミソだよ皆の衆。

私とアラちゃんがそう言うと、「じゃあ後でまた来ます。話しが一段落したら先生を呼んで下さい。外で待っている親御さんもついでに呼びますから」って椅子から立ち上がってお医者さんがその場を離れてくれた。有り難いなーこういう対応。本当だったらママパパ呼んだ上で検査とか色々しなきゃならない筈なのに。

「……じゃあ聞くな、アラちゃん」

「はい。何でもいいですよ」

「えーと……アラちゃんが取れないって言ってたあの白い粉ってどうなったの？」

「ああ、あれですか。荻原が逮捕される前に、私が修正剤を貰いました。どうやら自分の父親に頼み込んで手に入れたいわくつきの物らしいです。暗闇の空間……とかいう科学者団体の人が、翌日、私に謝りに来てくれました」

「へー。じゃああの白いの取れたんだね？」

「はい。もう大丈夫です」

「あー良かった。あんな白い粉がずっとアラちゃんの頭の上に付いてたら鈴木と一体どんなプレイをしてたんだいって疑問に行き着いちやうじゃないさ。そりゃキツイものがありますよ。私の場合、白いは液体のやつしか出せないからさ。そういう点では鈴木ズルイよな」。あんなドロドロしたのよく出せるよ、ホント。

「あ、だったら……あの黒板のやつ……ばれなかった？ 消せたんだよね？」

「……厳密に言うと、消せませんでした」

「え……ってことは、私の間違い、ばれちゃった？」

「……第一発見者が見つけた時にはもう七時二十分を越えるか越えないかの瀬戸際だったので、放課後には消せたのですが……間に合わなかったんです」

「そっ……か……」

「これで、私の学校生活も終わりだね。私の間違いがばれちゃったら……誰も私に近づかなくなっちゃうからさ。当然、雄二にもアラちゃんにも近づけないや。迷惑かけちゃうからね、二人に。」

「私が悲しい顔で無言になったのを見ると、「ち、違いますよ、メグ。大丈夫です。貴女の間違いはばれてません」って慌てながらアラちゃんが私にそう言ってきた。」

「え？ どういうこと？」

「三人が倒れていた場面を見た第一発見者は私です。黒板の文字を何とかした私が屋上にすぐに戻ったから、メグを助けることができたんですよ」

「……どうやって黒板の文字を消したの？」

「アラちゃんに感謝しながらも私がこう言うと、アラちゃんはまあまあ大きな胸を張って「フッフ、驚かないで下さいよ、メグ」ってこんなことを発言してきた。」

「黒板自体を引っがして、その後黒板を粉々にさせて頂きました」
「……………」

アラちゃんの言葉を聞いて思わず無言になる私。というかアラちゃん怖っ！ 日曜日の深夜にも感じたけど、どんだけ力あるのさアラちゃん！ 黒板引っぺがすって！ 引っぺがした後粉々にするって……アラちゃんどんだけ！

「あら？ どうしましたか、メグ。顔が青いですよ」

「……ははは。何でもないから心配しないで、アラちゃん」

私がこう返事をする、アラちゃんは「そうですか。では、他にメグが聞きたいことはありますか」って言って私の質問を催促してくれた。うーん、後聞きたいことは……ってな感じで頭を働かせる、私を気持ち悪いって言うてきた あの女の子の姿が思い浮かびました。

雄二のストーカーで、私をスタボロにした女の子。

荻原さんのことだけ、かな。

「荻原さんって……どうなるの？」

私がそう聞くと、苦しそうな笑顔をしながら、アラちゃんが私に言うてくれた。

「メグにこんなことをした荻原は、当然逮捕されました。もう二度と、私とメグが会うことはないと思います」

「……そっか」

言われて見れば当然だよ。いくら女子高生とはいえ、ナイフで私をこんなにしちゃったら……罪からは免れないんだ。

私が苦悶の表情で荻原さんの……あーちゃんのことを考えていると、同じく苦悶の笑顔で無言になってるアラちゃんの姿に気付いた。

「どうしたのアラちゃん無言になっちゃってさ。賢者モード？」

「うるさいですよメグ。いえ……たいしたことではないと思うんですが……。メグ。私、貴女に雄二君の文字で書かれたメモ用紙を見せましたよね」

「うん。汚かったねーあれ。昔っからあんな字なんだよ、あいつ」

「雄二君は、そんなメモのことは知らないって言うんです」

「……へ？」

何言ってるんのさアラちゃんあんな文字雄二しか書けないってとか言ってるアラちゃんと笑おうとした私だったんだけど、ここで私は思い出した。

雄二……あいつ、屋上で私が「アラちゃん心配してるよ」とか言った時、「なんで真姫がいるんだ？」とか言ってるなかつたっけ？

……ということは。

あのメモ用紙の汚いメモ書きは、雄二が書いたんじゃないってこと？

じゃあ、誰があんなメモを残したんだろ。

そうやって考え始めて直ぐさまわ私が出した結論は、アラちゃん以外の雄二のボディガード 鈴木だった。

「てことは……鈴木がわざわざ雄二の文字を真似て私を屋上に向かわせたってことかな？」

「いえいえ。琢磨君はあの時、『一日に三時間しか寝れない間違いのせいで寝ていましたから」

「……ど、どういうこと？」

「一日に三時間しか寝れないということはつまり、一日に三時間は必ず寝なければいけないという意味なんですよ、メグ。琢磨君は前日の雄二君の護衛で、寝ていませんでしたから」

「いやいやいやいや、そうじゃなくて！ 鈴木の間違い云々なんかどうでもいいよー！」

私が心底どうでもいいような口調でこう言うと、「じゃあ何が聞きたいんですか貴女は」ってちょっと怒りながらアラちゃんが私に聞いてきた。うう、ごめんねアラちゃん。アラちゃんは鈴木の話をするのが大好きかもしれないけど、私は鈴木の話しを聞くのが大嫌いなんだよー。

それでもって、私はアラちゃんに真に聞きたいことを聞こうとした。

「アラちゅわあん！」

「なんなんですかそのノリ」

「アラちゃんさアラちゃんさ、前さ、私に三十六時間満足させられますかとか聞いてたじゃん！ 鈴木がそんな間違い持つてるなら、三十六時間ずっとアラちゃんを満足させるなんて無理じゃん！」
すると私がこう聞くと、アラちゃんは人差し指を唇に当てながら、右目を閉じるウインクをして、こう言ってきた。

「女には、色々あるんです」

「……………」

ハハハハハ……どうやらもしかしたら、私の敵は……鈴木だけじゃないのかもしれないねーこれ。アラちゃんの発言は所謂問題発言だったんだけど、アラちゃんのウインクが魔性の魅力過ぎて何だかどうでもよくなっちゃったよ、私。こんなに美人なアラちゃん初めて見た。うわー、忘れられそうにないや。

ミステリアス。

アラちゃんの魅力がまた一つ増えちゃったね、うん。ますます私の我慢がやばいや。今にも決壊しそうだったんだけどなんとか持ちこたえた私は、「じゃ、じゃあ……誰があメモを書いたのかな」ってアラちゃんに聞いてみた。

そしたらアラちゃんは、意外な人物の名前を言いました。

「おそらくですが、私が思うに……荻原彩だと」

「……荻原さん？ 荻原さんがあのメモを書いたの？」

言われて私はアラちゃんが何をいいたいのかわからなかったんだけど、ゆっくり考えていく内に、徐々に理解してきた。

そうだった。

荻原さんは……雄二のストーカーだったんだ。

「まず、私と琢磨君が雄二君のボディガードだと知っている人自体が少ないんです。そしてその上で、雄二君の字を真似出来るのは……雄二君を愛し過ぎてこんなことを起こしてしまった荻原彩しか……居ないと思うんです」

「……………」

アラちゃんにこう言われて、私は思い出す。荻原さんが叫びなが

ら私の体に何度も刺したナイフの先には……手とかほっぺたとか……
…そういう、致命傷を避けた場所しかなかった。

「あくまでもこれは仮説です。何か理由があったとしても、結果的にはメグをこんな目にあわせた荻原を私は許せません。ですが、もし……もしですよ。月曜日のあの騒動がなければ、メグの気持ちが雄二君に伝わるのはまた大分先になっていたでしょう」

「な、アラちゃん私、雄二のこと好きじゃな」

「ですから、私はこう思います。もしかしたら荻原彩は……雄二君が好きで相手のメグ……所謂恋敵が、女の子が好きだ女の子が好きだと言いつけるのが……許せなかったのではないでしょうか」

私の言葉を遮ってこう言ったアラちゃんは、またもや無言で考え込み始めた。

そうなんだよね。

私はこの通り、無茶苦茶痛かったこと死ぬことは無かったんだよ。

それに、荻原さん あーちゃんは。

去年の三月から。

私が荻原さんを好きになった去年の三月から。

『好きな子にしか電話をかけられない間違い』と『好きな子の上辺の姿を真似てしか電話で話せない間違い』と『間違いについての記憶を一日ごとに消してしまう間違い』をもった私とずっと……電話をし続けてくれたんだもん。

あーちゃんも、何か思うことがあって雄二を監禁したのかもしれないんだ。

「……………あれ？」

色んな感情がごちゃ混ぜになってた私んだけど、ふと、私は重要なことに気が付きました。

今日は、木曜日。

月曜日に私の『間違い』を知ってから、三日経ってる。

なのに……私は、私自身の間違いについての記憶を失っていないんじゃないかいこれ？

「私の『間違い』……一体どうなってるの……？」

「メグも気が付きましたか」

私が呟くと、無言だったアラちゃんが私に乗じてくれた。

「貴女は『同性を好きになる間違い』を持っていた筈なんです。これは絶対間違える『間違い』なので、雄二君に良い印象を持つことはあっても、好意を持つとは考えていなかったんです。しかし、貴女は雄二君に好意を抱きました。これは異常事態なんです」

アラちゃんがひっかかった所と私がひっかかった所は違う部分だったんだけど、言いたいことは大体似たような感じだったから私はそのまま会話を続行することにした。

「え、アラちゃん前私に雄二を押し倒せとか言ってたっけ？」

「そんなの冗談に決まってるでしょう。もし実際に貴女が雄二君を押し倒してもしたら、ボディガードとして、直ぐに私が貴女を止めにかかる予定でしたから」

「……てことはアラちゃん、逆に私を押し倒してくれるの！ よっしゃ絶対雄二押し倒してやる！」

「その言葉忘れませんからね、私。やり切って下さいよ」

「んぐ……」

アラちゃんのどこまでが嘘でどこまでが本当かよくわからない思わせぶりな発言に失言しちゃった私。い、いやいやいやしないし。雄二を押し倒すなんて……うつつ、無理だよそんなの。恥ずかし過ぎる。

私がその場を取り繕うように慌てながら大急ぎで「あ、アラちゃんあのさ、結局私の『間違い』がどうなったか知ってる？」って聞くと、アラちゃんは「ええ。先ほどのお医者様に、メグの間違いがどうなっているのかを聞きましたから」ってあっさりと言い返してきた。

「……ホント？ 私、結局どんな間違いを持つてるの？」

「その前に、メグ。これだけは言わせて下さい」

「うつつアラちゃんの気迫におされてしまった私は、気付くと」

な、何かなアラちゃん」って聞き返してた。

「いいですか。例え貴女が同性を好きになるとしても 例え貴女が雄二君を好きになるとしても それは決して『間違い』なんかじゃありません。この国がそれを間違いだと認めても、私はそれを認めませんし、メグもそれを認めないでください。そうすれば、それは間違いではなくなりますから」

「……………うん。うん。ありがとう、アラちゃん」

私はいつの間にか、ズタズタになった顔にある目から涙を一筋流していた。なんか……………アラちゃんの言葉で、荻原さんに言われた全てが消え去ったような気持ちがしたんだよ。

気持ち悪くないんだよね？

私、気持ち悪くないんだよね？

一度私が告白した人にああいう風に言われたら、それを信じるしかないじゃん。それに、続けるしかないじゃん。

他でもないアラちゃんが、そう言ってくれたんだから。

「ほらほら。泣いていては始まりませんよ、メグ。今から貴女にはやって欲しいことがあるんですから」

「ヒグツ……………何、アラちゃん。私、アラちゃんの頼み事ならなんでも聞く。なんでも言うし、なんでもやるよ。……………ありがとう。ありがとう、アラちゃん」

「……………いけませんね。なんだかこっちまで泣けてきますんで、早々にメグにやってもらうことにしましょう」

笑顔の目に流れる何かを人差し指で拭き取りながら、アラちゃんは履いていた青いジーンパンのポケットから、予想外のものを取り出してきた。

「聞かせて下さい、メグ。貴女が今、一番電話をしたい相手は誰ですか？」

それは、折りたたみ式の 携帯電話だった。

両手で丁寧に差し出されたケータイを、私はゆっくり布団から右手を出して、受け取る。

昔から、私が電話をしたかった相手は一人しかいない。だから、あいつの家の電話番号もあいつのケータイの電話番号も、完全に記憶してるのさ、私は。

「……へへへ」

思わずにやける私。

もし私が持つ『間違い』が 四つじゃなくて 五つ以上あったとして。

その中の四つの『間違い』が、あーちゃんに切り付けられた衝撃によって綺麗さっぱりなくなっていたら。

私の 赤色の間違いが綺麗さっぱりなくなっていたら。

私の今話したいことを、あいつに言うことが出来るのかな？

出来たら、いいなあ。

いや……絶対に、出来る筈。出来なきゃおかしい。てか出来るよ

この野郎。

「あ……」

そして。

私はこの時、確信したんだよ。

自分が持つ間違いや、自分が起こしてしまった間違いには、自身が立ち向かおうとしないと何も変わらないってことを。

他人からの勝手な評価も。

こんなの無理だって思うことも。

自分から立ち向かわないと、何も変わらないんだ。

「一、零、二……」

私はゆっくり、一言一言呟きながらアラちゃんの黒いケータイの番号を押していった。

そうして。

私が押していったそれらの番号が、あいつのケータイの電話番号を表した時。

私は通話ボタンを押して、心臓の鼓動が激しくなるのを感じながら、ケータイを耳にあてた。

ある電話の会話にて。

私が電話の先から聞こえてきた声に泣きなくなるような喜びを貰うのは、これから数秒後のこと。

「もしもし？ 私です。……メグです。私が今話せている、あなたは一体誰ですか？」

今度は三人称なんか書いてみたいなー。まあでもその間にテストがあるんで結構きついかもしれせん。
なにはともあれ。

変態がはびこる今作を読了していただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5449k/>

間違える人と間違えている人の違い

2010年10月8日15時12分発行